

を懐くにあらず。一同所存の奥底を。伏藏なく吐露なして。猶も建白いたさん爲め。就ては御達の御趣意。早速一同へ披露なし。申聞す御座りませうと。個様に答へ申して御座る。

十兵「成程々々。それで俄の御召集で御座つたか。シテ唯今。御徒目付が参つたは。

寅次「昨夜あれほど達せしに。未だ退散いたさぬは。甚だ以て其意を得ず。今日正午までに當所をば。引拂はざる其時は。徒黨と見做し。鎮撫の人数を差向くれば。其の旨急度心得よと。御目付よりの厳しき達し。

荒三「それに對して御返答は。

寅次「同志は餘程の多人數にて。相諭すにも手間取れますれば。今宵初夜まで退散を。御猶豫願ひ奉ると。答へました。

熊藏「御徒目付は。それを承知いたしましたか。

寅次「イヤ彼が申す口上には。拙者事は御目付衆の御達を。傳達いたす迄の御使。猶豫の願ひ。承はるべき役目で御座らぬと。拒絶いたしました。

十兵「然らば今にも幕府の人数。押し寄せ参るも計られず。

寅次「ワハ、ハ、ハ。正午を限りと達の面。然るに今ははや午過。それに人数の参らぬ様では。恐

るよ所は些とも御座らぬ。

荒三「誠その通り。今も今とて其事を。拙者も申た所で御座つた。但し御目付衆の達に付て。御前様の御決心は。

寅次「先づ御銘々の。御決心から承はらう。

荒三「餘人は格別。この小濱荒三郎は。何事ありとも。前議を堅く相守り。趣意を貫く所存で御座る。

熊藏「拙者とても其通り。

十兵「拙者も同様。

皆々「其決心で御座りまする。

寅次「感服いたしました。此寅次郎も其決心。飽まで是に屯なし。同志一味の寄るを待受け。

荒三「其中押寄せ参りなば。唯一戦に打破り。佞人奸吏の肝魂を。取控いで呉るで御座らう。

熊藏「とは言ふものと唯今まで。人数の着到少なきは。

寅次「御案じ召さるな。今夜の子の刻過までには。二千の人数は大丈夫。きつと集り申す手筈。それに附ても。高木伊織へ此次第。まだ打合せを致さねば。十兵衛殿。御苦勞ながら表門へ参られ

あはれ浮世

て。暫く伊織と御代り下され。
十兵衛承知いたしました。

十兵衛は槍を提て、表門の方へゆく、寅次郎は一同に向ひて。
寅次「幕府の人数。今日明日には迎も参りは致すまいが。併し油断は會て相成らぬ。兵器彈藥其外の。用意は如何運びましたか。

熊蔵「サア。夫には確と當惑いたしました。尤も小銃はゲベルミチーを取交て。二百挺は集りましたが。彈藥としては漸々やつと三百發。

荒三「僅か三百發の彈藥では……
諸士落膽の色を見て

寅次「アイヤ彈藥の不足は。御心配に及ばぬ。夕方までには二千發。送つて参る手筈で御座る。

熊蔵「左様で御座るか。夫で安心仕た。イヤ何を申すも。昨夜よりして俄の手配り。兼ての順序も剛離いたし。何から何まで不都合至極。それに附ても何者が。同志の内情探索なし。其筋へは告たるか。

荒三「扱々。憎ツくき奴等で御座る。

是を聞いて、五郎吉は寅次郎に對ひて

五郎「殿様。その告口を致したは。岡ツ引の探索で御座います。

寅次「シテ其探索は何れに居つたな。

五郎「それ。つい其所に。あれが探索で御座います。

鬼兵衛を指示せば
熊蔵「ナニ。あの者が探索とな。
是を聞いて鬼兵衛。逃出しに掛れば

寅次「それ取押へい。
皆々「心得た。

甲乙等の諸士、鬼兵衛が逃るを追掛け廻して、遂に取押へ、繩を掛けて、寅次郎の前に引据る。
寅次「其方。幕吏の探索を勤めながら。何故あつて人夫には姿を扮し。此所へ罷越した。
鬼兵「こりやア思ひ掛ないお疑ひ。私 は左様な者じやア御座いません。此四谷で荒木横町に居ります。権右衛門と申す。日雇稼のものです。御座います。

五郎「イ、エ。ありやア嘘で御座います。此奴ア籍名を蛇の道と申しまして。三河屋鬼兵衛と云ふ。
あはれ浮世

評判の隠密で御座います。欺されちやア可ませんよ。

高木伊織は、此前に表門の方より此所に来り居たるが、鬼兵衛の顔を見て

伊織「何にも見覚えある此奴が面付。隠密の鬼兵衛に相違御座らぬ。

荒三「ムツ思ひ出した。去る廿日中村屋の集會にちらと見受た町人客。隣席に酔倒れ。正體なけに見えたるは。此奴で御座つた。

伊織「扱はおのれ。疾よりして我々の。密議の次第を探索なし。其筋へは訴人せしよな。サア誰の言附。誰の差圖で致しをつた。エ、ぐづく致さば軍の血祭。なぶり殺しに致してくれろぞ。

鬼兵衛は、叶はぬ所と覺悟を極めて

鬼兵「かう知れたら仕方無エ。何にも私ア町方の御用聞。三河屋鬼兵衛で御座います。誰の差圖誰の言附でも御座エませんが。怪しい様子を見受たから。探索するのが私の役目。何も不思議は

御座エません。併しお目付方の隠密や。加役の衆の見た様に。當推量とは譯が違ひ。儘に見た事聞いた事。逐一残らず奉行所へ。注進する此鬼兵衛。貴君がたの相談も。聞いた通りに申しました。サアかう白状するからは。活すとも殺すとも。どうなりとも成せエまし。

伊織「ム、よく申した。然らば密告された腹いせに。思ふ存分切さいなみ。苦痛をさせて殺してや

らう。

皆々「左様いたさう。

寅次「アイヤ。お待なされ。唯今は殺すに及ばぬ。あちらへ連れて戒め置き。仕置をするは追ての事。甲乙「承知いたした。

鬼兵衛を引立て、庫裏の方へゆく。

伊織「扱は幕府の奸吏ども。我等が決議を知つたるも。彼奴が密告なしたる故。成程その砌り鞠子

金之丞が。輕卒至極と申したも。唯今おもへば的中いたす。併し其鞠子が。いまだ駈付参らぬは。荒三「もしや中途で變心を。致したでは御座るまいか。

荒次「ナンノ。變心いたす鞠子で無い。今にも着到いたすで御座らう。

此時向ふより、鞭笠を合せて、鞠子金之丞馳せ來り、裏門より馬を乗入れ

金之「寅次郎殿を初として。御一同にはそれへ御座るか。

寅次「金之丞殿。御出ありしか。

金之「御山斷あるな。町方加役。程なく是へ押寄せ参り。二の見の勢は新徴組。

あはれ浮世

これも既に出陣の

手練を致して居りますので。

一同は愕きて騒ぎ立ち

198. 荒三「何と仰しやる。幕府の人数が。既に抑よせ参るとな。夫にしても此方は。同志の一味。いま

だ着到いたさねば。百人足らずの小人数。

熊藏「弾薬とても甚だ不足。防戦いたすに覺束ないが。如何いたしたもので御座らう。

寅次郎伊織も、頗る當惑の體なり。是を見て金之丞は打笑ひ

金之「ワハ、ハ。頭は何百あらうとも。取るに足らざる町方加役。(甲乙等を見て)各方には御苦勞

ながら。拙者と共に。表門へ御出下され。

甲乙等「承知で御座る。

小銃を以て整列すれば

寅次「シテ表門をば。如何召さるな。

金之「不肖ながら金之丞。承はつて相固め。寄手の勢に一泡ふかせ。追退けて御覽に入やう。

伊織「僅か其人數にて。

金之「相手に取つて少し堪のありさうなは。新徴組の二の見ばかり。大手は必らず御案があるな。但

し當幸の境内は。要害甚だ淺間のゑ。寅次郎殿。伊織殿。萬事は御兩所御差圖あつて。

寅次「其儀は承知いたしたが。何を云ふにも味方は僅の小勢にて。惣體合せて百人足らず。

伊織「援兵とても着到の。見据も立たぬ俄の防戦。先日御説のあつたる如く。早まり過た我等の決議。

荒三「今更思へば我々の。宿志も空しく。

皆々「是切にて。...

金之「アイヤ。成功いたすは慥で御座る。寅次郎殿。いで其上は祝酒を汲み。早く勝利を御祝召され。

寅次郎も夫と悟りて

寅次「何さま。勝利を祝ふと致さう。

伊織「ナニ勝利を唯今祝ふとは。

寅次「ハテ勝軍の前祝ひ。

隅の方にある酒樽を、前へ出させ、寅次郎槍の石突を以て、鏡をボンと明くれば

金之「ムツ勇しいく。

勇氣を鼓舞する。此時表門の方にて、遠寄の物音聞ゆる。

あはれ浮世

(道具廻ル)

(二) 同 表門前 (午後)

香龍寺の表門は、即ち有志會合場所の大手なり。大門の扉を、緊く締め切り、門前には土俵を積み、胸壁となし、一二の有志家小銃を携へて番兵をなし、耳を澄して

有志一「だいぶ物音が。近く成た様で御座るが。唯今承はつた様子では。町方加役兩手の人数。押よせ参ると申す事。
有志二「フウ。高の知れたる與力同心。それには鞠子金之丞殿。駈付られし上からは。

有志一「懸引萬端差圖あれば。
有志二「大丈夫な事で御座る。
此時向ふより柳橋の唄女お榮、裾もあらはにかけ來りて

お榮「香龍寺と云ふのはあのお寺。ム、さうじや。
門前に來り、一二に向ひて
「申し御尋申しまするが。あの鞠子金之丞様と云ふ御方は。此方へ御越になりましたか。御存知なら。御聞せなすッて下さりませ。

有「その鞠子金之丞殿には唯今當所へ。御駈付に相成たが。

お榮「さうで御座りまするかそれじやア御免下さりませ。

土俵の傍より、門内に入らんとすれば。是を支へて

有二「これさく。此へ入る事は相成らぬワ。
お榮「ハイそれでも私は。鞠子様へ御目に掛つて。御話し仕度用事があるゆゑ。お通しなすッて下さりませ。

有二「たとへ鞠子殿へ用事があるとも。唯今にも幕府の人数。押よせ参る此さい中に。

有「婦人の身として此邊を。徘徊いたすは甚だ危険。早く此を立去ッせエ。
お榮「イエ。怪我を仕やうが殺され様か。少しも。厭ひは無ほどに。後生だから。私を鞠子様へモウ一度。ちよつと逢はせて下さりませ。もし此通り拜みまする。

有「ハテ聞分の無い婦人だのウ。唯今非常の折柄なれば。何と理を申すとも。

有二「相通す事相成らぬ。

兩士はお榮を土俵の外より、離れたる所へ追退ける。
向ふより町方與力足柄與太右衛門、加役與力鶴目鷹五郎の兩人大將にて同心十人鐵砲同心五人

あはれ浮世

長柄其後より捕手のもの手先大勢、長十手棒など持ち、門前に押寄せれば。有志家番兵二、土俵の中に入り、お榮は門外の垣根の中に隠ると、寄手は門外に止まりて

與太「御用だ。」

鷹五「開門せい。」

權柄に罵れば、土俵の中より

金之「御用とは何の御用だ。」

與太「何の御用とは怪からぬ。昨夜御達しあつたる通り。御下知に従ひ當所をば。事穩に引拂ひ。

退散いたさば夫で宜いが。

鷹五「彼此趣意を申張り。延引いたす其の時は。斟酌いたさず打入ッて。おのれら一々。搦め取て召

連る其爲に。

「町方加役兩手の人数。」

鷹五「打揃ッて向ふたぞ。」

怖々ながら、呼はれば、鞠子金之丞は、土俵の上にあがりて

金之「それはく遠路の處。近ごろ御苦勞至極に御座る。當所引拂の御達し。委細承知仕る。但し

申合せし同志の輩。多人数の事なれば。今夜の五ツ半時まで。何とぞ御猶豫下さる様。過刻も御願ひ申せし通り。夫まで 御開濟。達て御願ひ申まする。

詞を讀みて、穩に申述べれば。與太右衛門は、鷹五郎と、顔を見合せて

與太「イ、ヤ。其猶豫相成らぬ。御達し承知の上からは。後とも云はずたッ今。一同揃つて引拂へ。

鷹五「引拂はずば此境内。四方より取圍み。唯一息に攻入るばかりだ。有無の返答。

兩人「疾々いたせ。」

金之丞は、兩人をはつたと睨めて

金之「扱々聞入れ無き。兩手の御人数。たとひ御達しなればとて。此白晝に一同が。槍鐵砲を捨てて。

おめくくと當所をば。引拂はんは武士の恥辱。身分に差別は御座れども。御同様に公邊の。祿を

戴く言はど朋輩。武士の情を御存知あつて。一先づ此を御引下され。

與太「エ、。ほさきをるな。大膽不敵の謀叛人めら。

鷹五「ナント云ひわけ致すとも。猶豫すること。

兩人「相成らぬ。」

金之「是ほど迄に。事を理て申しても。聞入なき其上は。押寄せるとも攻入るとも。御自分方の御望次

あはれ浮世

第。但し一足たりとも此土俵。足をまたぐ其時は。仕掛置たる地雷火で。一人残さず粉微塵。冥土の供にいたしてくれるぞ。

皆々「エ」。地雷火と云ふに恐れて。奥太右衛門、鷹五郎を初め、寄手一同あとにさがる。此時寄手の同心の中にて、樹蔭に身をよせ、鐵砲を以て、金之丞を狙ふものあり。金之丞は是に心附かず。お榮は。是を見て走り出で

お榮「鞠子様。貴君を狙ふて。鐵砲で。……」叫びつゝ、走り出で、彼の同心の筒先と、金之丞との間に入りて、楯に成ると。同時にズドジと響き。憐むべし、お榮は弾に中りて、ばたりと倒る。是を見て、金之丞は大聲にて

金之「打てー」。號令を掛れば、甲乙等および二の有志家十人ばかり、筒先を揃へ、土俵の中より一齊に打出せば、寄手は驚きあはて。奥太右衛門薄手を負ひ、鷹五郎も腰を抜かし。忽ちに混雜して、兩方に分れて逃出す。金之丞は、土俵より飛下りて、お榮を懐き上げ、介抱して

「コレお榮。氣を慥に持て。深手なれども念所はよけたぞ。して又どうして。是へは参つたな。お榮「金之丞様。貴君と一所に。死なうと思ふたばかりで。此まで駆付け参りました。思はず貴君の御身替り。私や嬉しう御座ります。笑顔を作りて、取縄れば。金之丞、不便に思ひて

金之「それ程までに。思ふてくれたか。お榮。忝ないぞ。涙を泛べながら、土俵のかなたに對ひて「コレ小使は居らぬか。給仕は居ぬか。早く水を持って来い。土俵の陰にて「へい」と返詞する。

金之丞は、お榮を劬りて、門外の小陰につれゆき、介抱しけるが、お榮が次第に弱り行くを見て「お榮。余も今に討死してゆくほどに。先に往つて待て居やれ。お榮は、是を聞て首肯く。

此時給仕の五郎吉は、土俵の陰より出て、甲斐々々しく手桶に水を入れたるを提げ、片手に柄杓を持って来るに。又もやズドンの響と共に、彈にあたり、手桶を棄てウンと叫び、胸を押へて倒れ掛る。同時に禮部蘭之進杉崎の間より走り出て、五郎吉を介抱する、五郎吉は介抱されな

あはれ浮世

がら、お茶が血に染みたるを見て
五郎「ヤア御前は姉さん。怪我したのか。
お茶「弟。御前も。

互に顔を見合せて、其情きと悲しみに、愈々苦痛を増たりけり。
此時、町方加役の同勢は、更に盛り返して、兩方より攻掛る、是を見て蘭之進は、大音聲を發して
蘭之「當所の攻口。新徴組が受取た。
皆々「エ、。

蘭之「各方には。御引なされい。
密手は同勢をたよへ。お茶は金之丞に抱かれ。五郎吉は蘭之進に介抱されて。俱に落入る。

(道具廻ル)

(三) 同 本堂前 (夜中)

香龍寺の本堂前には、高張を照し、篝火を焼き、瓜生寅次郎手負高木伊織、小濱亮三郎、山岡

熊藏、松浦十兵衛薄手および甲乙等六人。此内に薄手もあり何れも防戦に疲れ、疵を包み、水を飲みて、一息吐て

寅次「諸君。残念だ。随分手ひどく防戦は致したが。

伊織「何を云ふにも。百人足らずの小勢にて。

荒三「密手は新手を入替て。息をも續がず攻たるゆゑ。

熊藏「伊吹。進藤。高井。小山を初として。

十兵「宗徒の面々。討死手負は餘程の人数。

寅次「日が暮たらば同志の罪。所々方々より集まつて。大丈夫千騎には。餘るであらうと思ひの外。

言申斐も無き一味のやから。

伊織「是を思へば鞠子金之丞どの。中村屋の集會で。此企は危ふしと。達て意見を言はれしに。

寅次「それを用ひず我々が。一途に早まる此度の一擧。さりながら悔めばとて詮方なし。此上は密

來る敵を引受て。花々しく戦つて。切死するが此の世の思ひ出。

皆々「我々とても其覺悟。

寅次「然らば諸君。一息入れたら最期の一戦。

あはれ浮世

皆々「宜しう御座る。」

此時鞠子金之丞は、裏手の方より、槍を提て出来る。金之「暫く」。金之丞此期に臨み。一言述べたい事が御座る。先々夫へ御着座下され。

寅次「着座いたせと仰せあつても。現在目の前寄手の勢が。金之「イヤ其攻口は某が才覺いたし。暫時の間はゆるめ申した。伊織「シテ其御談事の趣は。

金之「各方。金之丞が申した詞。ナント唯今。思ひ當つたで御座らうがな。抑今度の思ひ立。成就せんこと六かしと。初よりして存じて居たが。果して今日この成ゆき。併しながら各方。日本國の御爲に。一命捨る所存の上は。今は最期の時御座らぬ。唯此場を切抜けて。時節を俟つが誠の忠節。

皆々「なんと仰しやる。金之「千代田の松の松平。流れ久しき徳川の。御繁榮はいつ迄もと。祈るは固より臣下の願ひ。去ながら。大勢日々に傾いて。天下の大亂已に近し。幕府の盛衰ばかりかは。殊に宥たら日本の安危。その時こそは身命をします。死なねば成らぬ大事の身體。それを無益に此場所。討死いたすは。

誠の犬死。殊には又各々。親兄弟や妻子の嘆き。夫を不便と思はれぬか。兎も角も此の場を立退き。時節を待つと致されよ。伊織「御尤なる御談示なれど。見すく敵を前に置き。逃出したる臆病武士と。世上の笑は骸の恥辱。

金之「是は仕たり。伊織殿。百人足らずの小勢にて。雲霞の如き寄手を引受け。防戦したるは武士の譽れ。力が盡て退散いたすを。誰が臆病と申さうか。假令批判を受るとも。國家の爲に世上の取沙汰。堪へ忍ぶのが眞の豪傑。

荒三「併しながら鞠子殿。立退たる其上で。後日の祟これある時は。金之「其儀は某。新徴組の隊長に。篤と談判とけたれば。刀に掛けて彼が保證。熊藏「シテ。鞠子殿にも。我々と御一所に。十兵「御立退召さるよか。

金之「勿論立退く所存で御座るが。寅次郎殿と兩人は。少し後に引残り。新徴組の隊長へ。武器其外を引渡し。其上にて立退ます。のウ寅次郎殿。其積にて御居下され。

寅次「いかさま。兩人は後に残り。引渡したる其上で。各方の御跡を慕ひ。當所を退散いたさう程。あはれ浮世

に。各方には。片時も早く此場をば。
金之「御立退き成さるが專一。」

金之丞寅次郎兩人にて勸むれば、伊織、荒三郎等漸く納得して、立退く事に決定して

荒三「それに付き思ひ出したが。先刻これにて召捕たる幕吏の探索。いかゞ致さう。

寅次「ム、引すり出して。首刎られよ。
甲乙「承知いたしました。」

直に裏手の方より、鬼兵衛を縛りたる儘にて。引出し来れば
寅次「これ鬼兵衛。其方よくも我々が思ひ立。密告なして大事の手筈。翻顔する様には致したな。

其褒美には此世の暇。唯今取らせて遣はずぞ。……各方この者。勝手に成敗召され。
熊蔵「心得て御座る。然らば其賜はつて。

十兵「胸の怒りを霧らすと致さう。
兩人は鬼兵衛を引する、刀を抜き、既に首を切らんとす。鬼兵衛は、兩眼を閉ちて、其死を覺

悟したり
禮部蘭之進は、此前より樹蔭に身を寄せて居たるが、出來りて

蘭之「アイヤ御待ち下され。其科人。私へ御渡し下され。

金之「ヤア御自分は。唯今御引合いたしたる。新徴組の談判役。禮部蘭之進殿。
蘭之「鞠子金之丞殿で御座ったか。唯今は御苦勞至極。さて御立退の一條。事穩便に計らひました
る御挨拶には。

寅次「此鬼兵衛をば御所望で御座るか。宜しう御座る。粗末ながら進上いたせば。二ッ駒なり袈裟
掛なり。御好次第に御試し下され。

甲乙に差圖して、鬼兵衛を引渡せば
蘭之「快く御承知下され。忝なう御座る。サア鬼兵衛。かう參れ。

自から其繩を取て、裏手へ往く
伊織、荒三郎等は、立退の支度をなして

伊織「然らば御兩所。
寅次「直さま後より立退ますれば。

金之「各方には少しも早く。
皆々「心得ました。」

あはれ浮世

いづれも後に心を残し。悄然として立退たり。是を見送りて
金之「寅次郎殿。これで漸々安心いたしました。是と申すも全くは。禮部蘭之進が。心を盡せし扱ひゆ
る。斯く一同を落し遣り。心残りも御座らねば。いで此上は我々兩人。此所にて切腹なし。上へ
の言譯いたしませうか。

寅次「金之丞殿。段々の御苦心。御陰にて同士の人々。一命を相助かり。有がたう御座りました。然
らば御一所に。膝を並べて最期も一所に。
金之「未來も一所に。

兩人「御同道いたさう。

本堂の縁に座を組む

(境内ノ道具ニ成ル)

(道具廻ル)

此は、境内の奥まりたる所なり、蘭之進は、此所に鬼兵衛を引据て

蘭之「コレ鬼兵衛殿。今此場にて蘭之進の手に掛り。御身の一命果たす事。さぞ御無念で御座らうな。

鬼兵「ナンノ。陰密が顯はれて。殺されるのは兼ての覺悟だ。それに又この鬼兵衛には。重ねぐの

遺恨があつて。怒みに思ふて居なさるはず。サア吉五郎殿。すつぱりと私を殺して。溜飲でも御
下けなせエ。

蘭之「ム、よい覺悟だ。

刀を抜て、後に廻り、あたりを見廻して、鬼兵衛が繩をふつつと切れば。鬼兵衛は驚いて

鬼兵「こりや何となせエます。

蘭之「命は取らぬ。人の見ぬ間に。早く此場を逃さつしやれ。

鬼兵「折角の御親切。あり難うは御座エますが。尊公。私を此で助けりやア。又附纏ッて是からでも。

尊公の身の上に。祟りを仕ますが御承知かね。

蘭之「そりやア承知だ。役目の上の探索を。恨に思ふ蘭之進では御座らぬぞ。サア早うく。

勸むれども、鬼兵衛は、蘭之進の顔を見て、胸に徹へたるか、再び眼を閉ぢて、動かざれば、

蘭之進は、鬼兵衛が手を取て、引立て、向ふに突遣りて

「早う立退けいと申すに。

烈しく言へば、鬼兵衛は何にも云はず、汐々として、裏門の方より出行たり

蘭之進は、遙に此後姿を見送りて

あはれ浮世

「アツ有がたい。是で鬼兵衛も助かつた。
悦ぶ所に、本堂の方に當りて、砲聲の聞ければ打驚きて
「扱こそ猶豫の時刻が切れて。愈戦死を致すのか。
本堂の方へ取返す

(道具廻ル)

(本堂前ニ戻ル)

本堂の縁には、金之丞、寅次郎の兩人、各々襟を打寛ろけ、短刀を抜持ちて

金之「今この所にて相果て。骸は泉下に朽るとも。精神この土に止まつて。スワ萬一と云ふ時には。

寅次「日本國の御爲には。たとひ魔界に落るとも。

金之「某とても同じ心。
互に顔を見合せて

「ムフウ。

寅次「ムフウ。

金之「ワハ、ハ。

寅次「ワハ、ハ。

打笑ひて

金之「サア御一所に。

兩人同時に短刀を逆手に持直して、己に突立んとす。

此時寄手より打出す砲聲、烈しく聞えて、彈一ツ飛來りて、金之丞に當る。金之丞は前に打伏

したるが、縁より下へころけ落る。蘭之進は駈來りて、此體を見るより、金之丞を引起す。其

間に寅次郎は、短刀を腹に突立て、一文字に引廻す。蘭之進は金之丞を肩に引掛て、立退く。

(幕)

是より第七篇まで殆ど一年を経過す

あはれ浮世

第七篇

(慶應二年丙寅二月十五日事)

(一) 鞠子邸書院 (夜中)

鞠子金之丞は、世祿七百石の旗本にて、上二番町に邸宅を構へて住居す。今夜は妻を迎へて婚姻の式を行ふべしとて、兼て其用意を成し、書院の大床には、三幅對の畫幅を懸け、其前には高砂の置物を据ゑ、左右には松竹梅の立華を置き、床脇の棚の上には、金火屋懸けたる銀の香爐を飾り、其外の裝飾に至るまで、流石に門閥の家とて、華麗にはあらねども、奥ゆかしく整へたり。

當家の侍女清瀨、鶴代、龜壽、小松の四人、ともに引繕ひて語り合ひ、

清瀨「ナント。皆さん。今晚はお目出度では御座りませんか。

鶴代「御目出度の段かいのウ。此方の殿様が。初めての御祝言。

龜壽「お嫁御寮は。禮部蘭之進様のお嬢様。

小松「お年が十七で。御器量が勝れて。お美しいと云ふ御評判。

清瀨「殿様があの通りの御美男に。奥様が美人では。よい一對のお雛さま。

鶴代「それでまた一年まへから。お二人様が思ひ思ひ。お居あそばしたと云ふ事ゆゑ。

龜壽「今宵それでお興入。さぞお嬉しい事で御座りませう。

小松「ほんに御恐悦で御座ります。

喉話をなす所に、當家の用人佐川左太夫社祢一刀にて、次の間より出來りて

左太「お女中がた。お座敷のお支度は。すつかりと宜しう御座るな。

此左太夫は、知行の領地より來りて、勤め居る男なれば、言語のふしぐ、田舎口調なるゆゑ、

侍女等は面白がれて、其口調を真似て、

清瀨「ハイお支度は。すつかりと宜しう御座ります。

佐太夫は口真似されたるに心附かず、

左太「まう程なく。お興入のお刻限。兼て諸禮を習うた通り。よく差引を仕ませうぞ。間違へては可ませんよ。

鶴代「ハイく畏りました。併し御用人様。私共より貴君が第一。間違へては。

龜壽「それこそ大變。モシ左太夫様。間違へては可ませんよ。

あはれ浮世

左太「また人の口真似をして怪からぬ。だが不斷からして私の疎忽。さう云はれると自分でも。何だか險難に成て来た様じゃ。」

218.

小松「そら。そろく初まつて参りました。モシ御用人様。間違へては可ませんよ。
左太「心得たく。必らずとも間違へては。皆々「可ませんよ。」

どよめきたる所に、彼方にて、

聲「お興入で御座います。」

報知聞ゆれば、

左太「そりやこそお興入じゃ。」

周章て次の方へ出ゆれば。清瀬龜壽は、奥の方へ、鶴代小松は次の方へゆく。

直に次の間の杉口押開きて、鶴代小松の兩女案内に立ち、媒約役として高木伊織、葵御紋の駿斗目半社袴一、同じく内室阿時、片はづし打掛にて、兩人の間に花嫁のお節、文金高島田振袖打掛に粧ひたるを入れ、用人左太夫附添ひて出来る。同時に上手より鞠子金之丞、是も葵御紋の駿斗目小袖に長社袴小き刀にて、清瀬、龜壽添ひ出来り、着座して、互に一禮すれば、

用人は退座する。

伊織「御用意よくば。御祝言のお盃。」

お時「遊ばされて。宜しう御座りませう。」

金之丞お節一禮すれば。四人の侍女は心得て、次の折戸の内より、清瀬三方鶴代洲濱龜壽長柄小松加へ持出す。お時は三方を取りて、お節の前へ据ゑ、土器の盃を取らせんとする時に、

折戸の内にて、
蘭之「そのお盃。暫く〜。」

伊織「暫くと止られたるは。」

お時「誰殿で御座りまするな。」

蘭之「禮部蘭之進で御座る。」

伊織「シテ其仔細は。」

219.

蘭之「それへ参つて。申すで御座らう。」

(是より竹本太夫床の淨瑠璃に成る)、

淨「杉戸を明て打通る。姿は變る法師の容。是はと驚く人々に。會釋を成して座に着けば。

あはれ淨世

下手ノ格好ハ人のしん
禮部蘭之進は、剃髪なして、鼠木綿の衣服の上に、麻の香染の直綴を身に纏ひ、白の脚半を穿、頭陀袋を首に掛け、行脚の姿にて、静々と出来りて、着座すれば、お節も金之丞も、共に驚き

お節「ヤア父上さま。其お姿は。

金之「何なる仔細で。俄の御出家。

蘭之「その仔細申さん爲に推参いたしました。先づ叔父御の在部秋里庵殿。是へお越しと承知いたせば。

御出座を相願ひ。次には高木様御夫婦には。暫時御退座を願ひます。

金之「承知 仕りました。……コレ清瀬、叔父上へ是へお越を申上げ。其方たちは退座いたせ。

伊織「御内談相済ますまで。退座いたすで御座らう。

伊織はお時をつれ、侍女附添ひ、次の方へ立つ、清瀬のみは、奥の方へ入る。

淨「待間ほど無く秋里庵。一間の中より出来り。設けの席に座を占めて、

在部秋里庵は、旗本の隠居なれば、惣髪に織物の居士衣を着し、白の大口袴をはき、一刀の姿

にて出来り、蘭之進に軽く會釋して、金之丞に對ひ、

秋里「あれなる御僧はどなたじやな。

金之「ハイあれなるは。是に居ります。お節の父上。禮部蘭之進殿で御座ります。蘭之進に對

ひて)是なるは自分の叔父の在部秋里庵で御座ります。

蘭之進は、丁寧に兩手を突き、

蘭之「初めてお目通りを仕ります。私事は禮部蘭之進と名乗りました。下賤の者に御座り

ます。

秋里「ハア左様か。自分は在部秋里庵じや。以後は随分心易う。

手輕に挨拶をして、金之丞に對ひ、

シテ私へ用事があると。お云ひであつたは。

蘭之「アイヤ其御出座は私より。お願ひ申して御座ります。唯今私より金之丞様へ。お話し申す

事に付。御立會にて御聞置下さる様願ひ上ります。

秋里「ハ、ア用談の聞手に成れと。仰しやるのかね。

蘭之「御意の通りに御座ります。

金之「シテ祝言の盃とめさせ。私への御談示とは。

淨「不審ながらに尋ねれば。蘭之進は座を進め。

あはれ淨世

蘭之「言ふはつらし。言はねば濟まぬ親子の素性。これなるお節。今日まで私の娘と云ひしは。世間をつくらふ假の名目。誠は少しの續きもない。あかの他人で御座りまする。

金之「ナント仰しやる。此お節殿は御自分様には。あかの他人と御意あるは。

お節「そりや父上様。何を御意遊ばします。此廣い世の中に。見寄と云うては父親一人に娘一人。それを他人と仰しやるは。御戯れにも程がある。

淨「取のほせてはおはさぬか。お氣を慥かに父様と。心おどく取すがれば。蘭之進うち諾き。

蘭之「その愕きは尤なるが。此蘭之進逆せもせねば戯も申さぬ。……いかに金之丞殿。御聞き下され。是なるお節の實父と申すは。山緒ある武家なれど。仔細あつて幼少より相分れ。生死の程も道かならず。母は同家の出生なれど。素性は固より正しき町人。その臨終の今はに至り。此子を頼むと涙の遺言。承知と申した。一言を。堅く守つて十年あまり。我娘と披露して。育て上たる幾瀬の苦勞。今日唯今。お妻女に進ませますが。お節が世になき兩親の素性。また某が原の身分。何者で御座らうとも。夫に構はずお節をば。お妻女に成し下されますか。

金之「コハ改まつたる御尋ね。此婦人なら一生涯。俱に連添ふ女ごと。深く存じて所望の上は。其兩親の素性を問はず。また御身の其原は如何なるお方で御座らうとも。急度妻女に致す所存。

蘭之「併し公透向の御ノ届。次には又これに御座る秋里庵様を初といたし。御親類にて異議ある時は。金之「公透向のお届は。御自分様の息女には。御差支とあるならば。幸ひ媒妁に頼みたる親友の高木伊織。かりの親にして濟ませます。また叔父を初め。親類中にて異議あるとも。聞き入ませぬ私の決心。

蘭之「それ承はつて安堵いたした。兼て知つたる御透の御氣質。よも相違は御座るまいな。金之「御念には及びませぬ。

秋里「アイヤ金之丞。それなる蘭之進殿の素性身の上。承はらぬ其うちは。蘭之「御尋なくとも私より。打明申す所存で御座る。唯今にては信州の浪人禮部蘭之進と名のり。其以前は相州浦賀の町年寄萬里連左衛門と申したも。世を忍ぶ假の名。まことは御當地無宿の吉五郎。盜賊繩脫牢破さまく。悪事を働いて。十九年の長の歲月。傳馬町から淺草佃と。地獄で年を送りました。悪玉と云ふ札付の重科者で御座いますよ。

皆々「エ、。

淨「餘りの事に愕きて。暫し詞も無かりしが。金之丞は座を進め。

あはれ淨世

224. 金之「初めて聞た御身の素性。しかし其罪科は過去たる昔沙汰。今では立派な蘭之進殿。蘭之「所が出牢追放の。其後犯した繩脱に。終身入牢か遠島に。極まつた身體のお尋もの。極印打たれた面だから。道れる譯にやア参りませんよ。お節「エ、それでは。貴君は世に唄ふ悪玉の吉五郎で御座いましたか。それが定なら。私やどう仕ませうぞいのウ。

淨「心も姿もかき亂れ。悲しいわいのと泣伏して。正體なきぞ無慙なる。心を察して蘭之進。

蘭之「その嘆きはさる事ながら。今までこそは此身をば。親とも杖とも頼んだなれど。今日よりは我に勝つた金之丞殿。其お方に連添ふ上は。是に越したる頼みは無い。安心して居たが好いワ。

秋里「イヤ。連添はせること相成らぬ。たとひ小祿の旗本でも。三河以來の鞠子の家に。盜賊の娘をば。妻女に入れたと云はれては。公儀へ恐れ世間の聞え。此秋里庵が不承知じゃ。

淨「膠なき詞に驚くお節。金之丞。そは聞えぬと急立を。しばしと制して蘭之進。形を改めきつと向ひ。

蘭之「御氣附られよ秋里庵殿。唯今も暮々と打明したる拙者が詞。此娘と某。あかの他人と申したを。何とお聞なされましたか。

秋里「フ、ハ、ウ。いくら他人と申しても。諺にいふ泥棒の證據。當には決してならぬもの。蘭之「そりやこれ程に申ても。

秋里「一皮かぶつた造りごと。聞くも何だか穢らはしい。コレ金之丞。はやく此人を歸へして仕まへ。どれ私も退座いたさう。

淨「立んとするを押止め。蘭之「かく成る上は是非に及ばぬ。言ふまいとは存じたが。お節が實の娘で無い。證據を知らする物語。金之丞殿もお聞なされ。思ひ廻せば十年以前。しかも安政地震の後。某浦賀にありし頃。

唯今も申せし如く。病に罹つて惱みし女。涙にくれて手を合せ。もと私も云々と申す素性のも。ふと若氣の誤りから。ある殿御と言替し。家出をなして旅の空。一人の娘を設けしが。

淨「情なや殿御には。秋の扇と捨てられて。身はよるべなき捨小舟。子ゆゑの暗に惜しからぬ。葉末のいのちをしまれて。流れ渡りのうきつとめ。

せめて私が無い後で。頼むは娘が行末と。云つたが此世の假乞。胸も張りさく悲しさは。ナント

秋里庵殿。哀れとは御聞取なされませぬか。淨「涙の種の物がたり。秋里庵はせよら笑つて。

あはれ淨世

秋里「ワハ、ハ、ハ。曲亭馬琴か種彦が。筆の戯の繪草紙に。ありさうな人情ばなし。夫が證據に成るものか。」

蘭之「唯今申した物語。それでも御信用なさらずば。據なし。猶其前の事柄を。明らか様に申さんが。指を折つて數ふれば。十六年前の事。しかも嘉永三年初秋の十九日。神奈川臺にて行惱み。既に倒るゝ其折から。厚い情の清水の恵み。劬りくれし娘こそ。即ち右の婦人にて。味里江宗伯殿と申したる隠居の姪女。」

秋里「エイ。」

蘭之「其宗伯殿と申すは。某が心を買はれた大恩人。然るに其夜の小夜中に。かの娘をば欺き騙し。つれ出したる其上に。子まで設けて見捨たる。薄情不實な其男は。」

秋里「ムツ。」

蘭之「在部と云ふ御苗字を。金之丞殿より聞と比しく。若や夫かと思ひしに。然も其夜の月明り。ちらりと見たる。佛は。目に止まつて居りますが。秋里庵殿。イヤサ在部新三郎殿。ナント是でも。造り話と仰せあるか。」

秋里「エ、其娘こそ。味里江のお半。それでは其お節と云ふのは。」

蘭之「お半殿の忘形身。私が頼まれて。育上た娘で御座る。コレお節。肌身離さぬ守り入れ。母の形見と朝夕に。眺めて慕ふ香箱を。袋もろとも取出して。あのお方に御覽に入れい。お節「母上のお形見を。御覽に入れいと。仰しやりますか。」

淨「戀しなつかし亡母の。残し置かれし形見こそ。今は仇なれ是なくば。忘るゝ際もあらうかと。明てはをがみ拜みては。啣つ涙にひたぬれて。蒔繪もくもる香ばこや。袋と共に取出し。これ御覽せと差出せば。秋里庵は打驚き。」

秋里「エ、エ。此香箱は其昔。お半に與へし覺えの品。」

淨「引ほどいて改むる。守りの中の臍の緒に。」
「嘉永三庚戌年霜月廿日出生在部新三郎娘。これこそ誠にわが自筆。そんならお節はお半に生ませた娘であつたか。コレ娘。こゝへ来て。顔を見せてくれいのウ。」

お節「それではあの秋里庵様が。本とうのお父様で御座りますか。」

蘭之「御親子の御對面。サアあれへ參つて早う致せ。」

淨「思はぬ親子の面會に。夢では無いかと。手に手を取り。互に顔を眺め合ひ。」

秋里「娘であつたか。」

あはれ淨世

お節「お父様で御座りましたか。
秋里「争はれぬお半の佛。」

お節「おなつかしう御座りまする。

浄「嬉し涙に袖ぬれて。時きさらぎの春雨や。老木の梅に若櫻。雨にしほると風情にて。詞も更
に無かりけり秋里庵は。香箱つくく打ながめ。落る涙を拭拭ひ。

秋里「これお半。許してくれい。今はの際に至るまで。無某を心中で。怨んで居たであらうなア。
其方に飽たでなかつたが。身の振方に詮すべ盡き。藤澤宿に残し置き。江戸へ歸れば兄上の御病
死。思はぬ家督の相續に。親類評議の妻定め。其後内々手密を求め。尋ねて見れば。其方の行方
は更に知れず。心ならずも其儘に。致して置た此身の不實。前年妻に別れてより。後妻も迎へず
裸ぐらし。是がせめても其方への心中。了見してくれこれお半。

浄「十七年の其昔。其方を欺した罪科を。唯いま懺悔をするぞやと。兩手を突て男泣。ことわり
せめて哀れなり。蘭之進も目をしばたよき。

蘭之「唯今のお詞が。千僧萬部の供養より。お半殿へはよい追善。お半殿は最期の際まで。怨む所
か貴君をば。戀ひ慕ふての臨終は。アッ思ひ出しても胸が塞がる。併しそれは追つての物語。い

かに秋里庵様。貴君のお種と知れましても。金之丞殿との祝言は。まだ御不承知で御座りまする
か。

秋里「なんで不承知を申ませう。知らぬ事として唯今まで疎忽の段は。蘭之進殿。平に御用捨下され
よ。夫に附ても。お半が末期のお世話と云ひ。十年に餘る其間。これなるお節の御養育。何と御
禮を申さうやら。蘭之進殿。有がたう御座りまする。辱う存じまする。

浄「當つて碎くる男氣の。負惜なき舉動は。東男子の氣象なり。

蘭之「なんの其御禮に及びませう。のうお節。今日からは余が江戸に居なくとも。金之丞殿と云ふ
夫を持ち。其上に實の父上。秋里庵様が御座るからは。親夫のある身體。かう固まれば余も安心。

お半殿へ請合つた。役目も是で済ました。どれお別れと致しませうか。
浄「往かんとするを引とめて

お節「お父さま。貴君はマア。何所へお出なされまする。
金之「殊には姿を變させて。御出家ありしはいかなる譯。

お節「包まず聞せて下さりませ。
蘭之「先刻も申した通り。此蘭之進はな。吉五郎と云ふ重科もの、十年餘りの其間。彼方此方を徬

徳て。姿を變じ形を替へ。千辛萬苦いたしたも。宗伯様への恩返し。お半殿への詞の誓ひ。其方の先途を見届けて。安心したい計りの願ひ。それさへ濟めば。もはや此世に用なき身體。これからは。身は念佛の雲水に。諸國を廻つて修行なし。捕へられたらそれ迄と。覺悟を極めた此出家。金之「そは御短慮の思召し。唯今の御住居。淺間と御懸念あるならば。疎末なれど此屋敷。御引移り下されば。お手は決して入りますまい。

蘭之「ハハ、ハ、ハ。詮議をのがるゝ丈ならば。何も悪念は御座らぬが。濟まぬは私が心の中。かう仕て居る其中に。悪玉吉五郎これに匿ひあるは必定。サア差出せとある時は。御邊は何となされまする。それこそ名家の旗本に。思はぬ疵が附ませうぞ。

秋里「其儀ならば私から。町奉行へ内談とけ。御自分の身上は。調べぬ事に致しませう。私も今では妻子も無し。家督は兄の忤に譲り。樂隠居の秋里庵。靜かな所に閑居して。一所に暮すは如何で御座らう。

蘭之「其御親切。忝うは御座りまするが。思ひ立たる發心ゆゑ。心任せに成し下されい。淨「いつかな聞かぬ鐵石心。動く景色も無かりけり。默然たる其中に。ふと目に附たる棚の上。香爐に眼を注ぎ。

「金之丞殿。あれなる銀の香爐は。御傳來か。但し又御買求の御品で御座るか。

金之「あの香爐は先代が。いまだ繁昌いたせし頃。八九年前に。買求た品で御座りまする。

蘭之「どうか。拜見いたしたう御座りますが。金之「サア御覽下さりませ。

淨「持出したる香爐を。篤と眺めて蘭之進。蘭之「此香爐こそ。味里江宗伯殿が御所持の品。淨「床に直して拜禮なし。在すが如く敬ひて。

「アツ宗伯様。おなつかしう存じまする。四十歳に至るまで。悪事に染みたる吉五郎。善心に立返り。及ばずながら慈悲善根。諸人を救ふて天道へ。御奉公を致したも。皆貴君の御教訓。骨身に徹へた御意見ゆゑ。夫に附ても其夜の事。

淨「此香爐に目を附て。盗み取たる罪科を。

「貴君はお許し下されて。心を買つた代物と。御恵みなされて下されしが。恐ろしや天道は。一旦曲つた悪心を。お許されの無かりしか。淨「十六年の其間。我と心の苦しみは、

「十九年の長年より。一しほ身體に堪へました。アツ空ゆく月は清けれど。心は雲に覆はれて。光も隠れはてたるか。

淨「懺悔に其身を打伏して。涙に暮れし狀況は。慘然たるばかりなり。折から用人左太夫は。あわたどしく走り出で。

左太「ハツ申上ます。唯今加役方與力。大津源五郎と相名乗り。組の同心根村爲藏。増岡金助相従ひ立會として御小人目付中島忠作同道いたし。表座敷へ相通り。殿様へ御面會。申込まれて御座ります。

金之「ムツシテ其用事は。

左太「禮部蘭之進。當家へ参り居るとの事。召捕の爲め罷越したとの。口上に御座ります。

秋里「ナニ蘭之進殿を召捕に。加役の與力が参つたとな。

蘭之「御心配下されますな。夫に参つて尋常に。召捕らるゝで御座りませう。

淨「立つを暫しと兩人が。押しめて左右より。

秋里「早まられぬ蘭之進殿。

金之「兎も角も面會いたし。趣意を尋ねた其上で。

秋里「計らひ方も御座らう程に。先づ我々へお任せあつて。

金之「暫く是へお控へ下され。

蘭之「では御座らうが。自分ゆゑに御當家の。御外聞に相成るは。甚以て不本意なれば。

金之「香龍寺にて一命を。助けられたる命の親へ。

蘭之「アツこれ。何を云はると。

(二) 同表座敷 (夜中)

鞠子が屋敷の表座敷には、加役の與力大津源五郎實は穴熊重太同實同心根村爲藏實は闇黒牛松増岡金助實はぶらり六之助實御小人目付中島忠作實は腰押兵太殿めしく着座する。用人左太夫は。是に對ひて

左太「主人金之丞。唯今お目に掛られますれば。暫時お控へ下さります様。御願ひ申上ます。

重太「便々といつまでも。相待つ事罷成らぬ。早く御主人へ御出座なせと申さつせへ。

左太「畏りました。

引退く。是を見送つて小聲にて

あはれ淨世

牛松「親方。旨く往ますかね。

重太「往なくつてよ。(大聲にて) 重罪人の悪玉吉五郎。當家へ忍び参つて居る事。明白に相分つてあるワ。

わざと聞える様に云ふ。金之丞は出来りて

金之「加役方大津源五郎殿とは。御手前で御座るか。拙者は鞠子金之丞で御座る。シテ拙者へ御用の筋は。

重太「別儀で御座らぬ。御手前の舅御禮部蘭之進事は。悪玉吉五郎と申す重科もの。今夜當家へ参り居ること慥に見届け。召捕のため罷越した。否應云はずに御渡しなさへ。

金之「御支配違ひの加役方。拙者へ御談示ある上は。御目附衆の御違書。先づ是にて拜見いたさう。重太「その御違は持参いたさぬ。

金之「それを御持参なさらずに。何を證據に向はれたな。

兵太「アイヤ。御小人目付が其爲に。出張いたす上からは。御違書には及び申さぬ。

此時當家の中番小山林藏は。盆の上に茶碗を載せ茶壺附此所へ持参なし、役々へ茶を出しながら、重太等の顔を見て

林藏「へい。お前さんが加役の御役人様で御座いますか。オイ兄イ。お前いつお役人に成たへ。大層立身しなすつたねエ。

重太「失禮なる其詞。其方ごとき下賤のもの。自分は曾て存じ居らぬぞ。

林藏「へん下賤も無エもんだ。ヤイ穴熊。洒落るない。おいら五分切林藏だぜ。重太。汝おれが而ア忘れたかい。

重太「ナニ五分切林藏だと。……違エ無エ。林藏だ。サア斯う尻が割れた日にや。卑怯未練に隠しやア仕ねエ。何にもおれは穴熊重太だ。

大胡座に成て、生體を顯はせば。

金之「扱こそおのれ等。悪役人と相成つて。我屋敷へは入込たるよな。

重太「いかにもさうだ。夫が悪るきやアふん縛つて差出すとも。どうでも勝手に仕なせエ。其代りにやア悪玉吉五郎が是々と。彼奴ア勿論。お前まで抱込で見せるから。其氣でどうともするが宜や。……エ、びく／＼するなへ。是からが仕事だ。サア鞠子さん繩打つて突出すか。吉五郎に逢はせるか。エ、旦那夜が更るぞ。早く仕ておくんせエ。

烟草を吸てゆすり居る。此時襖の外にて秋里庵

あはれ浮世

秋里「イヤ其話は私が附ませう。」

出来りて重太に向ひて

「時に源五郎殿とやら。お前は蘭之進殿に逢つて。一所に入牢を仕やうと云ふのか。夫とも外に話があるのか。遠慮なく言つたが好からう。事に由つたら及ばずながら。随分私が扱はうが。」

重太「イヤさう仰しやりやア言ひますが。蘭之進の吉五郎。訴人したつて別段に。私の得にも成ら

ねエが。彼奴からして取らねば成らぬ千兩の約束。そのお陰で去年の三月。巢取に逢つて十月の

糺明。その恨をば散々ツばら竝べた上で金を取りやア。夫で用は御座エませんよ。

秋里「さうか。夫では千兩の金子申受れば。異存は更に無いと云ふのか。」

重太「所が元金千兩は。一年ほどの利足を附け。其上に四人が。十月の入牢の入合せ。何もかもで

三千兩。耳を揃へておくんなすつたら。」

秋里「それで宜いと申すのだな。蘭之進殿の内済金。三千兩。私が出して渡しませう。」

金之「ナニ。三千兩の金子をば。叔父上様か。」

秋里「ハテ大恩人の身代金。三千兩とは廉いもの。後とも云はず唯た今。取寄せて渡してやらう。」

重太「流石はお大身の殿様だなア。さう綺麗に仰しやりやア。御寛くりでも宜し御座エます。賀役

人の振を仕て。先程からの失禮は。どうぞ眞ツ平御免なせエまし。ヤイ汝も。手を突てお詫を仕ねエか。

三人「どうも相済ませせん。御免下せエまし。」

此時蘭之進は出来りて。秋里庵に對ひ

蘭之「一方ならぬお扱ひ。有がたうは存じまするが。其儀は何とぞ御無用に。」

秋里「ム、そりや自分が扱ひを。不足じやとお思ひあつてか。」

蘭之「中々以て。三千兩の大金を。お出し下さる思召。何で不足に存じませう。去ながら。もはや

此世に用なき身體。召捕らるゝなら何時でも。御用に成るが罪ほろほし。殊にまた大金を。斯様

な族にお渡しあるは。却て世間を害する種。それよりも其金子。私へ下されたと思召し。貧苦に

迫る不仕合。其日に困る人々を。お恵み成さつて下さらば。此上も無い私の本望。……サア重

太。繩を打つなら勝手に打てい。汝とア掛違つて。つひしか合牢しなかつたが。老後の思ひ出に。

傳馬町の御牢内。おれが汝の案内して。地獄の見物させて遣らうよ。

重太「ム、好覺悟だ。折角仕掛た金まうけ。邪魔アされた返報にやア。抱込まるとも合點で。」

蘭之「エ、何を愚圖々々言ふんだい。見ともねエや。サア繩を打つならしつかりと打て。掛け様が

あはれ浮世

悪いと脱られるぜ。

重太「打なくつてどうするものか。

立掛れば。林蔵は押しめて

林蔵「さて重太。汝の手が禮部の旦那に。ちよつとでも障るが最期。おれが汝に繩掛るぞ。大恩人の禮部様。自由にさせて成るものか。

重太「ふさげやがるな。

林蔵を突退け、蘭之進に繩打たんとする。牛松等も、俱に立上る。金之丞秋里庵これを支ふる。

此時庭口より蛇の道鬼兵衛、藤太郎、九平治、その外大勢の捕方を引つれ、庭先に出来りて。

鬼兵「待つたく。悪玉吉五郎。再犯の罪状。その盗みたる香爐は。其後味里江宗伯より。改めて

貰受たるに相違ない事。下女お黒の中立に依て其罪なきを以て。繩脱いたすも其構なし。随つて

改心の筋相聞ゆれば。江戸お構ひ御免と。御奉行所のお達し。

懐中より書付を取出して、蘭之進に渡せば。押載いて

蘭之「此身の疑ひ相霽て。有がたう存じまする。

重太「モウかうなりやア敗れかぶれた。

重太、牛松、六之助、兵太、刀を抜て切て掛る

鬼兵「ヤア其奴等は穴熊重太の一類だなア。それ召捕れ。

蘭之進、金之丞、秋里庵、林蔵四人にて、重太等を座敷より庭へ突落す。庭上には捕手のもの

ども待構へて、大に争闘して、遂に四人を縛る。

金之「お捕方。御苦勞で御座る。

蘭之「是と申すも全くは。鬼兵衛殿の厚い情

鬼兵「アッこれ。蘭之進様。情も無ければ恩も無い。黒白つけるが。役目で御座います。……

ア引立やうぜ。

重太等を引立て、庭口の方へ出て往く

秋里「かく忽ちに落着いたせば。

伊織「恐悦に御座りまする。

襖を押し明て、高木伊織、内室お時、花嫁お節、侍女、用人等附添ひ、伊織は三方の上に銀の香

爐と、お節の守袋を載せて、出来る。是を見て

金之「伊織殿。すべての様子は。

あはれ浮世

伊織「お節殿より承はり。御親子の御對面。蘭之進殿の義俠慈悲心。お時「私ども。承はり。涙にくれて御座りました。

秋里「かく明白に相成つて。お身の浮雲晴たる上は。

金之「行脚の雲水。思ひ止まり御座あつて。幾久しく御一所に。

お節「お父さま。さう成さつて下さりませ。

此時二重正座ノ儀ヲ
披露ル直前ノ見 (是より再び床の淨瑠璃に成りて)

淨「それが御身のおん願ひ。願ひますると取すが。娘心の一筋に。くるよ涙ぞ道理なる。蘭之進も不便と思ひ。

蘭之「方々のお勧め。其方の頼み。尤ではあるなれど。思ひ達たる遁世菩提。引とどめぬが誠の孝行。皆々「すりやどうあつても。

蘭之「願ひ通りに。お暇を賜はりまするが何より悦び。

伊織「ハテ是非も無き。

皆々「事じやなア。

淨「とめてとまらぬ發心に。名残はいとど惜まれて。やる方なくぞ見えにける。秋里庵は容をあ

らため。

秋里「左様御決心ある上は。お止まりは御座るまい。夫に付き。失禮では御座れども。唯今申した三千兩。御修行のお賄ひ。

林藏「お供には私をお連れなすつて。

金之「何さま左様に願ひまする。

蘭之「返すくの御親切。悦ばしくは存じまするが。旅の用意は聊か致し居りますれば。大金もつ

は却て不爲。また雲水の分際で。供をつれるは足手纏ひ。お断り申まする。其代りには金之丞殿。それなる香爐。宗伯殿のお形見に。此新發智へ下されば。永々世々の御高恩。

金之「お易い御所望。いざお持ち下さりませ。

淨「差出す香爐おしいたとき。是ぞ先師の宗伯殿。心を買はれし御形見。忝なしや有がたやと。

納むる頭陀の布袋。運び出したる草鞋や。竹の小杖に檜の木笠。支度もいとど哀れなり。

林藏は、庭口より廻りて、蘭之進の杖笠草鞋を持出す。蘭之進は、沓拔石にて草鞋を穿き、庭

に下りる。お節も續いて下りて。杖笠を持つ。蘭之進は支度をなして

蘭之「左様御座らば名方。随分共に御健勝で。

あはれ淨世

秋里「シテ御坊には何地を指して。
金之「御修行はなされますな。

蘭之「まづ神奈川より鎌倉浦賀。亡き人々の跡を弔ひ。夫よりしては奈良高野。靈場古跡を巡拜い
たさん。

お節「それで貴君の御法名は。

蘭之「ム、異名によばれた悪玉を。直に其儘悪玉坊。(空を眺めて)

カラ田「大空を照りゆく月の清ければ。雲かくせどもひかり消なくに。どれ發足いたさうか。

皆々「おさらば。

蘭之「おさらば。

淨「さらばくと暇を。浮世を捨る修行の道。せめてモ一度お顔をと。別を嘆く孝の道。義理と

情の柵に。止も得せぬが武士の道。仁義の道や人の道。果なき世にも道守る。是ぞ誠の天の

道。哀を此に止めけり、

あはれ浮世終

東鑑拜賀卷

此脚本は専ら史に據りて其結構を立て中間挿むに余が考案を以てしたるなり其初これを五幕若くは
六幕に分ち北條義時の奸雄を十分に寫し出し公曉をして右府を弑せしむるの景情をものせんとて既
に腹案は成しかども奈何せん演劇時間に制限あるが上に所謂時代物と世話ものとを前後に演ずるの
風は今なほ劇場に存して爲に簡短に幕数を減せざる可からず依て止を得ず是を三幕五場に縮められ
ば十分の景情を現せしむるに足らず往々咽喉の憾なきにあらす他日幸に機會を得ば之を改正増補
して一部の完全なる史劇となし更に大方の教を乞はんと欲す請ふ其時を俟て批評を玉へ
此劇に於て堀越秀寺島清の兩氏は余が爲に意見を助けて考案に補正を得せしめたる所あり校正は例
に依て河竹新七氏の健腕を煩はし竹柴賢治氏も亦淨寫の勞を執られたり謹て是を謝す

明治二十六年三月十日

櫻癡居士 福地源一郎 識

目次 (及び重立たる人名)

244 序 幕上 修禪寺の書院 同く浴室

前の左金吾將軍

鎌倉の侍所

禪室の承仕女房

序 幕下 甘繩山の參籠

鶴岡八幡別當

頼家の三男

女房

公曉の弟子

鎌倉の武士

頼家 禪室
金窪太郎 行親
掃部 局

公曉 禪師
千代 壽

安東次郎 忠家
駒部 若局

第二幕上 大倉亭の饗應

鶴岡八幡別當

執權右京大夫

義時の子息

同

同

鎌倉殿の家人

公曉 禪師
北條 義時
江間二郎 朝時
陸奥三郎 重時
相模四郎 政村
伊賀左衛門尉 光季

第二幕下 鎌倉御所

將軍 家

大膳大夫 廣元

右大臣 實朝
入道 覺阿

第三幕 鶴岡八幡

文章博士 仲章
相模守 時房
伯耆前司 親時
右馬助 行光
武田五郎 信光
長尾斷六 實景
秦公 氏所
御寮

此餘

小名 公卿 殿上人 大名
隨身 諸司 武士 雑色
侍女 軍兵 仕丁 女房

右大臣 實朝 公
公曉 禪師
北條 義時
文章博士 仲章
武田五郎 信光
長尾新六 實景

土御門天皇の御宇正治元年正月右大將頼朝卿薨去ありければ、嫡子頼家朝臣その頃は十八歳にて左中將にて在ししが、故右大將家の遺跡を継ぎ家人郎從等をして舊の如く諸國の守護を奉行せしむべき山の宣旨を蒙らせて關東の主とは成らせ玉ひけるに、兎角に御行狀宜しからず其年

八月安女の事よりして安達九郎景盛を誅せらるべしとて兵共を石の御壺に召集められ以の外の騷動に及ばんずる状勢なりければ御母尼御臺所には自から甘繩なる藤九郎盛長入道蓮西が宅へ渡御あつて無事を謀らせ玉ひけり、是に依て盛長景盛より記請文を呈して一旦は事治まりしと雖ども頼家には年少昵近の輩をのみ近づけ蹴鞠杯酒の歡に耽り剩へ梶原平三景時が讒言を信じ結城七郎朝光が忠臣は二君に事へすと申しを謀叛の心ありと思召し誅戮を加へられんと擬せられたり。和田、三浦、千葉、島山、比企、足立、葛西、小田、波多野、大井、若狭、澁谷、山内、宇都宮、榛谷、安達、佐々木、稻毛、岡崎、土肥、河野、曾我、二宮、長江、天野、工藤を初めとして宗徒の御家人鶴岡の廻廊に集まつて景時が罪状を擧て我等へ下し賜はるべき旨の連署の状を棒けたり、景時は陳謝の詞なく鎌倉を逐拂はれ翌れば文治二年正月に一族を牽て京へ赴かんとせし途次駿河國に於て蘆原、飯田、吉香、工藤、三澤の諸人に障へられて誅せられたりき。扱も頼家は此年の正月に從四位下に叙せられて禁色を許され同き十月左衛門督に任ぜられて從三位に進み建仁二年二月正三位同き七月從二位に昇り征夷大將軍に補せられ玉ひしかば左金吾將軍とは申し奉りき(左金吾とは左衛門督の次名なり)然るに頼家は御行狀更に改悛の御心も無く中野五郎、細野四郎、平知康、紀行景など云へる小人どもをのみ近

づけて兎角に老功の人々を疎じ玉ひければ此機に乗じて比企判官能員が一家の輩は外戚の縁を以て頼家に親しみたり。此能員と云へるは頼朝の乳母なりし比企尼の姪にて其養子なりければ左せる勳功は無けれども所領數多賜はりて一門富榮へけるに此比企の一家は美女の産る血筋にてやありけむ三河守範頼の室(安達盛長が娘)判官義經の室(河越重頼が娘)も共に比企の尼が女の腹に出たる婦人なりき、中にも能員が長女は殊に勝れたる美人なりければ頼家の側室となりて男子をぞ擧たりける、是れ一幡と申し若君也。此時北條の一家は光君(頼朝)の御外戚にて時政、義時の親子執權となりて政事を取行ひ尼御臺所を初として北條の親族縁家御家人に満々て頼朝薨去の後は世は北條の計ひにて諸事頼家の御心の如くならず將軍家は左ながら虚位の様になりければ、頼家は心中深く之を憤り何にもして北條の勢を殺ぎ將軍の政にせま欲し思召し密に比企能員に謀りて機もあらば思召立んと擬せられたり。然るに建仁三年に至り七月の頃より頼家俄に病づかせ玉ひ心神憺亂して直事ならず見え玉ひ八月廿七日に及びては御不例尤も危急との御事なり、但し其實は左までの御事には非ざりしかど、北條父子は御不例を幸ひに頼家を廢せんと謀り御護補の沙汰に及ばせ參らせ、即ち關より西の三十八ヶ國の地頭職を以て御弟の千幡君に譲り奉らせ(時に十歳、後に實朝公)關より東の二十八ヶ國の地頭並

びに惣守護職を以て御長子の一幡君に譲らせ玉ふ事とは定められたり(時に六歳)此の如くに天下を二分して御讓補ある上は諸大名御家人も自から二分となりて千幡君の方は北條の一門これを補佐し参らせ一幡君の方は比企の類にて扶翼し奉り果は必らず争亂の基たるべし故右大將家が一統し玉ひし天下をば今日に分られんと然らずと云ふ説は頻に諸方に起りしが、北條は左金吾將軍(頼家)御他界の上は一幡君を退けて千幡君一統の世となし奉るべき陰謀ありと聞えければ、頼家は左あらんには我息のある中に北條を除けとて能員を御病牀に招かれて北條追討の御密談に及び玉へり、此事早くも漏たりければ北條は九月二日と申すに急に兵共を召集め比企の一族が籠つたる一幡君の御館小御所に押寄て攻立たり、御所方は力盡て御館に火を放ちて討死し若君一幡も遁るべくも非ざれば兵火に燻かれて無慚の最後を遂たまへり。頼家は御病牀にて此變事を聞し召して其憤に堪玉はず和田仁田に密書を下されて北條誅戮を思召立せたるに是も忽ちに露顯したりければ、同じ七日尻御臺所の御沙汰として將軍家御病牀の上に家門を治め玉ふと始終尤も危きに由て落飾せしめられ、同じ十日に千幡君を將軍に立られて世は愈々北條の計と成たりけり。斯ても頼家を鎌倉に置き参らせては比企の殘黨再舉の掛念ありとて同じ廿九日に左金吾禪室をば(頼家の事なり是は左金吾將軍が落飾ありしに由て斯は申し

奉りしなり)伊豆國の修禪寺に送りて閑居なさせ奉りたり。左金吾禪室は十月下旬に御書を尼御臺所并に將軍家(實朝)に進せらせ深山の幽棲今さら徒然に忍び難ければ日頃召仕る所の近習の輩が参入を免させ給へ又安達右衛門尉景盛に於ては之を申請け勘發を加ふ可き旨を望み玉ひしに、十一月六日に至り御所望の條々然るべからず其上御書を通せらるゝ事向後停止せらるゝ趣き三浦兵衛尉義村を御使として申送らせ、彼近習の輩中野五郎以下は直に遠流に處せらるゝ由の御説ありき、義村は御使より歸参して左金吾禪室御閑居の躰ども具に申上たりければ尼御臺所には頗る御悲嘆あつて如何にもとは思召しけれども北條父子これを止め参せて其儘になし置き奉りにき。明れば元久元年左金吾禪室には修禪寺より密々に御書を鎌倉中の諸大名へ遣はされて計らせ玉ふ旨ありとも聞え又稻毛入道なんども陰に参入して禪室に勧め奉りつる事ありとも聞えしが、七月に至りて禪室の御家人等邊土に隠れ居て謀叛を企つる由發覺したりければ金窪太郎行親は北條義時の内命を受けて修禪寺へ發向したりけり

序幕上

(一) 修禪寺の書院 元久元年七月十七日の事なり(但し演劇にては衣裳の都合あれば三月十七日の事となす)

御寢殿とは名のみにて鎌倉の御所とは事變り伊豆國なる修禪寺の書院なれば事の體都て哀に見えたりけり(一面の平舞臺にて上手寄の正面に九尺の持佛堂を設けて本尊を安置し上手にも下手にも杉戸を建て正面より左右に渡りて壁を張りて其上に松くひ鶴の模様を疎に繪き舞臺には縹の薄縁を敷たり)

此に禪室に仕へまつる武士望月新吾海野彌太郎の兩人は烏帽子布直垂腰刀にて(舞臺よき所に座り物語して居たりける(鳴物にて幕明く))

望月「時に海野どの、貴殿には今日既に御氣色を御覧ひ成されて御座るか

海野「イヤ末だ御覧は致さぬが、去年の秋の御不例このかた御氣色常に事變り言はど狂氣の御有様

望月「比企判官能員が山なき謀叛の勸に惑ひ北條殿御一家を追討せんとの御結構

海野「事露顯して忽ちに此修禪寺へ御幽閉、無念に御氣募らせても

望月「世は三代の將軍家尼御臺の御後見北條殿の執權職、稻毛等如きが巧んでも

海野「迎も及ばぬ事で御座る。夫は格別、今日は鎌倉よりの御見舞として金窪太郎行親どの

望月「當地へ參着是あつて彼なる邸に御扣へあるは如何なる所用あつての事か

海野「心掛の事で御座る

ト兩士は心安からず案じ煩ひ語り合ふ所に。下手の杉戸を明て金窪太郎行親は鎌倉様の侍烏帽子に平文の掛緒をなし紺村濃に千鳥を染たる直垂を着て腰刀を挿み出來りて兩士に向ひ

金窪「望月海野の御兩士には是へ御座あるか

ト聲を懸て會釋すれば、兩士は金窪を見るより齋室に一禮して

望月「是はく金窪太郎行親殿、宜こそ御出仕

海野「喉をすれば影とやら、只今しも兩人にて御參着の御事をば是にて申し居たる所

望月「遠路の御越し御苦勞に存じ申す

金窪「御挨拶に與り祝着至極

ト會釋して四邊を見廻して

「シテ左金吾禪室には御氣色如何で御座るな

翌月「別に御變は無けれども益々募る御痲癖、ことに此ほど稻毛入道参入いたせし其時に
海野「御人拂の御密談、察する所その折に鎌倉中の諸大名へ

金窪「ム、御消息めされたで御座らうがな。油断ならざる御心底、それ故にこそ北條殿この行親を
差向られ篤と御様子見届て次第に出ては手短かに

兩士「何と仰しやる

金窪「イヤサ御不例の御見舞申上ると致す御座らう、御兩士には行親参入の趣を御執奏御頼み申
す

兩士「承知いたして御座る

ト兩士は打連て上手の杉戸の内に入る、金窪は見送つて

金窪「北條殿の内意を受けて罷り越たる此行親、左金吾禪室の御心底とかく謀叛の思召立、様子に由
ては御不便ながら思ひ切らねば相成まい

トさすがに主君を弑する大事に大義を知らぬ金窪も腕を叉きとつ置つ思ひ悩みて居たりける。
斯る所に兩士は再び出来つて

翌月「ハッ御参入の趣言上いたせし所、唯今是へ御出座あつて

海野「御對面との御儀に御座る

金窪「御執奏御大儀に御座る、然らば是にて御待受申上るで御座らう

ト金窪は席をへりすべりて着座すれば、兩士も遙の末座に（下手）扣へたり。時に上手の杉戸
を押明て掃部局は（三浦平六兵衛尉義村の妻にて頼家に仕へ修禪寺まで御供したる女房なり）

白き小袖の上に小袷を着て髪を垂れ侍女一人（帯附下髪）を召具して出来り上手に着座し、しと
やかに金窪に會釋して

掃部「金窪殿には御見舞の御参入とや、御苦勞に御座ります
ト挨拶すれば、金窪も禮を正して

金窪「御局こそ御附添の御介抱一入の御配慮に御座る。シテ左禪室には御氣色いかど御渡に御座り
ますな

掃部「是と申して別に御變は御座ませぬが、御鬱然の所爲かして御氣が烈しう御成あそばします
ゆる、御拜顔の其節には……

金窪「委細心得て御座る、何なる御説が御座らうとも御逆ひ申さぬが何より肝心、イヤ此修禪寺は
伊豆の山奥、鎌倉とは事違ひ何角に附て御不自由、御痲癖の募らせ玉ふもコリヤ御尤で御座る

掃部「アイヤ左様ばかりでも御座りませぬ、全くは御病氣ゆるなれば何とぞ早う御本復ある様に願はしう存じます

金窪「何にも左様で御座る

ト金窪は何にも信切たる體に話し掛れども、掃部局は心の底に山斷ならずと思ひければ其舉動に目を注ぎたり、杉戸の外には人々の足音の聞ゆれば、局も金窪も心得て膝を直して待ち奉るに、杉戸を明させて前左金吾禪室頼家卿は御落飾の放髪にて下には白綾の小袖を召し其上に唐織の道服を羽織らせ玉ひ御手には中啓の扇を持って出来させ玉ふ、其後より侍女ども一人は御褥を持ち一人は御太刀を持って扈從し奉り御座を設くれば、頼家は其上に御着座あつて金窪をじつと見玉ひ、いと不興氣に

頼家「行親何しに参つた

ト聲を掛させ玉へば金窪は平伏して

金窪「ハッ、思はざる御説、行親御答に當惑仕る。去年九月御退隱の砌より絶て久しく尊顔を拜し奉らねど御氣色いつも麗はしく恐悦至極に存じ奉ります

頼家「汝も無事で重燃、シテ今日の参入は北條が差圖に依つて此頼家を弑さん爲に参つたか

ト未然を察する御詞に、金窪は胸に釘うつ思ひにて返答さへも出ざりけり掃部局は頼家が山なき言を宣ふぞと心を痛めて

掃部「ア、御説の御説。何して太郎行親が左様な所存で参上いたしませう

ト執成せば、金窪は局に目くばせしてさな憂ひ玉ひそ心得て候ふにと云ふ意中を様子に示して

金窪「ハ、ア全く以て左様な所存あつての儀にあらず、幸に鎌倉表非番の折からなれば御舊恩の忘じ難く行親が私の御見舞、然るを御勘氣かうむつては甚だ迷惑、尤も鎌倉出發の時に其趣き將軍家へも申上げ執権職へも述たる所、何れも我君の御不例を案じ煩はせ玉ひ、御保養專一に遊す様にとの御事に御座ります

頼家「言ふな行親、去年七月この頼家が病の牀に臥したるを是幸と北條義時父子の者共尼御臺に讒言なし達て讓補を我に促し、剩さへ謀叛に事よせ比企能員が一家を亡ほし我長男の一番をば若狭局もろ共に燔殺したる放逸無慙、その上ならず我までも斯く落飾の身となして此修禪寺へ幽閉させたる惡逆無道

金窪「アイヤ其儀は行親全く以て存せぬ事

頼家「知らぬと言はど夫迄なるが、其後去年十一月尼御臺を初として將軍家へも文通いたし、頼家

今は深山の幽棲の身と成て其徒然に堪がたしあはれ近習の輩をせめて参入許されよ又安達景盛は頼家申請なれば勘發加へ玉はれと切に所望を致せし所、所望の條々聞入がたし向後は文通無用ぞと御使にて達せられ我近習の輩は中野五郎を初として皆盡く遠流に處せられたりしこと、返す返すも無念の一至り

金窪「是以て評定衆のなせる業、その砌り此行親聊が異議を申せしが威勢なき身の悲さに趣意は忽ち水の泡誠に以て残念に御座ります、去ながら今日こそ執権職の威光に壓され表立ては申さねども、君の御恩は泰山より猶重し此行親を先として鎌倉中の諸大名争でか疎かに存じ申すべき、御爲と申す其時は、固より一命擲て忠義を盡す心の覺悟、殊には尼御臺と申し將軍家と申し恐ながら御親子御兄弟の御中ゆる假令一旦讒者の口に隔つとも近きに御中和らいで思召も達しますれば、唯今の御怒しはし御鎮め御座ある様願はしう存じ奉る。ノウ御局左様では御座らぬか
ト心の奥底押隠しさも愁然たる體にて相述べれば

掃部「行親が申す通りに御座りますれば御心を鎮められ御保護のほど願ひ上ます

ト御怒をなだむれば、頼家も少し心を和け玉ひて

頼家「ム、何にも行親汝が存じた事ではあるまい、併し頼家が憐愍一方ならぬ心の中推量いたせ

ト宣へば、金窪は空涙を直垂の袖にて拭拭ひて

金窪「恐入たる御詞、不覺の涙に胸塞り兎角の申上様も御座りませぬ

ト兩手を顔に押當てワツと泣伏たるが、心附たる體にて

「イヤ御保護の折から山なき體を御覽に入れ恐入り奉る、猶兩三日は滞留いたしますれば重ねて御氣色窺ひ奉るで御座りませう

ト禮拜すれば、頼家は愈々心解させて

頼家「太郎モウ退出いたすか、又明朝参入いたせ、待て居るぞよ

金窪「御懇の上意畏り奉ります

ト謹て御暇を告げ掃部局へも目禮して萎々たる體を粧ひ下手の杉戸の外にご出たりける。頼家は金窪が後姿を見送り玉ひて

頼家「ハテ見掛に似合はぬ金窪行親、優しい心底の漢であるのウ

ト金窪が詞に欺かれ頼もしく思召し玉ふを見て、掃部局は事易からず思ひてや

掃部「御説では御座りますれど此程よりして鎌倉より参入いたす武士はいづれ菖蒲か杜若あやめも分ぬ人心綿に針もつ世の中ゆる……

頼家「ハテ存じて居るワ

ト掃部局が猶も言はんとするを顧みず、望月海野の兩士に向はせ玉ひて温泉の用意は如何であるぞ、見て参れ

ト宣へば兩士はハツと答へ奉りて立つ。局は猶も氣遣ひて

掃部「それでは是より御入湯を……
ト云ひ掛る中に、頼家ははや御座を立たまひて

頼家「ゆるりと入湯を(木掛)致すであらう
(此觀よろしく鳴ものにて此道具廻る)

(二) 同 浴室

浴室は廊を経て山に傍て造られたる一構にて(二面の平舞臺)正面には鏡板の杉戸を建て、杉戸の下手には横長き窓を設け半開きたる障子の外には伊豆の山嶺ぞ見えたる、上下には白木の唐戸に鐵の金物打たるが建ありて(此所は出入口なり)其餘は都て板羽目を打たりけり、衣桁一ツ上手の羽目側に置き、清かなる圓座を一ツ設たるは頼家の御料と知られたり、唐戸(上手)の

側に長らかなる真紅の紐を掛たるは鈴の緒なり。此に下藤の侍淺波六郎藤倉平太の兩人は今しも湯加減を仕たりと見え四布袴の裾を染け袖を捲り上たる儘にて鏡戸の前に立ち(此體にて道具留る)

淺波「如何で御座る少し御温くは御座るまいか

藤倉「否々丁度宜しう御座らう、一體あまり熱い湯は毒ださうで御座るに山つて……

淺波「いかに左様ださうに御座る、俗に所謂ヨイくと申す中氣の病は得て熱い湯好に多い様で御座る

藤倉「然らば貴殿も御用愼なさるが宜う御座る、不斷からして熱い湯が御好物では御座らぬか。

淺波「御親切は忝ないが其用愼なら貴殿まづ成さるが宜い

藤倉「ソリア又なせに、身共は熱い湯は大嫌で御座る

淺波「熱い湯は御嫌でも酒は毎日一升酒、其上に婦人に掛けてはきつい凝方、それぞ即ちヨイくの基で御座る

藤倉「ハ、ア是は仕たり、北方ならば拙者より貴殿こそ御用愼、既に先日下田へ参られ温い牛

をば内々で御賞翫なすつたで御座らうがな

浅波「ム、夫を御存ある上は貴殿も矢張り牛の賞翫なされたな、イヤ是が即ち
藤倉「一ッ鍋の牛で御座るか、ハ、ハ、ハ、ア
など戯れ話をなしつゝ手を拭ひて居たる處に、下手の唐戸を明て、金窪太郎行親は出来れば

浅波「金窪太郎
藤倉「行親殿

ト聲を掛るを「コレ」と制して金窪は浅波藤倉の兩人を招ぎ密に叫き後を顧みて手招きす
れば、唐戸の外より金窪が召連たる下部の力士等六人ともに袴を股立に取り白襦を掛け白鉢巻
を成して俱に浴室を覗ひ足場をぞ謀つたる、金窪は浅波藤倉および力士等に向て目附を以て合
圖を定め引連て原の如くに唐戸の外に出れば、浅波藤倉は唐戸の扉を合せ四邊を見廻し左あら
ぬ體を繕ひて

浅波「御湯の御加減よろしくば御鈴を引と仕らうか
藤倉「夫が宜しう御座らう

ト浅波は上手なる唐戸の側の鈴の緒を牽は羽目の外にてガラ／＼と鈴の音聞ゆ、侍女は唐戸
より出来りて

侍女「御鈴の知らせは

浅波「ハッ御湯の御用意しう御座れば御申上下されよ
侍女「心得ました

ト唐戸の内に入れば、浅波は藤倉に打向ひて

浅波「金窪殿の今の言付、必らず御ぬかり召さるるなよ

藤倉「承知いたして御座る、去ながら金吾禪室は常から致して武勇すぐれ殊には稀代の早業なれば
假令得物を御所持なくとも侮り難き御大將

浅波「そりや左様では御座れども浴室は原來源氏の最後場、その上に又金窪殿が居らるゝ上は仕損
はよも御座るまい

ト互に大きな聲をして俱に心附き同時に口を塞たるも可笑し。侍女は出来りて
侍女「御渡りで御座ります

ト報知れば、兩人はハッと承はり會釋して下戸なる唐戸の外にぞ出たりける。上手の唐戸の
扉を左右に開かせて頼家卿は掃部局を従がへて御出座あれば、侍女は御太刀御櫛御亂箱(此
内に手拭等あり)の三人扈從して、頼家には御櫛の上に座し玉ひて侍女に向はせて

頼家「温泉の加減よろしくば直に入ると致さうぞ
侍女「御湯の御加減は宜いとの事に御座ります

掃部「左様御座りますれば妾が拜見いたす御座りませう

ト侍女に目くばせすれば、侍女④は心得て局と共に立て正面の鏡戸を左右より開けば浴室は
閨際より一段少し低く成りて根府川石を敷込たる叩き土間にて、其向に天然石を以て疊み上た
る温泉の槽あり、土間には置棚を据て其上に手桶、手水盥、嗽茶碗など備へ附てあり（但し此
鏡戸は四枚とも左右の羽目裏にて抜取る様にすべし）局は浴室の内を篋と見廻し自から手を湯
の中に差入て加減を試みたる上にて元の座に復り一禮して

「御加減よろしう御座ります

トは申ししが懸念に堪かねて

「御加減も宜く又御浴室に御別條も御座りませぬが、昨夜の夢見今朝また鳥の鳴音まで何やら氣
懸に御座りますれば今日の御湯浴御見合せ遊ばし度存じます

頼家「ハ、ア又しても局が氣懸り話、大概にして置たが宜い、此兩三日降續たる春雨の幸ひ今日
は快晴なれば湯浴いたして鬱氣を晴すが身の養生、ソレ侍女ども支度させい

ト立上り玉へば諫も詮なしと思ひて

掃部「左様ならば妾が御太刀を持って御警固を……

ト侍女④が持たる太刀を請取て局は自からは是を持て居る、侍女は四人にて頼家の道服を脱せて
是を衣桁に懸け、夫より帯を解き小袖を脱がせ參らせて同じく順々に懸る。頼家は掃部局を顧
たまひて

頼家「局、其方が其所に居ては入湯いたすに氣詰なれば太刀を渡して彼方へ參れ

掃部「なんの妾が控へ居ますとて勿體ない御氣詰が御座りませう。唯今も申上ります通り常に無い胸

騒ぎ何やら氣遣はしう御座りますゆゑ……

頼家「ハテ扱無用の氣遣ひ、其方が此に居ては入湯が致し悪いワ

掃部「デハ御座りませうが今日は……

頼家「エ、彼方へ參れと申すに

ト剃禿の起りたる色を顯はし玉へば、掃部局も此上は兎角押て申すべきにあらずとて御太刀を
侍女④に渡し心を残して唐戸の外に退きたり。頼家は侍女三人に着服を取らせて白き肌着に成
りて（白羽二重袴の長裾袴細紐）侍女に向せて

「例の通り一人是へ残り其餘の者は罷り立て

ト宣へば侍女③のみは御太刀を持って衣桁の陰の所に頼家より見えざる様に侍座なし、其餘三人は打連て唐戸の外に退く。頼家は亂箱の内より手拭を取出して叩の土間に下て湯槽の方に赴き玉ふ。此時金窪太郎行親は直垂の露を結で肩に懸け袴の裾を高く舉げ太刀を佩き下部の力士共を従へて下手の唐戸の扉を押明て亂入し力士も續いて押入れれば、是を見るより侍女③は侍女二「アレ狼藉者が……」

ト叫びつゝ立上りて頼家の方へ太刀を持って奔らんす。金窪これを見るよりも飛掛つて侍女を引捕へ矢庭に太刀を奪ひ取て力士に渡す、力士は請取て唐戸の外へ走り入る、侍女は金窪に腓腹を突かれて仆れたり。其間に力士等は浴室を取巻て

力士「禪室御覺悟
ト呼はれば、頼家は振返つて

頼家「尾籠なり下臈ども、下りおらう
ト大喝一聲ハタと睨み附たまへば、力士等は其武威に懼れて近づき得ず、金窪は太刀の柄に手を懸て

金窪「斯く力士を以て取巻く上は、禪室尋常に御覺悟召され

頼家「おのれ行親、この頼家を弑逆せんとは巧みつるよな

金窪「言ふにや及ぶ、禪室には稻毛の入道を密に語り大小名を嗾し謀叛をなさんと思召し、永へ置ては天下の妨げ、疾く誅し奉れと北條殿の内命にて推参なしたる金窪行親、御手向は御未練で御座る

頼家「ム、扱は義時父子が奸計にて我を殺し源氏の血統を絶つ所存よな、忠義を忘れて一味なし我に及向ふ無道の行親

金窪「問答無益、ソレ者共掛れ

ト下知すれば、力士等は左右前後より頼家を組伏んと飛掛る、頼家もとより稀代の早業にて武カことに勝れ玉ひければ投退け突退け容易く傍へ寄せ附け玉はず、金窪は頼家が身體に疵を附けずして殺さんと思ひたれば鈴の紐を引ちぎつて頼家を締殺さんと働けども中々思ふ儘ならず（此時烈しき立廻なり）遂に紐を頼家からみ附て金窪は太刀抜持て頼家を刺す、刺れながら力士を左右の脇に挟みて

頼家「北條義時、頼家が無念の最期覺えおれ

ト怒の毗裂る許りに、空を睨みて非業の横死を遂たまへり御年二十三歳とぞ聞えし(頼家が
落入るを木の頭に道具幕を引て鳴物にて繋ぐ)
北條は斯様に頼家卿を修禪寺に於て弑し奉りしが深く之を秘し表面は左金吾禪室御横に依て御
他界させられたりと披露したりければ、尼御臺所、將軍家(實朝)を初とし參らせ一同の悲嘆に
てありけり

是に頼家卿には男子四人の御子あり。御長男は一幅君、これは前幕に述たる如く比企判官能員
が娘若狭局の出生にて建仁三年小御所の亂に六歳にて燔死し玉へり。御次男は善哉君、これ
は加茂六郎が娘(鎗西八郎爲朝の孫)の出生にて頼家薨去の時には四歳にておはしけり。御三男
は千壽君、これは加藤左衛門尉影員が娘の出生にて二歳にておはしけり。此外木曾殿の妹の腹
に女子一人生れ玉へり

頼家卿伊豆に移され玉ひし時に、掃部局が計らひにて密に善哉君を鶴岡の別當の宿坊に忍ばせ、
千壽君をば女子に作り成して加藤が山縁の者の亭へ置まい置き參らせたり。其後建永元年に至
り尼御臺所の御聽に入れ奉りしかば、尼御臺所は殊の外に悦ばせ玉ひて善哉君を御所に迎へ入
れ改めて將軍家の御養子に立てさせられ(此時將軍家は十五歳にて善哉は六歳なり)往々は將

軍家の御相續にも立られ度思召なりき、然るに北條義時は當將軍家は未だ御年若にて是よりし
て公達を數多設させ玉ふべきに善哉君を御養子に立られたるを將來亂の基とも相成るべき歎次
には前將軍家(頼家)御落飾に引續きて御他界の事世の浮説區々なれば善哉君あるひは當將軍家
へ對せられて無念の思を懐かせらるゝの懸念なきに非ず詮する所かく御所中に養ひ置かるゝと
然るべからず如何はすべきと大江廣元に謀つたるに、廣元は尤なりと伺ひければ、左らば御邊
より其趣を尼御臺所へ御諫言あれよと望みたり、依て廣元は度々其旨を諫めて諫狀數通に及
びたれば、尼御臺所も其諫に従ひ建暦元年善哉十一歳の時に養子を廢し貞曉僧都の門弟とな
して剃髮せしめ公曉と名を改めさせて三井寺に上せ明王院の僧正に托して學問をなさしめられ
たり。公曉は初より出家したらば兎も角もあれ愁ひに六歳より十一歳まで御所中に育ち將軍家
の御養子と成て若君と尊ばれたる身が罪も無きに俄に廢せられ寺門に入られたる事なれば鬱憤
遣り難く常に北條を怨みておはしけり。其後建保六年公曉十七歳の時に鶴岡八幡別當貞曉入
寂したりければ其嗣職には誰かを補せらるべきと詮議ありけるに、義時は心に深く存する仔細
の有ければ公曉阿闍梨こそ其御仁體にて候ふべけれ早々三井寺より呼迎へ參らせて八幡の別當
に補任あつて然るべしと疏狀を上つたり、尼御臺所は兼てより御不便を加へられたる公曉の御

事なれば大に悦ばせ玉ひて廣元の諫を取用ひなく直に都より呼下して鶴が岡へは入させ玉ひけり。公曉は斯く別當に補せられて鎌倉に下り世の中の状勢を御覽あるに附ても御無念は益々止がたく北條および當將軍家へも恨を含み若し時機もあらば還俗して關東專當の主とも成らんものと思召し望ませたり、されば北頃鎌倉の御所中に夜々女房姿に扮ちて寢殿を覗ふ曲者あり其曲ものこそ公曉禪師なれと云ふ噂などもありて心あるものは密に眉を拵めて是を憂ひたり、又公曉は宿願の仔細あれば秘法の修行をなすべしとて甘繩山の奥に分入て苦行を修せられ諸國の大社大寺へ願書ども籠められたるが其仔細ば當時知る者も無かりけり

序幕 下

甘繩山公曉參籠 (承久元年正月八日の夜)

(道具幕を明ければ一面の山幕にて大薩摩大夫の物語り)

大薩摩「夫甘繩の山岳は。空に輝く星月夜。鎌倉山の戌亥にて。霧たち登る峯嶺き。老杉雲に聳えては。九腸の山路苦蒸て。往來も難き山奥に。御經讀誦に心を澄し。浮世を厭ふ御修法は。

善か悪かは白露の。珠数の音さへ鳴訝て。凄まじくも亦恐ろしよ

(此頃畢て鳴物になり山幕を振落せば)

此は甘繩山の奥にて、(舞臺一面の岩組) 上手寄の所に岩を切りて足懸となしたる坂路ありて、其上なる岩の頂には横に穿ちたる岩室あり、其前は僅ばかりの平地なり、鶴岡八幡の別當禪師公曉は(十九歳)此程よりの參籠に髪は長て栗毬の如くなり、鼠色の行衣に鼠色の衣を纏ひ、薬圓座の上に跣跣し前には黒木の經机を置き其上に柄香爐および經卷を載せ、岩室の中には本尊を安置して専ら秘密の行を修し其疲にや經机にもたれて睡り居たまへり、岩の中腹には公曉の門弟駒若とて三浦平六兵衛尉義村の子なるが兒髻に髪を結び小袖の上に指貫の袴を着て焼火をなして侍座したり。今しも公曉が睡中に聲を發して呻り玉へるを聽て

(是より竹本の淨瑠璃に成りて)

淨「唯事ならじと駒若丸。御傍に駈寄て。

駒若「我君さま、師の御坊さま、如何なされて御座ります

淨「呼起されて禪師公曉。はつと驚き目を覺し。四邊靜に見廻して。

公曉「スウ扱は夢にてありしよな。我六歳の頃祖母尼御臺の御沙汰により將軍家の御養子に立られ

十一歳に至るまで御所中にて育ちしが、俄に養子を廢られて三井寺に追上され六年が間の難行苦學、一昨年漸く立歸り鶴が岡の別當に補任なしたる我身の浮沈

淨「我は原より佛門に。身を委ねたる僧なれば。愛世の外に心を澄し。

「過し榮華は思はねど、忘れ難きは我父上前の將軍左金吾禪室頼家卿、十六年の其昔伊豆の國なる修禪寺に御幽閉の閑居にて不意に御他界御座ありしは御不例ゆゑとは表沙汰、眞は執權北條義時金鋒兵衛行親に意を授けて弑せしと

淨「世の取沙汰は虚か實か。胸に燃立つ無念の焔。

「ア、勿體なし、沙門の身にて煩惱の起る念慮を絶つべしと斯く參籠はなしつるに、今またありく父上の御最後ありし御有様夢に見たるは心の迷か、但しは修羅の妄執を棄してたべとの御告なるか

淨「浮世を捨たる法體も。輪廻につながらる執着に、嗔恚の思ひ去がたき、孝に心の夜の暗。くらきぞいとど無慙なる。禪師は心を取直し。駒若丸を見玉ひて

「オ、駒若には其所に居たよな、思はぬ夢に心を棄し沙門の身にて耻し、我は是より夜もすがら讀誦の行を修すなれば夜深ぬ内に其方は雪の下なる宿坊へ立歸つて休息いたせ

駒若「有がたうは御座りますが、師の御坊なり御主君の禪師様、御側に居ますが身の奉公此通いつまでも御宿直を仕り度御座ります

淨「健氣の詞に公曉禪師。つくぐ顔を見たまひて。

公曉「ム、流石は我乳母掃部局の一子、まだ幼年の身を以て夫ほど我を大切に存じてくれるか、アッ世であれば余が手づから烏帽子を着せ三浦小平六某と男になして得せんもの夫も叶はぬ我身の上、ハテ味氣なき世の様じやなア

淨「何角に就ての御悔み。駒若丸は兩手を突き。

駒若「其思召し有がたうは御座りますが、私は元服して男に成ますより矢張御側に斯して居て出家になり度御座ります

淨「口には言へど子心に。哀れ催す忍び泣。思はずわつと聲立つれば。

公曉「ハテ何を嘆く、愛情悲嘆は修行の妨、此に居度と申すなら是へ參つて俱々に後世の安樂願ふが宜い

駒若「畏りました

淨「御後に畏まり。菩提を願ふ法の道。心も澄る山奥に。止觀の業で殊勝なる。

ト公曉は經机を取て岩室の方に向け心靜に合掌して御經を讀誦し玉へば駒若も其後に同じく合掌したりけり(是にて此道具半廻しに成て公曉の形を隠し同じ山續「岩組」となる)

淨「折から麓の彼方より數多の人聲騒しく。

是にて鳴物に成りて向ふ揚幕より)掃部局前場よりは已に十六年を経たれば今は中老の女房となり櫛の衣を高く端折りて着、市女等を持ちて千壽の手を引き追掛られて足早に逃來る、千壽は掃部局が姪女の鶴の前に姿を扮し鎌倉様の袴の上に冠着を目深に冠りて顔を隠したり、是に續て安東次郎忠家、腹巻の胸板せめ太刀を佩き雜兵六人引連て追掛け來り(花道にて)二人に追付き争ひながら山腹(舞臺)に來り

安東「ヤア曲もの何所へ逃るぞ、逃るとして逃さうか

掃部「狼藉なり方々は何故あつて妾を取巻き手込にせんとはなされるよな

安東「狼藉とは奇怪至極、北條殿の嚴命うけ御詮議さびしき千壽丸討取る爲に向ふたる安東次郎忠家なるぞ

掃部「ム、其千壽丸と仰しやるは頼家卿の公達なれば妾二人の女子には御疑は些とも無い筈

安東「黙れ女め、汝が連たる娘こそ實は公達千壽丸、人目を包む女の姿、此鎌倉を忍び出で都を指

て落行こと伊賀四郎が訴人にて事明白に分つたり、きりく千壽を此方へ渡せ
掃部「是は仕たり安東殿、妾が姪の鶴の前、なにが千壽丸であるぞいのウ
安東「エ、噴ましい掃部局、どうで助けぬ千壽丸それを彼是陳するからはおのれ逆も冥土の道連、ソレ者共局もろとも討て取れ
雜兵「心得ました

淨「心得たりと荒氣の雜兵。情用捨もあらばこそ。我真先にと詰寄すれば。
掃部「聞分ない無體の舉動、女なれども三浦平六兵衛尉義村が妻、手出をなさば誰彼の遠慮は致し申さぬぞ

淨「若君後に押圍ひ。懐劍抜て逆手にもち。寄らば切んと構へたり。

安東「ヤア小癪なり掃部局、北條殿の討手に對し手向ひ致す上からは此世の暇とらせてくれう

ト安東次郎は太刀を抜き掃部局に切て掛れば、雜兵どもも得物を打振り安東を助け、千壽丸にも同時に切て掛れば、千壽丸も今はかうよと思ひ切りかづき脱捨て組附たる雜兵を左右に取て投退て

千壽「斯なる上は何をか隠さん左金吾將軍頼家祖室の三男千壽とは我事なるぞ、安東づれの下藤武

士、討ち得るならば討て見よ

ト懐劍を抜持て構ふれば

安東「扱こそ千壽丸だ、首にして褒美にせい

ト安東はじめ六人にて千壽丸掃部局を圍みて討取らんとするに、兩人とも必死の防戦（烈しき立廻り）安東も雜兵も手を負へば兩人も亦深手を負ひながら追つ巻りつ戦ふたり（是にて道具また半廻にて戻りて元の道具になる）

浄「深手ながらに千壽丸。局は何所とあちこちを。尋ね見たまふ後より。安東次郎が切込太刀に。ウンと其儘事絶たり。

掃部「千壽さまのウ

浄「よろめきながら出来るを。おのれも俱にと安東が。眞甲微塵と切附る。太刀下外して突込む懐劍。安東アツと云ふ間も無く。動と倒れて死たれば。局も深手に打倒れ。呻く音さへも幽なり。公曉は物音聞たまひ。合點のかじと讀誦を止め
公曉「アレ聞つるか駒若丸、人跡遠き甘繩山殊に夜陰の折なるにアノ聲音こそ女性の苦み、何者かは知らざるが助けて得させん

浄「修行の御座を立たまひ。燃残りつる焚火をば。薪折くべ搔立れば。吹來る夜の山風に。忽ちほつと燃立て。あたりを照す火の光り。公曉は手負の傍により。

「深手なれども念所は除たり、コレ女性氣を確に持て居られよ

浄「引起して光りに向け。其顔つくぐ見玉ひて。

「ヤアこりや乳母の掃部局

浄「宣ふ聲に驚きて。駒若丸は走りより（是迄は駒若は坂路の中腹に居たるなり）

駒若「母様にておはしますとや（ト顔を見て）母さまのウ

公曉「局よウ

駒若「母様のウ

公曉「局よウ

浄「呼覺されて掃部局。漸々息を吹返し。

掃部「鶴の前は何所におりやる、千壽様は何所において遊ばします

ト千壽を捜し尋ねれば

駒若「母さま、駒若で御座ります

公曉「公曉であるぞ」

浄「聞より局は。苦しき眼に兩人を見て」

掃部「オ、駒若か、ヤア若君さま、公曉さま、駒若じや、公曉さまじや」

浄「駒若引よせ抱きよせ。公曉の御手を取儘に。心ゆるむをしつかと押へ」

公曉「心弱し掃部局。シテ又此場の仔細は如何に、何者が手に掛しぞ」

浄「勵ます詞に掃部局。むくと起て公曉に向ひ。」

掃部「若君さま、無念に御座ります、北條殿の嚴命とて安東次郎と云ふ武士討手に向て此最期」

公曉「シテ其討手の譯柄は。まッた是なる少女の死骸は」

掃部「ナニ少女の死骸とは」

浄「千壽の死骸に心付き。見るよりわつと泣叫び。」

「チエー御最期を御遂あそばしましたか、ア、情ない御有様、モシ若君さま、此御死骸こそ御弟」

千壽丸様で御座ります」

公曉「何と申す」

掃部「先君左金吾禪室さま御不運の其砌り善哉千壽の兩公達ひそかに預り奉り善哉様をば八幡の貞」

曉僧都に托み置き千壽様をば加藤左衛門景員に匿まはせ深く人目を忍びしが」

浄「善哉様は尻御裏。御養ひに相成て。即ち今は公曉様」

「夫に引かへ千壽さま此廣い鎌倉にたよる木陰のあらざれば女の姿に扮させて局が姪と披路して」

今日まで隠して居ましたが」

浄「御連の盡は伊賀四郎。千壽丸と云ふ事を。北條殿に訴人なし」

「討手向ふと知たゆゑ今夜の暗を幸ひに谷七郷を忍び出で御身の無事を謀らんと願ふた局が忠節」

も水の泡とは成りましたが、モシ千壽さま未來で御詫を申します」

浄「語るを聞て公曉禪師。驚く胸を押鎮め。」

公曉「扱は是なるに骸は噂に聞たる我弟千壽丸にてありつるか、父上御不運の砌より行方知れずと」

聞たるが局が忠義に今日までも生長らへて居たりしに、討手に遇て暗々と斯は落命いたせしよな」

浄「死骸の側に摺寄て無念に無念を重ねたる。御落涙ぞ道理なる。駒若手負に縋り付き」

駒若「申し母様そんなら私が妹様じやと思ふて居た鶴の前さまは千壽様で御座りましたか、悲しい」

事で御座ります」

浄「聲も惜まず泣入れば。局は聲を振上げて。」

掃部「エ、末練じや駒若、悲しみ嘆く所で無い、幼少なれども局が一子我君様へ必らず忠義を忘るなよ

浄「我を忘れて遺訓は。天晴乳母の鑑なり。公曉は涙を拂はせて。過分なり局が忠義、汝が敵は公曉が取て遺す程に心残を致すなよ

浄「仰を聞より掃部局。夫はとはッと驚きて。掃部「ア、勿體ない、貴僧は尊い出家の御身、そんな心を少しでも御持あそばす其時は三世の諸佛へ對せられ

浄「誓を背き破戒無慙の恐あり
「必らず慎み遊ばしませ

公曉「氣遣ひ致すな破戒を働く公曉にあらず必らず共に心懸を残すなよ。夫に就ても汝が今端の際に臨み聞置たいは我父上左金吾禪室御他界ありしは金窪兵衛行親が手に掛り無念の御最期御遂なされたであらうがな

浄「思はぬ尋に。手負は悔りなしたるが。苦しき息を張上げて。

掃部「どうして其を御存知でましますか、其時の御有様これまで深く包みしが御存知の上は何を隠

さう仰の通り金窪右兵衛尉行親が北條殿の差圖にて不意に浴室を取圍み

浄「弑逆なしたる無道の仕業

「思へば無念で御座ります

浄「云ふ詞さへ息切て。今を限りの斷末場。哀しやのウと取籠る。駒若丸を引よせて。親子は一世と聞からは。是が此世の別かと血潮の派生死の瀬戸。公曉は無念の齒齧をなし怒の聲を震はせて。

公曉「扱は今しも修行の勞に打まどろみし一睡の夢にありく見たりしは誠の事にてありつるよな、

父上の仇弟の仇今また乳母の局の敵恨重なる北條義時なに安穩に置べきか

浄「云ふまよ岩谷に駈上り。持出す經卷押戴き

「南無三世の諸佛諸天善神、公曉一旦佛門に身を委ねたる誓を捨て修羅の街に立返る悪業非行も全くはじ父上を初とし繋る人の其爲に敵を報はん心ゆる破戒の罪は許させ玉へ

浄「我決心を是見よと。火中に擲れば燃上る。敵に三惡魔道の火。此世からなる修羅道の苦現を受る煩惱の。数は百八珠數の糸（ふつつと切れてばらくく）。實に鶴が岡拜賀の夜。雪の騒ぎの禍は。此に崩を顯はせり」

（公曉は岩の上より經卷を取て焚火の中に擲入れば、掃部局は驚て岩の下に這寄て互に顔を見合せ其まよ局は落入るを、公曉は合掌しつゝ悲みては又憤りて手に持たる珠數を引切る、此觀よろしくあつて鳴物にて落）

北條義時は其父時政と謀りて元久元年に頼家禪室を伊豆の修善寺に於て弒し奉りても猶心飽足らず機もあらば當將軍家（右大臣實頼公）をも無ものにして源家の血脈を絶ち北條家の世となさんものとは謀りたりけり。抑も此義時と申すは伊豆國田方の住人北條四郎時政が四男にて江間小四郎と申しよ者なり、四郎時政は住人ながらも伊豆に聞えたる豪族にて方人数多ありければ、頼朝卿その初め伊豆國に旗を擧げ玉ひし頃より深く北條を頼み思し玉ひ其娘の政子を娶りて妻となし玉ひけるに由り（此政子は後に御臺所にならせ頼朝薨じ玉ひて後に尼になりて世に尼御臺所と稱し頼家實朝の御母なり）北條は外戚の勢にて其威權高く勳功第一に置かれ鎌倉の執權とはなされたり。此時政器量人に勝れたるが上に政子の前また才智凡に秀で玉ひし方なれば内外より頼朝を助け参らせしが父子ともに嫉妬深き實にて頼朝の兄弟一族續々に殺されしも皆その故と知られたり、頼朝薨去の後に頼家の代となりて時政は遠江守に任せられ其子義時と俱に事を専らに取行ひけり、此義時は父に劣らぬ奸雄にて陰に謀りて頼家を廢して伊豆の修善寺に退隱させ奉り更に金窪太郎行親（後に兵衛尉になさる）を遣はして弒せしめたるも是みな義時が謀なりとは知られたり、其後時政は其後妻牧の方の逆心によりて事直しからず元久二年伊豆國に隱居なしたれば（建保三年に卒す）義時は其姉の尼御臺所と共に政治を統べ思の儘に行ひ

たり。去れば源氏の人々にて先づ頼朝の御弟には伊豫守義經五年三河守範頼二年御一族には備中守行家二年使左衛門尉有綱二年安田義久二年安田義定二年北條の計ひにて頼朝御在世の中に殺され、頼家實朝の代に及びては阿野法橋全成建仁二年及其子頼全を殺し、又武功の輩には梶原平三景時が一族二年城資盛が一家元年比企判官能員が一年建仁三年島山庄司次郎重忠が一年元久三年三郎親衛が一年二年和左衛門尉義盛が一年二年頼家の三男千壽保二年或は謀叛あるひは逆意に山て誅せられたると義時が爲せる業にて今は源家の血脈とては實朝公の外には公曉のみおはすなり。此上は公曉をして實朝公を弑せしめ公曉を誅しなば其望全く成就すべしとて尼御臺所に説勸め鶴岡別當貞曉僧都が入寂したるを幸ひに公曉を三井寺より呼下して別當に補任し腹心の輩を以て其逆意を煽動せしめ猶も伊賀光季を語り響應に事よせて公曉を我亭に招き決心をなさしめんと巧みたるに、公曉も亦兼てより義時を父禪室の敵なりと聞玉ひければ自ら其事情を知らんとて招に應じて北條義時が大倉の亭へは赴かせ給ひけり

(義時は建保三年に相模守に任せられ同き六年に四位して右京權大夫になされたれば右京兆または單に京兆とも呼びたるなり(京兆とは京太夫の漢名)なり)

第二幕上

北條大倉亭の響應

此は北條義時が大倉の亭の別殿にて廊下にて(花道)寢殿へは通じたり、寢殿にて響應の事畢れば此別殿に招じて御物語どもあるべしとて兼て用意に及びたり、此別殿は(平舞臺)正面の上手にて簾を掛けて設の便殿に通じ其他は壁に紙を張りて鱗の形を其上に押し、左右には杉戸を建たり、正面の中央に揚燈を敷き其左右に圓座を置いて主客の席を設けあり此に北條の郎從境平次、豊田六郎、荻野平九郎の三人いづれも烏帽子布直垂にて扣へたり(談話の體にて鳴物にて幕明)

境「餘寒とは申ながら今朝よりして厳しい寒氣、随分忍び難う御座る
 豊田「平次殿の云はると如く俄の寒氣、此空模様では夜に入て
 荻野「雪にでも相成らねば宜しう御座るが
 境「何にも左様、平日なれば春の雪鎌倉山の銀世界、コリヤ一段の眺じやと御興を添ゆる事もあらう

が……

豊田「それに替つて今日は恐多くも將軍家右大臣拜賀の御爲に鶴が岡への御社參と晴の御出の事なれば

荻野「降出しては何かに不都合、どうか天氣を持たせ度もので御座る。時に寢殿の方はまだ御饗應が果ぬと見えますな

境「さればで御座る、今夜の御社參我君には供奉の御列、然るに今朝公曉禪師……
豊田「御招待には非時の境飯、辰の刻に初まつて最早巳の刻過たれば

荻野「程なく是へ御渡りに相成る時刻、何は兎もあれ一同に
境「御出向の用意をば致す御座らう

ト三人は末座に居並びて待受る、此時郎の彼方(揚幕の内にて)「御渡り」と云ふ報知の聞ゆると同時に杉戸(向ふ揚幕)を明させて眞先に北條右京大夫義時立烏帽子水干にて案内をなし、次に公曉禪師(剃立の坊主鬘)白綾の小袖、烏だすきの指貫、緋の素絹、萌葱金欄の袈裟珠數、中啓(都て天台宗の法衣)次に喝食兩人、指貫兒水干にて一人は袈裟箱一人は亂箱持給にて中には紙など入れて上に帛紗を掛てある)を持ツ、其次に伊賀左衛門尉光季、烏帽子直垂(是は御相伴)

其次に義時の次男江間次郎朝時、同三男陸奥三郎重時、同四男相模四郎政村いづれも烏帽子直垂にて附添ひ(舞臺)に來れば義時の案内にて公曉は揚幕の上に着座し、義時は上手の圓座、光季は下手の圓座に座り、朝時重時政村は下手に並び何れも拜禮する、但し喝食兩人は公曉の後にて下手の横に着座する。公曉は初より心中に不機嫌の體を含みたれども左あらぬ色にて義時に向ひて

公曉「町噂の饗應過分に御座るぞ

義時「御饗添う存じ奉る、折角御招待は申しよかど粗末の御膳義時深く耻入て御座る、尤も御刻限も未だ午の刻に間も御座れば暫し是にて御ゆつくり御寛を願ひ上ます

ト三人の子息等に向ひて
「用意なしたる粗末の御茶其方共の御給仕にて禪師君へ奉れ
朝時「畏り承はつて御座ります

ト朝時重時政村の三人は打連て立ち、境等に差圖して下手の杉戸の外より假頭および果物を入れたる足打の蓑并びに天目臺に載せたる秣茶を公曉に進め、三人は原の座に復し、境等は一禮して杉戸の外に出づ(是より床の淨瑠璃になりて)

淨「十字に添て御茶をば、勸め参らせ奉る。公曉は亭主に向はせて

公曉「京兆にも知らるゝ如く我十一歳にて出家なし三井寺にて多年の勤學、一昨年再び鎌倉に罷り

下つて参りしが、宿願の参籠も相果て宿坊へ歸りし折しも今日の饗應公曉賞翫致して御座るぞ

淨「底意に何とも知らねども。會釋の詞に義時は。愀然として手を支へ。

義時「左程まで此義時が差上し粗末の境飯御賞翫は遊ばせしか。のウ左衛門、禪師君には畏こくも

右大將家の御嫡孫一度は御養君に立たせ玉ひし御身の上。アッ世が世であれば衛府の督中納言の

中將、日本國の大名小名御家人に侍つかれ時めき玉ふておはさんに、御連の末とは云ひながら雪

の下なる御宿坊物凄しくもましますこと御痛さの限りぞと老の眼に思はずも不覺の涙を翻して御

座る

光季「何にも京兆殿の仰す如く御父左金吾禪室御護補の其砌り關西三十八ヶ國の地頭職は御弟の千

幡君に譲り關東廿八ヶ國の地頭並に惣守護職は御嫡男の一番君に充らるべしとの御定め、然るに

一番君には不慮の御横死これあつて代は右大臣家と相成たれど、正しく關東の主にてあるべき御

身柄

淨「夫が今では遁世の。有るに甲斐なき御有様。いとをしさよと義時に。見交す涙四の袖、わ

ざと濕してしめつたり。禪師は見るよりあざ笑ひ

公曉「フ、ウ親切らしき其詞、忝うは存すれど、さばかり淺間の言の葉に心を素す公曉でないぞ

トはきと云はれて光季はギックリして

光季「何と御意遊ばします

公曉「我は斯く佛に仕ゆる法師にて捨し淨世の憂事に望もなければ過去に恨を残す所もなく菩提を

願ふ此身ゆる仇もなければ敵もなし、北條一家の人々がたとひ父の仇にもせよ今更何と思ふべき

夫に無益の執成は聞もいぶせく思ふて御座る

淨「胸に釘うつ詞のはし。義時はつと思ひしが。色にも出ず顔やわらけて

義時「流石は左金吾禪室の公達あつばれの思召し、義時恐れながら感じ入り奉る、尤も禪室御護補

の一係並びに御他界の儀に付ては其時よりして虚説は區々、自然は夫等を聞き召し義時一家の者

共を心憎とおほさんが御外戚に列なつて御爲を存する此義時いかで御疎略に存じませうや、此儀

御賢察願ひ奉る

公曉「云はれな京兆、我父左金吾將軍頼家卿御不例なツしを幸ひに尼御臺を説き勸め護補の沙汰に

及びしは和殿が父の遠州と俱に謀つてなせし仕業、次には謀叛に事よせて比企判官能員が一家を

亡ぼす其上に我兄上の一幡君燔殺せしは和殿に非ずや、其上に又我父に強て讓補を促がして落飾させ修善寺の山奥へ幽閉したるは誰が差圖、しかのみならず武士を差向け勿體なくも禪室を浴室に於て弑逆なしたる暴悪無道、是又誰が差圖をなしたるぞ

公曉「和殿すでに執權にてある上は存せぬ知らぬと遁辭よも口には出されまい。但し和殿の差圖であつたか

義時「イヤ中々以て……」

公曉「然らば誰の差圖で有りしぞ

義時「其儀ばかりは……」

公曉「言はぬとあらば弑したは和殿の仕業で有らうがな

公曉「返答せぬか。返答なくば北條義時、君を弑する不忠の大罪道るゝ所は有るまいがなア

「疊み掛けたる禪師が詞、物に堪えぬ子息の三人。顔見合て座を蹴立て。禪師の前に進みよ

朝時「ヤア舌長し公曉禪師、我父を罵つて君を弑する不忠とは聞くに堪ざる悪口雜言、御連枝なりとて容赦はならぬ

浄「仔細聞んと詰寄れば。義時くわつと子息を睨み。

義時「尾籠なり悴ども右京大夫義時が主君と敬ひ奉る禪師君に對し不禮至極、おのれ等如き小冠者ばらが口出し致す事でない、扣へおれ

三人「じやと申て……」

義時「エ、扣へおらぬか
ト叱り附ければ、光季も扣ふべしと制するに山り三人は原の座に復りて扣へ居る

浄「義時きつと形を改め。
義時「理至極の御尋ね、義時固より聊も御疑を被るべき所業は曾て無けれども其分疏は仕

光季「ソリヤ又なぜにな

義時「さればなり光季、左金吾禪室御讓補御他界の件と申すは御親子御兄弟の御中に繋る事柄、明白に述る其時は主家の耻辱おのづから露顯いたすは知れたる事、義時今年五十七歳、老の境に及

ぶ身で主君の大事を打明し何の手柄に成べきや、何事も義時が身一ツに引受て主家の御無事を計るが第一。禪師君にも僕を飽まで御父禪室の當の敵と一概に思召すとあるならば義時が此白髪首いつ何時でも刃られて胸の御無念晴させ玉へ、命は敢て惜み申さぬ

浄「黒き心を押隠し。さも清らかに述べたれば。光季首を打振て

光季「イヤ、憚りながら、そりや御分別が違ひませう、當將軍右大臣家もまつた是なる禪師君もどちらも同じ御主君なれば、僕は分限は仕らぬ。心を鎮めて御聞あれ。頼家卿を幽閉なし御命を短めしは北條殿の所爲に非ず、恐れ多くも右大臣家の上意に出たる事で御座る

公曉「なんと申す

義時「是は仕たり光季、誰が許して一大事を明ら様には口外めさる

光季「オ、サ、我君公曉禪師の仰せに従ひ御答へ申す其中は執權職の威勢でも御差止は相成まい。イヤ何、禪師君仔細と申すは個様で御座る、左金吾將軍御不例の其砌り天下を二ツに相分ち關西は千幡君關東は一幡君と成る時は比企北條の兩執權、左ありては和田大江三善中原を初とし侍所問注所いづれも威權を失ふ恐れ、是を憂ひて廣元義盛尼御臺を説き勸め將軍家の御護補を取計らつたる彼等が奸策

公曉「シテ又金窪兵衛尉行親を修善寺へ差向て我父禪室を弑せしは
光季「是以て廣元義盛等が勸に山り右大臣家の御沙汰で御座る

公曉「ム、

浄「思ひ掛なき申條。さすが禪師も聞毎に。虚實の境わきかねて。思ひ惑はせ玉ひけり。仕す
ましたりと義時は。わざと愁ひの色を成し。

義時「アツ仕なしたり伊賀の左衛門、山なき密事を言ひ散し同僚ばかりか御主君の御悪事まで告たるか、此上は力なし、事長くとも聞し召せ。右大臣家の御代となり廣元義盛兩人にて威勢盛んに振舞たれば苦心の餘り、某は稻毛の入道其外と密かに謀つて禪室を當鎌倉へ入れ奉つらんとしたる計略の早くも漏れて彼等が手廻し禪室には不慮の御最期残念至極に御座ります

浄「無念の様子粧ひて。實を飾る辯舌に。禪師は御座を進み玉ひ。

公曉「左程我父禪室に心を寄たる和殿が又金窪兵衛尉行親を侍所となしたるは如何なる所存か承らう

義時「夫ぞ即ち某が身の潔白を顯はす證據。思ひ廻せば廿四年のはや昔し、那須の御獵の其時に箭を争ひし口論に此義時と行親が不和に不和をば重ねしは鎌倉中の諸大名いづれも存知の次第なり、

されば右大臣家には此不和を知し召し密事の役目あの行親に命ぜられ問注所の行司とまで進みし立身、コレ修善寺の御褒美と誰知らぬ者は御座らぬ

公曉「然らば和殿は何故に此公曉の養子を廢し法師には成したるぞ
光季「アイヤ其儀は全く我君の思召が違つて御座る、當將軍家の御養子に御立あれと尼御臺へ御勸め有しは京兆殿

義時「然るを早く佛門に入れ鎌倉中を出し奉れと諫言なせしは廣元なりとは御存知あらずや
光季「まッた鶴岡の別當貞曉僧都身まかりたる其跡に我君を入れ奉らんと政所に申立て其計ひを成たるは誰が力ぞと思召す

公曉「そは右大臣家の御説なりと聞つるが
義時「恐ながら此義時が疏狀に因て定まつて御座る
公曉「スリヤ和殿の吹舉に成りしと申さるよか
義時「御疑とあるならば證據の疏狀御覽に入れん。イカニ朝時某が秘密の手箱是へ持て朝時「畏て御座ります

淨「父の差圖に朝時が。持出したる手箱より。義時書面を取出し。禪師が前へ差出し。
義時「篤と御覽はせよ。廣元が諫狀義時が疏狀すべて夫に御座ります
淨「禪師は書面をくり廣げ。讀下して見玉へば。一々違はぬ詞のわりふ。敵か味方が白眞弓。ひくか返すかやちまたに。迷ふ心の雲霧は。日影に晴れぬ心地なり。繰返したる其中に。思はず見えたる記請の一通。

公曉「前左金吾禪室の公達善哉君公曉禪師の御事に付き神明佛陀を驚かし奉る事
ト讀掛たまへば義時は周章て公曉の御手を押へ
義時「其記請御覽に入るべき品で御座らぬ
淨「引取て懐中深く入れたれば。公曉は怒の聲を立て。
公曉「現在公曉禪師と我名を指て神佛に誓を立たる其記請、我一見を止めらるは、扱こそ和殿は我父上に飽足らず我まで殺す所存であるか
義時「イ、ヤ中々以て其儀にはあらねど是なる記請は御覽に入れぬが御身の爲
公曉「然らば決して見せぬと申すか
義時「いつか一度は改めて御披見の時節が有るで御座らう
淨「裏の裏ゆく巧の手段。禪師は尙もせき込たまひ。

公曉「見せぬとあらば夫迄なれど、披見の時節のある上はなぜ唯今は見せ申さぬ、但し我をば害する記請か」

297

淨「問詰たまへば。左衛門光季かたへより。」

光季「京兆殿、其記請には拙者も血汐を流し一人、貴殿が御覽に入れぬとならば此光季が誓詞の文言同意の交名一々是にて相違やうか」

義時「サアそれは……」

光季「然らば御覽に御入れ召され。サア其記請拙者へ御渡し下され」

淨「請取る記請押開き。恭しく讀上る。」

夫惟れば。故左金吾禪室は源家の嫡流にして、公曉禪師は關東の主君なり。悲い哉禪室護者の毒舌に由て御身を伊豆の深山に亡じ玉ひ、痛い哉禪師佞人の惡計に引かれて素懷を鶴岡の宮寺に沈め玉ふ。我等の憐愍何事か是に若んや。然れば則ち當將軍家尊齡已に廿五を踰たまふと雖ども、令嗣いまだ一人の出生を見ず。是に由て早晚養君の擇びに至らば、我等誓て公曉禪師を以て源氏四代の大將軍に備へ奉るべし。是先君の高恩に報する所なれば、身命固より擲つゝの覺悟なり。若し此文に違犯せしめば、上は梵天帝

釋、下界は伊勢春日賀茂、別しては源家の氏神正八幡大菩薩等の神罰我等が身に蒙るべきなり仍て謹で以て記請の文如件

建保五年戊寅六月十日

- 右京權太夫義時
- 式部丞泰時
- 相模守時房
- 前筑後守頼時
- 大須賀太郎通信
- 伊豆左衛門尉頼定
- 三浦左衛門尉義村
- 東兵衛尉重胤
- 佐々木左衛門尉高重
- 伊賀左衛門尉光季
- 若狹兵衛尉忠季

斯の通り

サア是でも記請の趣き疑はしいと思召すか、今にもあれ右大臣家に御變事あらば專當の御主君は君ならでは外に無し、たとひ廣元一味のやからが御所中を固むるとも、北條三浦の一族はじめ相模伊豆の若殿ばら我先にと集まつて唯一戦に蹴破るは何より以て容易こと。夫を思へば此腕が無念に痛を起して御座る

淨「腕なでさすり説立る。底意ぞ謀叛の勸なる。公曉はわざと去氣なく。

公曉「コハ思ひ寄りぬ記請かな。斯く佛門に入る上は再度の養子も望にあらす。唯いつ迄も右大臣家の御盛運願ふが即ち公曉の勤め

淨「口には言へど心には。思ひ定むる今夜の拜賀。右大臣家を附ねらふ。心底それと見て取れど。素知らぬ顔にて打詰さ

義時「何にもそれが萬全の思召し。アツ右大將家の御武勇にて建させ玉ひし源氏の天下も御三代にて絶ると云ふは……

公曉「それも果報の盡る定業

ト澄したる體にておはしけるが、思ひ出したる様子にて

「イヤ思はぬ話に意外の長座、最早暇を告ると致さう

義時「まだ御時刻も早う御座れば今暫くの御寛ぎ

公曉「イヤ、午の刻には社頭の勤もあるなれば……

義時「然らば御見送をなし奉らん、ソレ悻共供奉の御用意申願

朝時「畏て御座る

ト朝時は郎の彼方(向ふ)に退けば、公曉は囃食に向せ玉ひて

公曉「當家退出の前に法衣をば改めん、ソレ便殿へ持参なしおけ

ト袈裟箱を目で指圖し玉へば囃食は承つて簾の内に入る、公曉は思ひ出したる體にて

「イヤ、願と失念を致して居たが、今夕は右大臣家拜賀の御社参よな、京兆にも必らず供奉であら

うの

義時「御意の通り義時も老體ながら供奉仕ります

公曉「フウシテ供奉の御役はな

ト軽く問へば義時は早くも其と推して

義時「ハイ別に御役とは……

コハ危しと故と答を粉らすと、光季は傍にて夫とも氣附す

光季「京兆殿には御劍の御役に御座ります

公曉「フウ御劍の御役

ト心中にて語たるが、左あらぬ體にて

「イヤ晴の御役御苦勞に御座る

ト會釋あれば、義時は默禮しながら公曉の心中山斷ならずと見て取たり、此時喝食は簾の中よ

り出來りて

喝食「御便殿御着替の御用意宜しう御座ります

公曉「京兆免し召され

義時「ハッ、唯今に御見送申上るで御座りませう

ト光季と供に平伏すれば、公曉は重時政村の案内にて喝食を召具し簾の内に入り便殿の方へ赴

き玉ふ。後は義時光季の兩人のみに成たりければ、光季は四邊を見廻して義時と顔を見合せて

光季「慥に決心いたしたに相違御座らぬ

ト云へば、義時は首を振て

義時「サア決心は致したが、彼似是法師め、其序に此義時まで殺す所存と相見える。イヤ中々由斷は相成らぬ

ト小聲にて語る此時下手の杉戸より境平次出來りて

境「禪師には御着替濟せられて御座ります

義時「心得た

ト光季に向ひて

「イヤ御見送を致すであらう

ト立上り衣紋を正したり(此觀よろしくあつて幕、鳴物にて繋ぐ)

扱また實朝公は(幼名千幡)去る建仁三年十二歳にて御兄頼家卿の跡を續で將軍家に立せられ、

其十月に元服して右兵衛佐に任せられ、其翌年右近衛少將になされ、尋で右中將に昇り玉へり

此君生得優美にておはしけれども流石に頼朝卿の御子なれば自から大將軍の氣風を備へ内に武

勇の心を蓄へ玉ひしかども世は北條の計ひにて御母御尼臺所と義時との間に萬の政務を執行

はせられ更に實朝の思召の如くならず、源家の血統は追々に誅戮せられ功臣の輩も相尋で罪を

蒙りし程に恰も實朝は孤立の状態とならせ玉ひ其上に御年廿五に及ばせられても御子の一人だ

に無かりければ何かに附て世を味氣なく思召し玉ひ和歌の道にのみ心を寄せられ、専ら官位の昇進を心掛たまひて頻に京都に乞はせたり、依て二十二歳にて正二位の右中将たりしを二十五にて權中納言の左中将に昇り玉ひ、建保六年(二十七歳)には左大將にて右馬寮御監を兼させ同じ十月に内大臣、同じ十二月に右大臣に經上り玉ひしかば、其翌年(承久元年)正月廿七日を以て右大臣拜賀の爲に鶴岡八幡へ御社參あるべしとて兼て其用意にぞ及ばれたる

第二幕下

鎌倉御所の諫言 (承久元年正月廿七日午後のこと)

此は鎌倉御所の寢殿(高二重)にて正面には織物の裂地を以て切廻したる縁の障子(襖)を建て彩色にて群鶴の圖を畫かしめられ、引手には眞紅の紐をぞ下られたる、寢殿の外には母屋庇(入側)を廻し其外には廣縁を附られ、其縁は左右の廊に渡つて對の屋へ通じたり。三方とも翠簾を高く捲上げ御庭(平舞臺)の上手にある梅の花は今を春邊と咲出たり
此に正二位右大臣左近衛大將右馬寮御監征夷大將軍源實朝公は寢殿の中央に座し玉ひ、白綾の

御小袖の上に紅の大帷子を召し大紋の指貫を着玉ひ、御後には秦公氏、烏帽子直垂にて御髪を上げ唯今しも結上て髪を撫附まらせたり。御傍には御鏡臺を置かれ文臺の上に御硯箱御短冊など載たるもあり。御臺所は下髪、小鞋、緋の袴にて下手に座して歌書を読み玉ひ、侍女○西袴着て侍居れり、又御座の後の方には束帯を容たる御廣蓋あり、下毛野敷光は廣庇の下手に扣へたり此觀よろしく(鳴物にて幕明く)

公氏は手を拭ひ畢りて

公氏「御髪仕つて候ひつるが是にて宜しきや御覽せ遊ばしたう願ひ奉ります

ト云へば實朝は鏡に向ひて髪を御覽ありしがやがて御髪を抜取て後を振向き

實朝「公氏これを……

ト渡し玉ふ、公氏は賜はつて打驚き

公氏「御髻に後れ毛を残し恐入て御座ります

實朝「イヤ、後れ毛で無い、わざと一筋抜取て余が形見に取らせたのじや

公氏「ア、御拜賀の御式に臨み目出たからざる御詞

實朝「電光石火の世の中にいつ死ぬとも知れざる命、何忌はしき事のあらう

ト更に氣に掛たまはず、公氏は黙然としてかの髪毛を紙を包みて懐中す、實朝は思ひ出し玉へる様に侍女に向はせて

「烏帽子直衣をもて
侍女「畏りました

ト奥へ入る、御臺所は此時上手の紅梅の花盛なるを御覽じて
御臺「アレ御覽遊ばせ、軒端の紅梅今を盛と咲出て御座ります

實朝「何さま四五日見ざりし間に南枝も北枝も遅速を論せず咲つるよな

ト梅花を見て居たまへり此時侍女は烏帽子を臺に載せ、御直衣を吳服臺に載せて持出せば、公氏は受取て敦光に目くばせして手傳はせ、まづ實朝に直衣を着せ參らせ夫より烏帽子を着せ奉り畢れば、實朝は再び座し玉ひて敦光に向はせて

「伺候の面々相控へてありつらん、是へ出よと申傳へよ

敦光「畏り奉ります

ト縁傳へに下手に入る、此の内公氏は束帶の下調をなす、實朝は紅梅を見て考へておはせしが傍の文臺を引よせ筆を取て短冊にさらりと認め御臺所に向ひ玉ひて

實朝「當座の一吟御覽あれ

ト渡し玉へば御臺所は請取て押戴き玉ひて讀たまふに

御臺

いでいなばぬしなき宿となりぬとも
軒端の梅よはるをわするな

公氏は此詠を聞咎めて

公氏「いでいなばぬしなき宿となりぬとも軒端の梅よ春をわするな

「公氏如き未熟の者が評論は恐れある事ながら禁忌の和歌は何とやら……

御臺「オ、思はしい此御歌、主なき宿となりぬともと遊ばしましたは……

實朝「ハ、ア又しても心掛りとの玉ふか、人の壽命は朝の霜夕のかけるふ、出る息の引をも待たぬ

果なきもの

御臺「とは存じて居りますが今日は目出たい拜賀の吉日、それに此御歌と云ひ……

公氏「賜はられたる御形見いかにも吉兆ならざれば心懸りに御座ります

實朝「凶事の告と云はるか、生死流轉の境には吉もなければ凶も無し、ハテ無益の心勞仕玉ふな

ト宣へば御臺所も御詞なく公氏も亦默然たり。此時下手の廊よりして眞先に文章博士仲章(狩衣)相模守時房(水干)伯耆前司親時(直垂)右馬助行先(水干)出來り實朝および御臺所に拜禮して上手の廣庇に着座する。次に武田五郎信光(水干)長尾新六定景(直垂)太夫判官景廉(水干)秋田城介景盛(直垂)小笠原六郎長清(直垂)出來り下手の縁に着座する、次に民部太輔廣綱、關左衛門尉政綱、若狭兵衛尉忠季、狩野七郎光廣、境兵衛尉常季いづれも直垂にて上手の縁に着座する。但し公氏は下手の庇際に座る、座定つて後に仲章は進み出て

仲章「今日は拜賀の御社參、御出門は酉の刻、御參拜は戌の刻、御先驅雜色御隨身、供奉には公卿殿上人、檢非違使隨兵大小名行列の御次第兼日の御定め晴の御儀式恐悦至極に存じ奉ります

實朝「祝賀の伺候大慶なるぞ

信光「斯る目出たき御中に宿老古參を差置て言上いたすは恐れあれど、今夜の御社參御見合せあらせ度、信光始め定景景盛長清景廉一同に願上げ奉る

實朝「其仔細と申すはいかに

定景「其儀は定景是にて言上仕らん、今日午の刻過に是なる景廉俱々に御所の内外を見廻りたるに南の御門の家根に當り靈鳩頻に鳴轉る、唯事ならずと見上る折しも、是此如く首なき鳩の亡骸

は二人が中にはたと落たり、抑も鳩は氏の御神の使はしめ武運を守る瑞鳥なるに首を失ふ不吉のしるし、我々一同甚だ以て氣掛なれば今夜の御社參は御見合あるべしと是まで推參いたせし所

ト帛紗に包みし首なき鳩を出して御覽に備ふる

信光「又御次にて承はれば御髮髮の御形見まつた禁忌の御詠吟旁以て吉瑞ならず、兎も角も一同の願ひ聞入たまひ今夜の御社參御見合せはあるか、但しは御代參にて事濟ませ玉はる様

五人「願ひ上げ奉ります
時房「是はしたり、御邊達は武功に名高き人々なるに常に似合はぬ臆病至極、御不例または變事にて御出の成すばイザ知らず、左も是なきに御拜賀を御延引ある時は天下の笑ひ源家の瑕瑾、夫でも拜賀を御止め召さるか

信光「ハテ知れた事、萬一にも右大臣家の御身の上モシ凶變の是ある時は源氏の浮沈天下の騒ぎ、夫でも達て御勸め召るか

時房「オ、勸めて見せう
信光「オ、止めて見せう
其外「オ、止めて見せう

ト上手の方は仲章の外は皆一同に御社参を勧め、下手の方は信光初これを止め騒ぎ立ち言ひ募り既に喧嘩に成らんとす此とき下手にて

覺阿「暫く覺阿夫へ参つて言上いたす事こそあれ
皆々「アノ聲は

時房「前大膳太夫大江廣元入道覺阿なるか

ト時房等は山なき人の参上かなと思ひ信光等は好き方人の來れりと云ふ思ひにて双方控へて待居たり、廊よりして前大膳太夫陸奥守大江廣元入道覺阿、襦の長直垂の上に袈裟を掛けて出來り正而少し下手寄の縁側に着座し實朝公御臺所に拜禮なし、夫より一同に會釋して後に實朝の顔を暫く見詰て思はず落涙す、一同は是を見て不審の色をなす。覺阿は實朝に向ひて

覺阿「覺阿成人の後は今日まで涙の面に浮ぶと云ふ事會て存知申さどツしが、然るに只今昵近し奉るに落涙禁じ難きこと唯事には御座るまじ、定めて仔細あるべきか、先程よりして一座の評議是非は暫く差置て今夜の御拜賀思召し止りは相叶ひ申まじきや、御賢慮如何に、窺ひ奉りたう御座る

實朝「いかに入道、御臺所を初として信光定景其外の面々が達ての諫も一應は尤には似たれども既に

に拜賀の定の上は今更延引なし難し

覺阿「信光定景其外は兎も角も此覺阿が御諫言を申上てもな

實朝「不吉の兆に心迷ひ拜賀の社参を止めん事實朝會て思ひもよらぬ

覺阿「左迄に堅くの玉ふ上は覺阿も最早無益の諫言は仕らぬ但し覺阿が一の願ひ御聞入は下さるま
いか

實朝「シテ其願と云はるとは

覺阿「今夜の御社参御刻限を繰上て唯今よりして出させられ日暮に及ばぬ其前に御歸營あらま欲し
う御座る、是ぞ即ち覺阿が願ひ

實朝「スリヤ和入道には日暮ぬ前に拜賀を遂よと申さるよか、仲章此儀如何で有うな

ト問はせ玉ふ、仲章は初め祝詞を申上たる後は直に公氏を相手に束帶を取調べ更に前段の争論にも關係ざりしが此時容を改めて

仲章「其儀は決して叫びますまい、凡そ大臣家は寺院の参詣佛事法會是晝中に行へど神事は必らず
夜陰の定め、其例に則とつて既に御次第定まる上は今更俄に變ん事不都合至極に御座ります
覺阿「そは一理あるに似たれど兼日の御定を其日に至つて變る事公家に於ても儘あるためし況てや

是は武家の御拜賀夜陰でなくては神前に出られぬ理も御座るまい此儀御聞入只管願ひ奉る
實朝「折角の願なれど大臣の神拜は夜陰に行ふ定とあれば實朝是に違背なし例を棄すは心外なり、
必らず悪くは思はれなよ
覺阿「斯く御決心の上は再應申すも詮なき事
ト公氏を見て

「公氏御次に差置たる覺阿がわざく持參の一品是へ御持出し下されい
公氏「畏て御座る

ト公氏は下手の廊の外に出る、覺阿は仲章に向つて

覺阿「今夜御拜賀の御儀式其奉行は御邊で御座るか

仲章「いかにも左様

覺阿「然らば御邊に御謀り申す事あれば是へ御出座下されよ

仲章「うけたまはつて御座る

ト仲章は正面縁側の所に出て覺阿と向ひ合に座る。此時公氏は腹巻を白の絹に包みたるを持出して覺阿の前に置く、覺阿は請取て包を開き腹巻を出して實朝の方に向て

覺阿「君には御幼き頃なれば御見覺は御座あるまじきが、是ぞ即ち御父上右大將家南都東大寺大佛
供養の其折に召させられたる御腹巻
實朝「何と申す故右大將家の御腹巻とな

ト褥を下りて廣庇に出で腹巻の傍に來り一禮ある、一同もはつと敬禮する

覺阿「時房信光は當時の事柄必らず覺えておはすらん、奉行職事の僉議を以て供養の儀式は夜陰た
るべし、右大將家には束帶に裝束かせ玉ふべしとの定なり、其時廣元竊かに存する旨あつて愚存
を相述たりければ供養の時刻を改めて日中に執行ひ束帶の御下に御腹巻を召させられ甲冑仕たる
武功の隨兵前後を固め參らせたり、事果て後廣元を召させられ、今日供養の其場にて頼朝危難を
道れしは全く御邊の力なり其諫言の忠義を賞し此腹巻を取らずと賜はられたる御腹巻、身にも
命にも替がたき御品なれど今改めて献上いたせば御束帶の下に御召あつて然るべう存じ奉る

實朝「アッ有がたき父上の御腹巻、實朝賜はつて着用せんと存するが、仲章、如何で有らうな

仲章「束帶の御下に物具を召さるゝ事其例を知らず況や御神拜の砌に於てゆめく存じ寄らざる事
信光「アイヤ仲章例なしとは申せども右大將軍の召したる御例

仲章「夫ぞ武家の曲例にて正しき公家の古例に非ず、餘人は兎もあれ入道にはそれ程の事御存知あ

るはず

覺阿「存ずればこそ申すなれ、我君には征夷大將軍にてましませば神拜にまれ拜賀にまれ御父上の御例しに習ひ御腹巻を召さるゝに何の仔細の御座らうや

仲章「是はしたり覺阿入道、右大將家は二位の大納言いまだ衰輔の御身にあらねば私の甲冑敢て非難はなしと雖ど、今我君は右大臣の左大將、凡そ大臣の大將は朝廷の御大事勅諭の其外は物の具せざるが重き説、然るを今輕々しく腹巻など召させては禁裏へ對して不忠無禮、仲章が御止め申す趣意柄は斯の通りに御座ります

實朝は覺阿を御覽あるに覺阿は默然として居たりければ

實朝「大臣の大將は私に物具なさすと云ふ上は腹巻着用思ひ止るであらうぞ

覺阿「然る上は御隨身に代られて御隨兵を召具し玉へ

時房「今夜の供奉は隨兵の員數前後殆ど千人に近ければ其御懸念には及び申さぬ

覺阿「たとひ何千何百人あればとて御身近に候らはねば不慮の變事に其詮なく隨兵なきも同前ならずや

仲章「其爲にこそ御側には兵杖を携へたる隨身は置れたり

覺阿「ハ、ハ、ハ老懸の冠に鬘腕を纏ひ胡蘇負て太刀佩ばとて何の警固に相成べき、されば右大將

家の御時には隨身を置かすして常に隨兵を御傍に召れたり、何卒其例に由り御隨兵を従がへ玉

へ、夜陰の神拜御身も固め玉はねば覺阿が懸念殊の外に御座ります

實朝「その懸念は満足なれど隨兵數多召具して前後を固むる上からは神拜の儀式には隨身のみにて充分なるぞ

覺阿「アッ覺阿不肖の身を以て言上なしたる三箇條皆盡く御出入に成らざるは致し方もなき次第、

此上は今夜の御拜賀相濟なば速に右大臣の重官御辭退あつて然るべう存じ奉る

實朝「何と言はると

覺阿「覺阿が老後に思ひ出の諫言よ、く聞し召せ、御父上二位殿は無道の平家を討平らけ日本六十

餘州を鎮め天下の亂を治め玉ひ大功ありし御身にも深く先途を慎みて度々の宣旨を辭し玉ひ御高

年に及ばせて漸くに大納言の右大將、君は夫に引かへて御勳功とてもなく貴跡を繼せ玉ふばかり、

未だ三十に満たざるに右大臣の左大將九錫彫弓賜はつて目を驚かす御昇進、斯る高位高官を乞は

する儘に賜はるは官位を以て壽命を奪ひ自滅を促す方便とは知し召され玉はぬか、あはれ源氏の

御武運を末永かれと謀らせ玉ひ御歸退遊ばず様偏に願ひ奉ります

實朝「和入道の諫言實朝甘心いたせしぞ、去ながら我すでに廿八歳に及べども未だ一子の出生なく子孫ありとも思はれず、熟々思ひ廻らせば、實朝が叔父にては判官殿を先として蒲殿及び阿野法橋皆盡く失せ玉ひ、次には我兄左金吾禪室修善寺に於ての御最期、其外一幡頼全千壽まで皆殺し盡されて今世に残るは實朝一人、兎ても角ても源氏の正統早此時に縮まりたり、其上に又我とても翌日をも知れぬ危き命、せめて官位の昇進に家名を末世に残すのが此世の思ひ出身の願ひ、覺阿入道推量して玉はれよ

覺阿「アッ御心底のほど覺阿御推量申上げ袖も涙に萎れて御座る

ト腹巻をジツト見て

「生者必滅會者定離世の盛衰は神佛も免れ玉はぬ事ながら、左しも天下に輝きし右大將家の御武運も光を失ふ時節なるか、アッ此覺阿弓矢の家にはあらねどもせめて壯年の身であれば此腹巻の胸板せめ今夜の拜賀に供奉なして御傍を守らんにも夫も叶はぬ我が老衰

ト行光定景等五人に向て

「方々五人が右大臣家の生たる腹巻、しかと御頼み申たぞ、イザ御暇を賜はりませう

ト實朝および御堂所に禮拜する、此前に奥より敦光は木造の束帯太刀を持って出來り控へ居て此

時實朝に見せる、實朝は是を取らんとし玉ふ所に覺阿が暇を申すに由り會釋せうとて下に置き玉ふはづみに太刀の柄はボキリと折れたり、是を見たまひて

御堂「アレ御太刀の柄の折れましたは……

實朝「實に誠此柄の折れたるは……

ト實朝を初め一座の人々も奇怪の思ひをなすを見て

覺阿「ハ、ア木劍の折れるは間々ある事

ト腹巻を抱て立上りよろめく足を踏締めて

「目出たき御拜賀(木の頭)御歸營を待ち奉る

(此思入よろしくあつて幕)

斯種々不吉の兆どもありて覺阿入道も諫言を奉りて切に今夜の御拜賀然る可からずと申されしかども實朝は聽入させ玉はず、然るに此日の夕方より雪頻に降りて神宮寺へ着せ玉ひし頃には二尺ほども降つもりたり皮の刻に至りて幸ひに降止たりければ宮奴ども集りて雪取除きて御社參の道をこしらへ奉りぬ、尤も武田五郎信光はじめ秋田城介長尾新六の諸人は覺阿の詞もあんなれば始終右大臣家の御側を去らず神拜の時たりとも附添ひ奉らんと強て申請たりけれども、さる武家の曲例は孳々行はる可からずと仲章は申張り北條殿も既に右大臣家にて無用との御沙汰ある上は押て隨兵供奉すべきに非ずと申されてければ隨兵の面々は何れも神宮寺にて御供を止められ、夫よりは僅の隨身のみを召具せらるゝ事とは成りぬ

第三幕

鶴岡八幡御社參 (承久元年正月二十七日の夜)

神宮寺より石階までの間には左右に御幕を打たせ處處に庭燎な焚せられたり(本舞臺正面より下手に掛て幕を打廻し上手寄に斜に石階を設けたり)幕外には數の石燈籠に燈を點したれば(此

石燈籠は騒動の時に幕張を仕して後に見ゆるなり)鎌倉山の夜の雪に映じて一面に皓々たり(嘯物にて幕明く)

此に上手の幕張の外よりは伊達左衛門尉爲家、烏帽子直垂にて太刀を佩き出來れば、同時に下手の幕張の外よりも天野左衛門尉政景是も同じ粧にて出來り(舞臺よき所にて出會ひ)互に會釋して

伊達「天野殿で御座るか

天野「伊達殿で御座るか

兩人「御苦勞で御座る

伊達「最早御社參の御刻限に近づき申すが御邊の御持場は如何で御座るか

天野「さればで御座る、御存知の如く當社殿の後手は鎌倉山の峯續き樹木は茂り雪は積り頗る以て見通しが難う御座る

伊達「拙者が持場も其如く夜陰と申し此大雪の降たるゆゑ警衛甚だむづかしく、尤も千餘人の軍兵にて御路次を御警固いたしをれば狼藉の懸念は御座らねど……

天野「武田五郎秋田城介小笠原次郎を初として十人の御隨兵覺阿入道の詞に従ひ御神拜の其折も右

大臣家の御側をたつて離れぬ決心なるを

伊達「拜賀の奉行の仲章、頻りに公家の例を引き北條殿の承知として作り道にて御側を離され御式の供奉にて御参拜

天野「外は幾重に固めても社頭の内は不人のゆゑどうか變事のない様に致したいもので御座る

伊達「何にも左様で御座る
ト話して居る。此時石階の傍より八幡宮の禰宜風折鳥帽子狩衣にて出来り兩人に一禮して

禰宜「御役目御苦勞に御座ります。シテ御参拜の御報知はまだ御座りませんか
伊達「唯今に御座るであらう

ト云ふ中に揚幕の中にて「御参拜」と云ふ聲聞ゆる。是を聞いて禰宜は上手へ伊達天野は下手慕張の外に出る。向ふ(揚幕)より御社参の行列は眞先に白張二人、跣足にて松明を持ち。次に神主、淨衣薬香にて先導なし、次に實朝公、束帯に装束かせ、隨身兵杖を携て裾を捧げ。次に北條義時、衣冠にて御剣を持ち、次に文章博士仲章、衣冠にて供奉し、次に因幡前司師憲、五位の衣冠に、同じく供奉し徐々と樓門の道を(花道)經て石階の際に(舞臺)來りしに、如何は仕たりけん義時は御剣を持ちながら眼眾みたる體にてだちくとよろめきて地上(舞臺)に作るれば仲章師

憲は驚きて立止る、實朝も歩を止め玉ひて

實朝「京兆には如何なせしぞ

仲章「京兆殿

師憲「北條殿

兩人「如何なされましたるな

ト兩人は左右より寄添て介抱すれば、義時は顔を押へながら

義時「神宮寺を出る夫迄は別に異状もなかりしが心神俄に惱亂なし眼眩みて度を失ひ斯る失體御免下され

實朝「俄の逆例無難に有るならん。仲章師憲早く典藥を召て看病させよ

義時「アイヤ其儀に及ばず、目まい致すは日頃の持病、個様いたして落付をれば柝の間に全快いたす。コレ仲章、御剣を御邊へ御頼み申せば某に御構なく御参拜の御供あれ

ト仲章に御剣を渡せば

實朝「然らば京兆神宮寺へ召越し篤と養生いたされよ
義時「忝う存じ奉る

ト是にて實朝の行列は元の如くにて義時を残して石階を上り社頭に入りたまふ（階上の幕内には入る）義時は地上に踞り伏しながらソツト實朝の行列の往を見送りてすつと顔を上げ冠を正し衣紋を直して起上り雪を拂ひ是にて禍を免れたり云ふ心は自から色に顯はれ悠々として神宮寺の方へぞ赴ける（向ふ揚幕の内には入る）

鐘の聲コーンと聞ゆれば正面の幕張を下よりそつと上て公曉禪師、白地の鎧の直垂に銀の金物うつたる白糸織の腹巻の胸板せめ籠手脚當に手足を鎧ひ白の素絹を裾短に着て白銀造の太刀を佩き白綾の袷袢を山門風に疊みて頭巾となして立出で様子如何にと窺ひたり、石階の方にては「御下向」と呼ぶ聲すれば公曉は急ぎ幕を下して姿を隠されたり、下手より白張出来りて石階の際に圓座を設くれば伊豫少將實雅、右馬權頭頼茂、中宮權亮能繼いづれも衣冠にて下手より出来り右の圓座の上に着座し實朝の下向を待つ。實朝は以前の行列にて徐々として石階を下りて来たまへば實雅頼茂能繼の三人は實朝を見て拜禮する、此時公曉は幕の下より躍り出て實朝と仲章との間に飛込み實朝の裾を踏まへ一刀に切下れば實朝は其儘倒れたまふ、隨身も仲章師憑其外いづれもあわてよかなたこなたへ逃廻る。公曉は仲章が御劍を持たるを見て

「おのれ義時

ト聲を掛て大袈裟に斬倒し更に實朝の倒れておはすに打對ひて

「右大臣家、父頼家の御敵恐れながら公曉只今御首賜はり申す

ト名乗りて御首を打落して脇に抱へ悠然として神宮寺の方へぞ（花道）往掛らる。スワヤ變事と云ふまゝに幕張の外よりは供奉の侍警固の武士我先にと出来りしが、右大臣家の御死骸に寄添ふものよみ多くして公曉に討て掛る者も無し。斯る所に彼方より（向ふ揚幕）は武田五郎信光（黒糸織の鎧に長刀を持つ）此方より（下手）は長尾新六定景（黒皮織、太刀）馳來りて公曉を中に取込て

武田「武田五郎信光

長尾「長尾新六定景

武田「右大臣家を弑したる公曉禪師

長尾「卑怯にも立去り玉ふか

武田「尋常に御命

兩人「授けたまへ

公曉「下臈ども推參

ト兩人を相手にして戦ひつゝ石階の邊に来る(舞臺)初め公曉は右大臣家を打取たりと名乗を上
 たらば關東專當の主は御身なりと記請に交名の人々を初め皆一同に従ふべしと思ひ玉ひしに思
 の外に信光定景を先として雜賀次郎長尾太郎同き次郎其外の武士ども各々得物を取討て掛れ
 ば公曉は今は是迄なり扱は北條が計略にて毒手に陥つたるかと初て覺り玉ひしが猶も實朝の御
 首は腰に附て離し玉はず多勢を相手に雪を蹴立て手練の早業に此を先途と防ぎ戦ひ玉ひけれど
 も(大立廻なり)遂に力盡き身疲れて雜賀次郎に後より組伏られ信光定景の爲に討れ玉へり(雜
 賀次郎が組付き信光定景が左右より挿みたる觀にて幕)

東鏡拜賀卷終

小楠公脚本

小序

嗚呼これ市川團洲翁が最後に校訂したる脚本なり。是より先數年前歌舞伎座の主幹は屢々余に囑す
 るに小楠公の事蹟を脚案せん事を以てす蓋し翁をして之を演ぜしめんが爲なり、されども余巧妙の
 趣向なきを以て是を辭したり、是に由て主幹は團洲を説くに某名家の筆に成れる脚本を以てし、又
 或は特に某老作家に依頼し、其新作を得て試みたれども、翁も亦その己に適せざるをもて之を辭せ
 り。斯る事情のありとは知らで、小楠公云々と漸く世上に漏聞えしがば、苟も觀劇に心ある人々は
 皆翁が之を演ぜむ事を望み、頗に歌舞伎座に勸告の方も多かりけり。さるからに主幹は再び余に立
 案せよと懇囑あり、斬新絶妙の脚色は所詮思ひも寄らず、但し翁に適する程の事ならば嘗試むべしと
 答へ、其由を翁へ通じたるに、翁曰く櫻癡先生にして筆を執らるゝとあらば愚はあらし兎も角も其
 趣向を承りて決すべしと、是に於て余は筆を執りて稿を作り、本年八月廿九日と云ふに翁が茅が崎
 の別荘に訪ひ之を朗讀したり、翁は打聞て小楠公の事蹟は常々演じ度とは思ひしかど我に適應の脚

小楠公脚本

本なかりし故に今までは空しく過去りにき此脚本先生の手になり成りつる上は本年九月歌舞伎座の中幕に演じ候ふべし、此劇させる奇抜の趣向は無けれども小楠公の誠忠無二の精神を寫し出すに十分なり團十郎老たりといへども公に扮するに至りては人後に立ざる覺悟なり心安く思されよと、意氣昂然として喜色面に顯はれそれよりして此段は云々彼件は是々と意見を吐露して修正を求め併せて道具衣裳の事までも協議に及び、九月上旬には歸京すべければ直に稽古に取掛り先生を煩はし奉るべしと頗る得意に入られたり。斯て余は其日歸京して此脚本を修正し翁の歸り來るを待たりしに、翁は重忠に罹り溘然不歸の客とはなれり、當日の協議が永訣なりとは我も人も思はざりしぞかし。翁の病中の臆語にも、小楠公の中幕は我に取て仕處こそあれと云ひしとかや、以て其いかに翁の胸中に蓄積する所のありし歎を察するに足れり。嗚呼この脚本團洲翁が脚界に残せる最終の紀念と成りぬるを悲しみて尙餘あり。

此脚本を稿するには専ら芳野拾遺太平記に據りつれども間々他所にも及べり、特に百川如電の兩翁には其佳著に於て頗る裨益を得たるふしもあり、此に感謝の意を表す

明治三十六年九月十五日

櫻癡老髯 福地源一郎 識

欠

MISSING

關原譽凱歌

緒言

此新劇を稿して場に上らしむるに當り余は觀者の爲に一言すべき事あり、原來此劇は板坂卜齋が筆記の中に見えたる浮田秀家落足の物語を骨子となし進藤矢野兩士の忠勇義烈を示すに有るを以て是に因みたる名題を附すべきに關原譽凱歌と題し客位の人に向つて其名を假たると不倫に似たれども凡そ新劇の題號は専ら口人に膾炙するものを探ふを利ありとするに由て余は當任者の望に任せて斯は題したるなり

303.
除が此劇を腹稿せしは三年前の事なりき、其後試に一小説にものして世上の批評を聴き今度更に趣向結構をも更めて脚本を立案したるなり、第一幕花見の場にて矢野進藤兩士の出會は全く余が作意に出たれども竹刀を折たる事は古人すでに其趣向ありしを以て是を借用ひたるなり、(矢野五右衛門を五郎右衛門と改めたるは五右衛門と云ふ名の舞臺には面白からぬ故なるのみ)其次には矢野が禍を前田大納言に解き其覺去の後に利長を諫め遂に仕を辭する所を稿せんと當初の腹案なりしが是

關原譽凱歌

は割除したり、第二幕は二場とも事實を點粧したるに過ぎず、第三幕の初場は所謂滑稽場にて論も無し後場は専ら卜齋筆記の趣に依たるなり、第四幕の上にて矢野が其日山中にて進藤に會ひたりと云ふは關原合戦覺書に見えたるに據り妻子を立退せたるは余が作意に出たり、但し從來如是場合にて妻を去らしむるには良人は告るに其實を以てせざるが常觀たるに由り余は之に反して其事實を打明て退去を得心せしむる事とは成しぬ是れ新面を出すに似たれども其間我ながらも物足らぬ様に思はるゝは自ら慙とする所なり、其次には進藤が秀家の手紙を携へ密に大坂に赴きて浮田の夫人に調するの條を加へ其悲嘆を寫し出さんと思ひしが是も此稿には省きたり、故に矢野が秀家を匿ひたるに引續きて第四幕の下の詮議及び發足を演せしむる事とは成りぬ、其次には進藤が秀家自滅なりと偽て名乗出る條を前場とし矢野が妹の玉藻をして八郎丸を奪ひ出さしめ俱に守護して薩摩に走り以て其急を救ふの條を後場にすべき腹案なりしが是も同じく省く事となして、直に第五幕の結局に遷りたり。右の如くなれば兩士の所爲往々事足らざるが如き觀あるは余も亦自からは是を知る、然れども實際八時間の開場時間にて是に加ふるに中幕を以てし又更に所作を大切に演ずるとの事なれば幕合の都合ども乗除すれば四時間を以て此劇を演じ畢らしめざる可からず、是れ余が思ふ存分に腹案をもつし得ざる理由なり。他日もし再演して八時間通し狂言とするの時もあらば更に増補して首

尾を完全せんと望むのみ

校正の勞は例に依て河竹新七氏の老手を煩し又堀越寺島兩氏の熟練なる意見に従ひて間々改更したる所もあれば余は此に謹で其勞を謝するなり。今や恰も此劇の演習中にあれば近日開場の時に臨み或は聊か此編に相同じからざるの言語動作を觀る所あるべし是れ演習に際して登場俳優の都合に由て余が添削を加ふるに出るのみ、幸に諸名優相會して此劇を演ぜんとす余が作意に足らざる所あるも技藝の絶妙を以て之を補ふに餘あれば觀者の満足を得て一場の奇觀を歌舞伎座の舞臺に現出するを疑はざるなり

明治二十五年十月十二日

櫻癡居士 福地源一郎 識

目録

○第一幕	伏見向島秀家櫻狩の場	三度	長元年中旬
○第二幕	大垣城中諸將軍議の場	十四日午後	同
○第三幕	伊吹山麓野伏追剝の場	同	九月十五日
○第四幕	白樫村矢野閑居の場	同	九月十六日

關原櫻歌

○第四幕
 同 物置酒屋の場 同 同 三更
 同 妻子退去の場 同 同 同
 同 白樫村落人詮議の場 同 同 四更
 同 主従發足の場 同 同 五更

○第五幕
 同 義士見送の場 同 同
 同 江戸城 神君明察の場 同 同
 同 忠臣吟味の場 同 同
 同 慶長六年十一月三日

登場重立たる人名

關 八州 太守 德川 内大臣家康公
 尾州 清洲城主廿萬石 福島左衛門大夫正則
 德川家の老職 本多上野介正純
 同 平岩主計頭
 黒田長政の家臣 毛谷主水
 備前岡山城主五十七萬石 浮田中納言秀家卿
 江州佐和山城主十九萬石 石田治部少輔三成
 肥後宇土城主廿四萬石 小西攝津守行長

土州 浦戸城主廿二萬石 長曾我部土佐守盛親
 越前敦賀城主六萬石 大谷刑部少輔吉隆
 伊豫 六萬石 安國寺恵瓊
 豊後府内二萬石 福原右馬助直高
 因州若櫻二萬石 木下備中守重堅
 濃州苗木一萬石 川尻肥後守直冬
 尾州犬山一萬二千石 石川備前守貞清
 浮田家の家老 明石掃部全登

同 中 老 延原土佐
 同 家 人 進藤三左衛門政之
 白樫村の浪人 矢野五郎右衛門重昌
 實は 五右衛門
 徳川家の中老 阿茶局
 浮田秀家の嫡中 某姫前田大納言利家の息女

矢野五郎右衛門の妻 滋野進藤三左衛門の姉
 同 妹 玉藻の妻
 同 于 千代松
 浮田秀家の息 八郎丸 後に進藤三左衛門の養子
 此餘、大名、武士、諸侍、捕手、坊主、軍兵、雜兵、庄屋、百姓、野伏、老女、侍女、悪婆等

序幕 (慶長元年三月中旬)

(第一) 伏見向島の櫻狩

頃は慶長元年三月中旬の事なりと聞く。豊臣太閤秀吉公には新に伏見に御城を築かせ御座ありければ天下の大小名皆此所に伺候なし夫々に邸宅を設け伏見の繁榮京大坂にも劣らず且つ朝鮮の軍も三韓大明の兵ども皆打負て我日本の武勇に敵し兼ね遂に大明の帝よりは一二の轉奏を我國に渡來せしめ國書を捧けて太閤へ御詫申上ると事定まり出陣の諸將には順々に旗を納めて

一旦歸國に及ばれたれば總大將を承はれたる備前播磨美作三國の太守浮田中納言秀家卿にも此程歸朝あつて伏見に上られ今日しも御簾中と俱に向島にて櫻狩をぞ催されたる櫻の花の今を盛りと咲出たる中に幔幕を打たせ(平舞臺)其外には白地に藍をもて五三の桐と太鼓の丸の紋の染出たる幕を打廻らし腰掛の上には毛氈を敷て御座所を設け其邊の草原の上に産ども此所彼所に敷き並べ遠く伏見の山嶺を眺め得も云はれぬ風景なるに今日の御供に召されたる江並御小姓岩崎同藤井御祐筆 刈田御次稗田同等は御末御仲居八人に打交り目隠しの遊に打興じて餘念なかりけり、(此遊最中の體にて幕明く)折しも幕外にて御警固の武士の聲として「参り居らう、うせ居らう」と罵りつと股引半纏の上に白く山道筋を染出せる紺木綿の羽織を着し一刀を差たる御仲間體のもの兩人にて一人の女を引立て出たりけり、其女は身には紙子小袖の怪しきを着て髪は草束とやら云へるに取上たるが片には市女笠を持ち片手には梓弓の弦に數の短冊を差通したるを持てるにぞ歌占の女とは知られたる斯と見るより

江並「見れば賤しい其女
岩崎「何故あつて御幕の内へ
藤井「引立ては参られしな

仲間「つひに見慣ぬ怪しき女
同二「御幕の内を伺ひますは
同二「由断ならぬと存せしゆる
同二「引立つて参りました

歌占「アイヤ賤しい姿は致しても怪しいものでは御座りませぬ是は歌占とて戀の侍人二世の縁し結ぶ妹脊の吉凶を是なる弓の短冊に書てある歌により占いたす者なれば何れも様この短冊をどれなりと一ひら引て歌占を試して御覽あそばしませ

藤井「面白さうな其歌占それでは私が引ほどに判断を頼みますぞや
歌占「宜しう御座ります暫らく御待下さりませ

ト歌占の女は立て恭しく天地を拜して
「神風や伊勢の濱荻名をかへて
(唄)「よしと云ひあしと云ふ。名は異なれど同じ草。難波の事も問たまへ。引けば引かる梓弓。

歌占「日向の事も問ひ玉へ

ト持たる弓を一振ふつて押戴き其所に座を占てイザ引玉へと出しければ藤井は進みて目を閉て短冊を引き讀で見れば

藤井「晴る夜の星か川邊の螢かもわが住む方の海士の焚火か」

歌占「其歌は昔男が津の國の蘆屋の里に住しころ歸る道にて日を暮し宿の方に漁火の見ゆるをば讀まれし歌。ム、扱は貴娘の心の中には愛しと思ふ其人は星か螢か漁火か數知れぬ程あるに由て安積の沼の水増ていづれ菖蒲と引わづらふて御座りますな。其様な浮た心を早う止め簪にさすを祝ふ藻の痂瘡の痕があらうとも似合の夫を定めたが宜と云ふ神の御告で御座りますぞへ」

江並「サア此次は我の番じや」

ト同じ様に短冊を探り取て讀で見れば

「さむしろに衣かたしき今夜しも戀しき人に逢はでわが寝む」

歌占「ソリヤ昔ある姫が在五中將の事を打歎いて讀し歌その姫の様に貴娘の母人がどうぞ貴娘に逢たいと思ふて御座るお告、少しのお暇いたといて往かしやんすが宜しう御座りませう」

岩崎「サア〜我の番じや。コレ歌占殿我はのウモウ〜心の底で思つて居る大事な望が有に由て其望が達ふか達はぬか判断して下されや。南無天神様金毘羅さま出雲の大社の結ぶの神様オンア

ボキヤ〜ペーロシヤナ、アブラゲ、ヤキイモ、ハラハリタヤ

ト掌を合せて神佛を念じ短冊を引て

「エー」戀しくば尋ね來て見よ利泉なる

歌占「ア、申し」戀しくば來ても見よかし千早振」ではありませんか

岩崎「オ、そうじや〜わが身はよく知て居やるのウ。エー」戀しくば來きても見よかし千早ふる神代も聞かず立田川」

歌占「神のいさむる道ならなくに」で御座りませう

岩崎「ホンニそうで有た哩のウ」

歌占「其歌は千早振神のいがきも越えぬべし大宮人の見まく欲さに」と讀掛た女に返した歌。コリ

ヤ貴娘は御公家様を見初ておいで成さらうが達はぬ戀で御座りませう

岩崎「何じや達はぬとへ。そんなら此口は

ト更に短冊を引て

「エー」のに水に敷かぎりなくあびければ「エー

歌占「ハテそんな歌は無い筈で御座りますが

ト短冊を覗いて見て

『ゆく水に数かくよりも果なきは思はぬ人を思ふなりけり』こりや歌の通り果ない望て御座りま
すぞへ

岩崎「エ、否な歌占じやの縁起の悪い疾とよ此を歸でもらひましょ
歌占「是はきつい御腹立今一ツ引で見さんせいな

ト勸むれば岩崎は短冊を引て讀かねて居る是を見て

『大幣と名にこそ立てれ流れてもつひによる瀬のありてふものを』それ御覽じる遂にはよる瀬の浪
枕御愛度こと御座ります

岩崎「オ、嬉し、夫じやア屹度その通りて御座んすかへ

歌占「オホ、何の神様の御告に嘘偽が有ませう安心して御座りませいなア

ト聞て悦ぶ岩崎をば江並藤井其外の御末御仲居うち寄て廻るも時の興添へていと賑はしき其折
から幔幕の内より御中老八橋は行儀正しく出来り

八橋「唯今是へ御簾中様御渡に相成れば皆さん御静に成されませ
江並「ナニ御簾中様の

皆々「御渡とや

ト皆衣紋を繕ひて下手に控へて待たりける。幔幕の内より御年寄福島先に立ち浮田中納言秀家
卿の御簾中花見小袖の伊達模様綺羅を盡せる御粧ひ優に蕩たしく見え玉ひ設の御座に著たま
ふ。是と見るより歌占は恐多しや此御席と避て下手に往掛れば

福島「ア、これ此所な歌占。御簾中様御用があるとの仰せ苦しう無いそれに居や

ト呼止むれば歌占はハツトひれ伏し居たりける御簾中つくくと歌占を御覽じて

簾中「稀らしや滋野かはつた姿に成りやツたのウ
ト宣ふ詞に驚く歌占顔を上げて御簾中を見奉りて

歌占「さう御意あそばす貴夫様は加州家より備前様へ御輿入の姫君様

八橋「左様なればあれなる女を御存知で居らせられましたか

簾中「知らいで成らうか女でこそあれ冷泉殿の御弟子にて歌道花道に達せし滋野じやもの

福島「扱は夕暮の滋野とて世に名高い歌詠は

八橋「あれなる女性で御座りましたか

滋野「かよる賤しい姿にて御目通りは御耻かしう存じます

藤中「何の耻かしい事があるぞいのウ思ひ出せば四年前都を出やつたと聞て居たが今では何處に居やるのウ

滋野「御尋に預り申上るも面ない次第不圖した事から四年まへ都の住居もなり兼て伏見の里の片邊佗しい暮しに日を送り弟と二人して母の介抱いたすうち二年このかた母の煩ひそのいたつきの看病に手段も盡て弟は人に雇はれ町使また私は活計に思ひ附たる歌占で僅の稼も親の爲あぢき無い身で御座ります

ト嘆つ其身の物語御藤中は聞に哀れと思し召し

藤中「聞ば聞ほどいと惜い卿が身の上。のウ福島我君へ滋野が身の物語申上て思食を願ふたら……

福島「へエ平常からして御情深い我君様必らず思食が御座りませう

入濱「滋野どのあの通りの御意じや程に御願ひなかつたら宜しう御座りませう

滋野「思召は有がたう御座りますが其儀は必らず御無用に……

藤中「何と云やる

滋野「高いも卑いも姫御前は而耻の深いもの元の素性は兎も角も今では賤しい歌占女この様な下司下筋を御見知越にも御存知あると云はれては御身の上のきつい御耻辱それに御里方の加州様なら

まだしものこと御縁附れた備前様其やうな事が御耳に入たら夫こそ御大事唯この儘に御暇を致し

ます程に何れも方かならず共に御噂の無い様にお願ひ申上ます、左様ならば姫君様、何れも方

ト身は寝れても心根は清き滋野が氣高くも挨拶して立掛れば

藤中「滋野そりや餘り一筋じやぞへ假令賤しい姿でも人に知られた歌讀ゆる

福島「何の御耻に成ませう其遠慮には及ばぬこと

入濱「先づ御意に従ふておいで成さるが御身の爲

滋野「其御信切は忝う御座りますが心に濟まぬ事なれば御渡ない間に少しも早う御暇を申上るで御座りませう

ト思切たる滋野が體、御藤中も夫と推量し玉ひ福島に向はせて

藤中「ア、言やる上は常からして滋野の氣象よも思ひ止りは仕やるまい程に其方より住所を尋ね置

き澤山に縁をかつけてたも

福島「畏りました

ト福島は御手箱の内より取出して金色み小袖一領取添て滋野が前に差出して

「御藤中様より下し置かるゝ當座の御祿いさ御拜領なされませい

376.

滋野「有がたい思召では御座りますが一占二錢の外には賜はらぬが歌占の掟過分の御祿は神への恐れ夫故に此御品は達て御辭退申上ます

福島「すりや此御品はどうあつても

滋野「和歌三神も照覽あれ筋道の無いおかげ物は受納いたしませぬ

福島「ハテ清らかな其御心恐入て御座ります左様ならば其許の詞に従ひ強てとは申しますまい
ト其品々を傍によせ

「シテ滋野どの其許の御住居は

滋野「それも用ない御尋ね歌占の判断なら午前は豊後橋の詰に居りますゆゑ何時にても御出あれ。どれ御暇いたしませう

ト暇乞して往掛るを

藤中「こりや滋野まぢや

滋野「ハテ御聞分ない御藤中様

此時幔幕の外にて入音して

○「滋野とやらまで

藤中「あの御聲は

皆々「我君様

ト座を直せば正面の幔幕を上させて備前中納言浮田秀家卿には指貫の上には道服を召され家老延原土佐、物頭長船吉兵衛近習西山久内(刀を持ち)淺井與九郎(手函を持ち)野羽織小袴に出立て御供なす秀家は腰掛に着座あつて滋野に向はせて

秀家「委細の様子はあれにて聞たぞ歌道に名高い滋野とは其方が事か

滋野「御聴に達し耻入て御座ります

秀家「近う参れ寛くりと歌物語秀家これにて(ト座を直して)聞であらう
ト滋野をば膝近く招かれたり (是ニテ道具廻ル)

(第二) 同く兩士の出會

此は前の浮田中納言櫻狩の爲に圍ひ込れたる幕張外の裏手にて正面には彼の五三の桐と太鼓の丸を染出したる紋樹間に見え若草萌る堤の上(二重)往來の下の川水も春の彌生の色添て河原(平舞臺)に生る蘆の芽もはや青々と見えにける

關原櫻凱歌

377.

歌淨「其頃の。伊達を好める武士も。花に浮れて墨染の。色の街の喧嘩買。間夫は貧苦に呉竹の。伏見の里に木隠れて。鐘を怨みの榎木町。今日も雇ひの使先。世の盛衰ぞ是非もなき此方よりは矢野五郎右衛門富士笠に面を隠し伊達模様の羽織着流し大小十文字に指誇らしたる俠客の喧嘩買ひ堤途狹しと出来る。彼方よりは進藤三左衛門深編笠の垢ばみて寝れ姿に大小も身をも俱に落し指し片手には包を提て出来りしが同時に櫻狩の幕張を見て（花道向ひ合のせりふ）

五郎「あれに見えたる幕張は五三の桐に太鼓の丸葉越に匂ふ伊達模様一際派手に風流を盡して今日の櫻狩

三左「打興じたる幕の内花見の宴の樂はあれぞ備前の中納言浮田殿の催しか武勇の暇に彌生の春心を慰めおはすよな

五郎「實に武士の手束弓もち傳へたる果報には斯ぞありたきものなるに我は夫には事替り

三左「此年月を日蔭の身細き烟に母人の看病さへも思ふ儘つくし兼たるうき苦勞

五郎「心に磨く高麗劍用ふる人の無き儘に憂ひを佛ふ玉帯せう事なしに酒の友

三左「眼深に冠る網笠に人目を包み此處彼處僅の料に市人の頼に任す町使

五郎「その墨染や榎木町遊れ歩行に日を送り

三左「あるか無しかに悔られ無念を忍ぶも親の爲

五郎「人間幾五十年夢 幻の世の中に

三左「浮む頼とてもあらばこそ

五郎「我と我身を捨小舟

三左「憂に思を沈めては

五郎「ハテ面白からぬ

兩人「春の日じやなア

唄「愛は嘆てど花の中。あふさくるさに摺れ違ふ。貴賤男女の別なき。三日見ぬ間の櫻狩。氣もはる霞春の日の。暮るを惜む賑ひは。風情ありける次第なり

ト五郎右衛門三左衛門の兩士は左右より堤に掛りしが。此時花見の輩おもひくの行装にて往來せる中を通りける事なれば如何は仕たりけん三左衛門は人を避て行くはづみに思はずも提たる包を五郎右衛門が脇差の柄に當たればコハ何に柄はボツクと折てぞ曲つたる。去ども三左衛門は心念と云ひ群集の中の事なれば是に心附ず其儘に往過んとは仕たりけり。五郎右衛門は活

關原譽凱歌

と怒り後より三左衛門が刀の鎧を取て

五郎「夫なる御方御待なせへ」

ト引留れば花見の群集は是を見て「スワ喧嘩よ口論よ」と堤の左右に立分れ様子如何と見物す。

三左衛門は後を振向て

三左「手前の刀の鎧をとらへコリヤ何と成れます

五郎「何とするとは奇怪至極貴殿が持たる包をば此脇差の柄に當て打折たるは無禮千萬

ト鎧を突放ち笠を取れば三左衛門も是に驚き同時に笠を脱捨て中腰に居りて

三左「コハ存じ寄らざる失禮いたし御腰の物を損せし段は全く以て手前が粗忽幾重にも御詫を致せば御勘辨を願ひ奉る

五郎「イ、ヤ勘辨ならぬ斯る耻辱を受たる上は身共が一分立たざれば此場に於て立合召れ

三左「ナニ某に立合へとな

三左「何にも。脇差こそ折られても刀は覺の業物なれば貴殿の一命中受るか但しは身共が細首を貴殿へ進上いたすやら勝負は互の運次第

三左「其儀ばかりは……」

五郎「エ、卑怯で御座る

ト三左衛門が手を取て堤(二重)より河原(平舞臺)に飛下て羽織を脱捨て刀の鯉口を切て

「サア勝負の場所は此河原イザ潔く立合召れ

ト詰寄れば三左衛門は暫し黙然として居たりしが何思ひけん腰に差たる大小を脱で五郎右衛門が前に出し兩手を地上に突て

三左「成ほど御一分が立たぬと有て立合へとの御掛合ひ否む詞は御座らぬが御覽の如く大小を差出し大地に手を突き誤入て御座りますれば枉て御勘辨願上る……」

ト只管に詫入れば五郎右衛門あたりの捨石に腰を懸て

五郎「夫程までに詫るとあらば勘辨いたさぬ者でも無いが、花見群集の中と云ひアレ見られよ堤の

際に幕打廻して御座あるは此日本は申すに及ばず朝鮮八道の隅までも隠れなき備前の太守浮田中納言秀家卿その御座所近くにて身共が差たる脇差の中身は正しく竹光と中納言殿を初とし武功の

人に啗はれては死に勝たる此身の耻辱かよる場所に出會たが身共の不祥貴殿の災難餘儀なき事と諦めてイザ御立合召されよ

三左「成ほどあの幕内は浮田殿その前にて御脇差打折られては御耻辱ゆる立合へとは御尤なる其仰

せ去ながら未練に命を惜むにあらねど唯今はどう有ても命の取遣り出来ぬ身の上、併し貴殿にばかり竹光の唾は取らせぬ御覽下され手前とても此通り

ト前に置たる刀を取上げ柄と鎧を両手に握り栗形の邊をば膝にあてポツキと折れば中身は是も竹光なり、五郎右衛門は驚きて

五郎「それでは貴殿も竹光を

三左「腰に横たへ殿めしく武士の表を飾りし不覺かく耻辱を顯はす上はナント御勘辨は下さるまい

か、其上に又貴殿には刀は覺の業物を御差なされて御座らうが其に引替へ手前の脇差奈良仕込の生鈍もの豆腐も切れぬ庖丁同前それでも是非に立合と違て仰せのある上は叶はぬ迄も御相手を致さぬでは無けれども

五郎「今は出来ぬと言はるとか

三左「何にも左様

五郎「シテ其仔細は

三左「一通り御聞下され何をか隠さん某は進藤三左衛門と申す伊勢路の浪人都に暫らくさすらへしが仔細御座つて四年前この伏見へ罷越し去年よりして母の大病姉と手前と同胞二人心を盡す看病

に衣服調度も賣盡し身にも命にも換がたき刀の中身も賣代なして藥の代日毎に稼ぐ暇の業御覽下され此通り市人に頼まれて走り廻りの町使これと申すも今一度母の病氣を本復させ元の身體に仕たい計り夫故に母の存生なす中は武士の情に手前が一命手前へ御預け下さるまいか貴殿の御假名御實名御宿所までも聞置て母を送つた其上では果合なり打合なり御望次第に致しませう弓矢八幡摩利支天誓つて虚言は仕らぬ何とぞ御聞入下されよ

ト我身の上を打明て餘儀なき頼に五郎右衛門深く感じて居たりける。心を察せぬ花見の群集喧嘩は如何と前後より競ひ寄れば五郎右衛門は立上つて大音聲に

五郎「ヤア何を騒いで見物いたす。エ、立去をらぬか

ト刀を鞘のまゝ抜持て振上れば群集は愕き騒立ち「ソリヤこそ抜たぞ逃出せ」と左ながら蜘蛛の子を散すが如く我先にと逃去りたり。五郎右衛門は心を定め其刀を持直し三左衛門の脇差と一ツになして前に置き

「アツ誤つたり恐入たり貴殿の如き孝心篤き眞の武士を討果さんと存じたは返すくも身共が不覺平に御用捨下されよ夫に就ても兩人が一刀づつでは不都合ゆる失禮なれど此刀今改めて進上いたせば貴殿はせめて大小とも中身の有るを挿さんで武士の面を立られよ

ト兩刀を取て渡さんとすれば押返して

三左「其御志 忝くは御座れども手前が粗忽の訛言を御聞入下されなば此上も無き身の仕合せ中々以て御刀頂戴いたす理も無く況て貴殿に武士道を捨さすること存知も寄らぬ
ト兩刀を押戻せば其手を押へて

五郎「アイヤ進藤殿貴殿と身共は同じ竹光挿さんでも心の内は雪と炭貴殿には母上の病氣に心を苦しめて重代の刀まで賣拂はれし天晴孝行それに引替へ身共が情弱事長くとも御聞下され身共は矢野五郎右衛門と申す三河の浪人若年の頃親に別れ前後見すの無分別酒と色とに身を持崩し由なき儂輩を友になし果は悪所の喧嘩買横道あるく似是俠客腰に大小横たへても言はゞ世間の廢物今日計らずも貴殿の爲に柄を折られて耻辱を晒し此仕宜に至りしは是ぞ即ち此身の天罰せめて貴殿に刀を譲り孝子に武士を立てさすが冥士に御座る親への言譯イザ三左衛門殿御受納下され
三左「承はつたる御身の上然らば貴殿この脇差を御挿み下されて……
五郎「貴殿は武士を捨つると云ふのかソリヤ成らぬ
三左「然らば貴殿に武士道を止さす事は猶成らぬ
ト兩人は義理に迫つて譲り合ひ互に争ひ居たりける。浮田中納言秀家卿は先程より兩士の口論

を幕の内にて聞たりけるが様子如何と延原土佐長船吉兵衛西山久内淺井與九郎を從へて幕陰より此争を見て其義氣に感じ

秀家「アイヤ其暖は浮田秀家それへ參つて致すであらう

ト堤の上に来り床几立させ着座あれば兩士は斯と見るよりも容を更め禮儀を正して

五郎「見る陰も無き浪人者が尾籠の口論

三左「御目障に相成り重々以て耻入る次第

兩人「恐入て御座ります

秀家「イ、ヤ耻るに及ばぬ進藤三左衛門とやらは耻辱を忍んで立合を断はり又矢野五郎右衛門とやらは其孝心に感じ己が武士を捨てて思ひ込だる所存のほど秀家深く感心いたす。貧富は時の運なれば更に耻辱と思ふに足らず眞の武士の心の中差たる刀は竹光でも余が眼より見る時は三作にも劣らぬ名物もしも此場の舉動をば不覺の批判をする者あらば不肖なれども浮田秀家證人と相成て申開を致すであらう

五郎「ハツ有がたき其御詞この五郎右衛門は申すに及ばず
三左「三左衛門俱々に此上も無き武士冥加

秀家「それ聴て餘も大慶に存するぞ」

ト傍に侍座なせる土佐に命すれば土佐はハツと領承して幕張の内に入り狭箱の蓋二ツをば二人の侍に持たせ各々其上に黄金拾枚宛入れたるを秀家の前に置く秀家は打詰きて己が腰に差されたる脇差と小姓に持たせたる刀とを取て兩手に持ち

「兩人とも佩刀をうち折て不自由ならん粗末なれども余が指料兩人に差贈れば受納あれ」

ト狭箱の蓋の上に一刀ツ、を置きてソレとありければ兩人の侍は堤を下りて河原に來り脇差を乗せたるをば五郎右衛門が前に置き刀の乗たるをば三左衛門の前にぞ差置たる。是を見て兩士は意外の思をなし

五郎「拙なき二人の口論を御咎なき其上に却て御感に預つて

三左「思掛なき御腰の物拜領いたす身の果報

五郎「兩人共あり難く

兩人「頂戴 仕ります

ト互に顔を見合せて同時に取て押戴き一旦腰に差たる上直に脱で側に置く武士の作法も優なりけり三左衛門は黄金を見て五郎右衛門に打向ひ

三左「但し此黄金を拜領いたすは何とやら心に濟まぬ様なれば、ノウ五郎右衛門殿
五郎「何にも左様存すれば

ト辭退なさんとするを見て
秀家「縦の合力遠慮に及ばぬ辭退いたすな

ト勇士を憐れむ慈愛の詞に兩士は然らば頂戴と黄金を戴き納めたり。此時かの歌占は滋野は已に幕内にて暇を賜はりて幕蔭の下手より此所へ出來りしが秀家の御座あるを見て謹で會釋をなし參らせて堤を下りさまに五郎右衛門が其處に居たるを見て

滋野「ヤア貴君はいつぞや墨染で狼藉者を追拂ひ私が其場の難儀をば御救ひ成さつて下されし御方

五郎「實に誠其をり逢たる歌占どの

ト云ふを聞て三左衛門は振返つて

三左「さう仰しやるは姉じや人

滋野「卿は弟どうして此へは

ト云ふを聞て秀家は

秀家「扱は滋野は三左衛門が姉であるよな

388.

滋野「御意の通りに御座ります。コレ弟唯今あれなる御幕の内御簾中様より思はぬ御恩を受た程に御よりも御前様へよう御禮を申上げてたへ」

三左「イヤ某とても唯今是にて思はざる拜領もの御前様にも其御禮を
兩人「右がたう存じ奉ります」

ト禮を述べ畢りて三左衛門は五郎右衛門に對ひ手を突て

三左「いつぞや姉が途中にて思はぬ難儀を救はれし武家と聞しは扱は五郎右衛門殿貴殿で御座つたか其節の御厚意忝う存じます」

五郎「イヤ其御禮には及ばぬと人の難儀を救ふのは武士たるものゝ常で御座る
ト挨拶せり。折から向ふの方にて(揚幕の内)アレーと叫ぶ女の聲何事ならんと打見やれば十六

七許なる美目よき處女息せきて逃來る後より花見の酒に酔たる漢町 奴の體なるが兩人とも踏
跟つとも追掛け來りて處女を捕へ(花道にて)

奴「アレサ令娘そう嫌つた者じやア無いワ」

女「何も悪い事を仕様と云ふのじや無し」

同一「高い酒の酌をした其後で」

同一「伽を仕て呉いと云ふ丈だ

處女「エ、嫌らしい私しや知らぬ哩なア」

ト兩人を突放ちて河原の方へ(舞臺)來る是を見て

秀家「ソレ其女を救つてやれ」

ト差圖に三左衛門はハット答へて處女を上手に圍ひ追掛來れる二人の町奴が兩腕ねぢ上げ一人
を上手に投付て一人を大地に跳返せば筋斗うつて氣絶せり。處女は其間に五郎右衛門を見て

處女「ヤア兄さん」

五郎「オ、妹玉藻か、どうして是へ參つたか」

處女「サア餘り兄さんの御歸りが遅いに由て平素の通り……」

五郎「ハ、ア喧嘩買を案じてか。イヤ氣遣いたすな喧嘩は今日より止て仕舞つた
玉藻「右がたう御座ります」

秀家は益々兩士の義勇に感じて

秀家「五郎右衛門には滋野を娶り三左衛門と友垣を結んでは如何であるな、何れにも異儀なくば左
様いたせ

389.

三人「ハッ

ト御請して平伏すれば

秀家「兩人に盃くれう

兩士ハッと領承すれば秀家は床几を離れて立たまふ。此時かの氣絶なしたる町奴は一度に起て

懲すまに組付掛るを兩士は取て押ふれば秀家は扇を開いて

「ム、見事く
ト賞し玉へり (是にて幕)

第二幕

斯て其後進藤三左衛門は姉と俱に母の看病に他事なかりしが孝養遂に其効なく母は其年(慶長元年)の冬に没りにき、同胞は涙ながらに野澄の送をなし喪も果たりければ三左衛門は浮田秀家に伺候して新知五百石に召抱られ馬廻に列せられて専ら忠節を勵みたり。又矢野五郎右衛門は程も無く前田大納言家に仕へ千石の宛行を得て三左衛門が姉の滋野を迎へて妻となし一子千代松を設け妹の玉藻は大納言家の大奥に召仕はれたり。然るに慶長三年太閤秀吉公御他界あらせ玉ひて世は何と無く人心も穩からず、加藤福島野黒田池田の諸將と出頭の奉行たる石田三成等との間に確執ありてアハヤ事にも及ぶべき状態となり引續き徳川内府と前田大納言の間柄も云々なりなんと云へる流言頻に行はれ夫も漸く釋たりけるに慶長四年閏三月三日に至り利家には年六十三にて薨去せられたり、五郎右衛門は利家に別れ奉りしを深く悲しみ世を味氣なく思ひしか又は心に屑とせざる所ありてか利長の止め玉へるを辭して身の暇を願ひ聊の知音を便りて美濃國池田郡白樫村に住居を定め妻の滋野一子の千代松と供に此所にて田島を求め農業の生計を立て靜に世の成行を觀たり。尤も妹の玉藻は前田家の奥に止まりて宮仕して居た

りけり扱また進藤三左衛門は武勇世に聞えたる者なりければ新参ながら秀家に用ひられ明石掃部延原土佐などに引續きて覺も愛度かりけるに、慶長五年に至り秀家には石田三成に語られ徳川内府が上杉中納言景勝を伐たんとて伏見を立て會津へ出陣ありけるを機會として軍勢を催し内府違背の條々を敷へ立て日本國中の大小名に檄を傳へたりければ毛利島津を初として故太閤に舊恩ある諸侯は追々に味方に加はりけり、左らば押出せよとて八月に至り諸將概ね大垣の城を根據となし内府父子の攻上り來るを待受たりしに、關東勢の先手の諸隊は八月廿三日に岐阜の城を攻落して赤坂に陣を進め大垣と相對し二十餘日を経たれども兩軍睨み合の狀況にて未だ合戦に及ばず、然るに徳川内府は九月朔日に江戸を立ち十三日に岐阜に着し十四日の曉に長良川を渡り神戸を過ぎて赤坂へぞ着たまひぬ。抑も今度の合戦に付き三左衛門は初より此戰然るべからずと秀家を屢々諫めしかども聽入なければ詮方なく其意に従ひ秀家と與に大垣の城中には籠つたり

(第一) 大垣城中の軍議 (慶長五年九月十四日)

此は美濃國大垣城本丸の座敷にて(平舞臺)軍中とは云へ換杉戸を初とし障子壁に至るまで清ら

かにぞ見えたりける老女竹川は侍女遊糸綱手の兩人及び家中の妻子お幸お信お光お高の四人に手傳はせ長持の蓋の上に置並べたる許多の首級をば一々に髪を解きて髻を結置し紅白粉を施し又は鐵漿を包ませなんどして何れも忙はしけに見えたりけり(是にて幕明く)

竹川「皆の衆御苦勞で御座ります、何に軍の中じやとて否らしい生首の御化粧さぞ氣味の悪い事で御座りませうなア

遊糸「左様で御座ります、實の所が初めの中は誠に氣味が悪うて手を附るのも否で御座りましたが綱手「習ふより慣るとやらでモウ頃日では夫程に氣味悪いとも存じません

お幸「大きにさうで御座ります此様に鐵漿を含ませます中には附の宜のと悪いのが御座りますしお信「又髻の結悪い其中で困りますのは切疵の多いのと禿頭

お光「折角紅を指たり眉毛を引ても造榮のせぬ髭面やらお高「炭團見た様な黒い顔には白粉の乗が悪くて困ります

竹川「オ、さうで御座らうが、此首は今度の軍に關東方で名ある武士や大將の首級、追て實際なる程に奇麗にして遣ますのが武家の作法
お幸「敵ながらも戦場で討死したる勇士ゆゑ

遊系「粗末にせぬが侍の情じやと聞きますれば

お光「此通り精出して御手傳は致しますが

網手「味方の衆の切首も又敵方で此様に化粧を仕て居ませうか

お信「出陣なされし我夫や

お高「余が大事の父さんも

遊系「若し討死して此様に

お幸「成はせぬかと案じられ

お光「ほんに人事とは

六人「思はれませぬ

ト互に顔を見合せて案じ煩ふ有様は理せめて哀れなり

竹川「ア、其様な事は軍中には言ぬもの、昨日までも今日までも味方には一人も討死は無との沙

汰安心して居たが宜しう御座るオホ、、、ホ(と笑に紛らして)サア残つて居るのはたつた五ッ

ドレ私が手傳を致しませう

ト残の首級を化粧して盡く長持の蓋の上に置きたりけり。此時杉戸を明て(下手)甲乙の兩士出

來り竹川に對ひて

甲「ハッ 御局に申上ります首級の御手當は出来いたして御座りますか

竹川「今朝受取ましたは廿三、皆此通り出来上て居りますぞや

乙「然らば我々へ御渡し下され直に御櫓へ上ると致しませう

ト兩士は帳面に引合せて首級を局より受取り長持の蓋を擔いで原の杉戸の外に出たりけり

竹川「皆の衆さぞ骨が折たて御座りませう、サア化粧道具を片付て休息あつて宜しう御座ります

皆々「有がたう御座ります

ト銘々に受持の化粧道具を片付ける。此時襖を明て(上手)丙丁戊の三士此席に出來り

丙「御局それに御座りますか、唯今此御座敷にて諸大將方

丁「御軍議を御開きに相成ますれば

戊「暫く御退座願はしう御座る

竹川「心得ました、サア皆の衆参りませう

ト挨拶して六人を引連れて襖の外(上手)に出たりけり。三士は座敷を取片付け席を設けて控ふれ

ば、正面の襖を明させて浮田中納言秀家、石田治部少輔三成、大谷刑部少輔吉隆、小西攝津守

行長、長曾我部土佐守盛親、安國寺惠瓊、福原右馬助直高、川尻肥後守直冬、石川備前守貞清、木下肥後守頼繼いづれも思ひ思ひの鎧直垂裝束きて（但し安國寺は素絹を着し大谷は薄衣にて面を包めり）着座ある。浮田秀家は石田三成に對ひて

秀家「何に治部殿至急に軍議を決せんと又も會合の催あるは如何なる事の仔細で御座るか

三成「既に先刻も述たる如く家康には今曉密に岐阜を立ち長良川をば打渡り神戸を通つて赤阪に着陣したるは正しく實説追々の注進なれば此方にても其通り一刻も早く關が原へ押出す様に致し度御座る

秀家「スリヤ治部少には飽までも平場の軍に勝負を附んずものと望まるよか、人に勝れし御邊の才智愚は一ツも有まいが軍の事は又格別、當城に立籠り關東勢を喰留る其計略は我のみならず數度の軍に物慣たる諸大將にも同意の事それを今更徳川が其本陣を赤阪に移したりとて狼狽て城を出るは甚だ不覺

三成「アイヤ中納言殿憚ながら思召が違ひませう、家康が軍略と申すは池田淺野加藤福島其外の軍勢を當城押に残し置き旗本勢を引連て短兵急に攻上り先づ佐和山を攻落し大津伏見に關を据る大坂と當城の間をば立切べしとの謀さある時には天下の大事

惠瓊「何にも石田殿の宜ふ如く立切れては大坂の御安危とても氣遣はしく盛親「當城の軍勢は敵の中に取圍まれ後詰の道を失つて居ながら敵の虜とならん三成「夫故にこそ關が原に押出して家康勢を喰留んと申すのは軍旅に慣たる諸將の意見、何と萬全の計略では御座らぬか

吉隆「イヤ夫や治部殿の見込違ひ。總別途中の敵城に押の勢を残し置き先に陣をば進むるは孫吳の極意と申せども夫も時と場合に由ること當城には籠る軍勢凡十萬いかに敵があせつても後に見なして進まんは出来べき筈の事で無い、智謀に長たる徳川殿平場に引出す計略に浮と乗たら夫こそ大事で御座らうぞ

三成「又しても刑部少が徳川最負の臆病沙汰家康とて鬼神では御座るまい、關が原の一戦の必らず彼奴が押付の板をば見るは案の内

吉隆「ハテ耳新しい其詞貴殿には徳川殿の押付をば何時御覽なされたな

三成「外でも御座らぬ手前が家臣の島左近その以前甲州にありしころ彼奴が逃しを追掛たは何れも存知の事で御座る

吉隆「ハ、ア其時の家康と今日の徳川殿とを一ツに思ふは了簡違ひ、既に故太閤殿下にも弓箭の

上には御心を置せ玉ひし徳川殿容易き敵と思はれたら軍の當が外れませう、又この吉隆が臆病か
關東勢に總角を見するか見せぬか其時に篤と御覽あつて宜からう

盛親「長詮議は時刻後るよ、シテ中納言殿には關が原へ出陣は御不同意で御座るとな

秀家「何にも不同意、他までも當城に立籠り徳川勢を喰留るが一ツの計略

行長「拙者とても其通り平場の軍に懸引の妙を得たる徳川と知て居ながら此城を打て出での合戦は
危しく

直高「中納言殿を始として刑部少殿、攝津守殿揃ひに揃つて家康を夫程までに恐れ召さるか

行長「ヤア舌長し右馬助、既に昨夜島津殿が徳川勢の本陣に夜討を懸んと申されしに我々何れも同

意なりしを御邊は治部少の肩持て事危しと支へたは怖氣立ての卑怯未練

直高「卑怯とは奇怪千萬

三成「三成までも譚し召さるか

ト石田福原其外の諸將は大谷小西を相手に取り勢込で詰寄せれば大谷小西も寄らば討んと構たり。

浮田秀家は双方を取領めて

秀家「諸將の口論尾籠なり鎮り召され

ト制すれば何れも一時は鎮まつたり、秀家は更に三成に向ひて

「シテ島津殿の所存は如何に

三成「島津父子は固より拙者と同じ見込で御座る

秀家「シテ又關が原の手配は

三成「先づ當城には福原右馬助を大將に垣見熊谷木村秋月を留主居に残し中納言殿には刑部少と一

ツに成り天満山に御陣を取られよ

惠瓊「又某は土佐殿と一ツに成て南宮山の麓に廻り吉川毛利に力を添へん

盛親「脇坂朽木其外は松尾山の下手に進み金吾殿の先手となり三方よりして徳川勢を中に取籠め押

包まん

三成「此三成は島津殿攝津守殿と諸共に御旗本の弓鐵砲を引連て菩提山の麓より虚空藏山をば取切

て敵の後に打て出で前後一度に関を合せて戦はゞ家康勢は只一戦に慶、これぞ即ち出陣の軍略で

御座る

ト滔々と辯すれば福原川尻木下の諸大將みな同意とぞ見えたりける、大谷吉隆は小首を傾けて

吉隆「サウ参れば十分なれど先づ第一に山断のならぬは金吾殿

行長「毛利吉川兩家の軍勢これ逆も確と頼には相成まい

ト懸念の語氣を露はせば軍機を沮むを恐れてや

秀家「其懸念は扱置て、ナント諸大將方何もの御了見は

貞清「中納言殿小西殿大谷殿長束殿

直冬「此四將こそ御異存あれ

頼繼「其外の諸將には何れも出陣

皆々「同意で御座る

ト異口同音に答ふれば秀家も今は斯と決心して

秀家「然る上は軍議に時刻を移すは不覺、秀家何にも御同意いたす

三成「スリヤ御同意下さるとな、シテ刑部少輔津守には

ト問へば兩人も同じく決心して

吉隆「此上は我々共も御同意いたし總勢直に押出して

行長「明日の軍に關東勢一泡吹かせて見するで御座らう

秀家「然らば出陣を御觸召され

三成「左様致すで御座らう、イヤ中納言殿御一所に

ト立てば秀家は少し考へて

秀家「手勢の者に申付る品も御座れば御構なく御退座あれ

皆々「然らば御免

ト諸將みな會釋して元の襖の外にぞ出たりける。後に秀家唯一人手を叉きて默然たり、明石掃

部延原土佐は杉戸(下手)を明て入來り一禮して

掃部「唯今御換外にて承はつたれば治部殿初め諸將には敵將家康が流言の計略に陥り當城を立出で

關が原にて合戦と思ひ立しは味方の敗軍目のあたり然るに籠城の軍議に於て我君へ御同意ありし

は僅に大谷小西の兩將

土佐「其餘は福原長會我部石川木下川尻なんど安國寺に至るまで皆治部少に同意なし平場の軍議に

決せしは味方の武運も是迄と残念に御座ります

秀家「ム、併し勝負は天運次第、假令家康何程の智略を盡して戦ふとも故太閤殿下の御舊恩を忘れ

ぬ人の多ければ勝利を得られぬ事も有まい

掃部「アイヤ其思召は空頼み關が原にて平場の合戦それぞ彼家康が望む所の戦なれば味方の敗軍必

定にて最も危く存すれば
土佐「我君には總大將を御辭退あつて御國許へ御引上げ然るべう存じ奉り
兩人「此議言上仕る

秀家「そは尤なる意見なれど軍議の合はぬを意趣に持ち總大將を辭退して本國備前へ引上なば世上の嘲り物嗤ひ殊には又故太閤殿下の御舊恩に背くに似るの恐あれば敗軍なりと存じても采配取らねば相成らぬぞ
掃部「ハテ是非も無き御決心、是と申すも武門の意地無念な事に御座りますなア……
秀家「實に藥師寺が口吟「取もうし取らぬもつらし武士の
土佐「捨べきものは弓矢なりけり」
掃部「それも恩義に捨られず

秀家「此が武門の(ト主従三人互に顔を見合せて)覺悟であるぞ
ト流石に秀家は此時よりして關が原の敗軍を心に覺悟したりけり(是ニテ道具廻ル)

(第二) 赤坂御出陣 (同く十四日夜半過)

此は赤坂勝山なる徳川内府家康公の御本陣なり。御座所は(二重)其所の農家にて障子疊もあらばこそ床の上に吳座を敷き其上に敷皮を敷て御座となし御具足櫃御打物ども破たる壁際に置かせられ燭臺一ツぞ點させたり、軒先には紫に白く葵の御紋を染抜たる幕を張らせ、庭上(平舞臺)には金扇の御馬印「厭離穢土欣求淨土」の八字を書たる大幟および白旗數流を建置かれ、陣箒を焚せ、外面には二紺三白の幕を打廻したり。内府には唐織純子の御小袴に黒の御紋付を召させられ唯今御夜食を畢らせ玉ひしと見えて木具の御膳の上に御辨當箱の空たりけるを載て御座の隅の方に寄せ、御茶坊主休圓に手傳はせて黒糸絨の御腹巻を召し其上に黒の廣袖の御羽織を召て敷皮の上に座らせ玉ひ、竹篋の椽の上には本多上野介正純ぞ侍座したる。庭上には小栗又市、米津清右衛門、門奈長三郎、阿部左馬助、渡邊忠右衛門、水野左近、久世三四郎、大久保平助、關左馬之助、山口勘兵衛など云へる一騎當千の勇士いづれも鎧腹巻してスワと云はど唯今にも打立んと控へたり(是にて道具止る)内府家康公は遙か向ふの山岳(遠見の書割)に松明の益々加はるを御覽あつて上野介に向はせて

内府「どうだ上野あの松明では敵勢はソロ／＼動き出した様であるが、毛利勢の拵は如何いたした上野「吉川廣家福原式部の兩人より神文を以て御忠節の儀を申上げ此方よりは井伊直政本多忠勝福

島正則黒田長政連署血判の記請を差遣はして御座ります

内府「ム、夫でよい」

404. 上野「但し小早川秀秋の方は今朝の誓詞の儘に御座りますれば猶入念の爲に御使を遣はされ度存じ奉ります

内府「イヤもう使を出すに及ばぬ秀秋が裏切は大丈夫であるぞ

上野「とは存じますれども松尾山に陣取たる大軍なれば

内府「ハテ叛いたら討破る分の事、天下分目の合戦に秀秋ごとき若輩ものよ忠節をば恃にして軍は致さぬぞ

上野「ハッ恐入て御座ります

此時御幕外(平舞臺下手)より申次の侍兩人にて大なる柿を籠に入たるを持出して椽端に置き上野介に對ひて

申次「ハッ申上ます、八條村瑞雲寺の住職よりはなる柿を獻上いたして御座ります

ト奏すれば内府は其柿を御覽あつて

内府「ハテ美事に大きい柿ではある、ム、今日計らずも此大柿が(ト彼籠に御手を掛させられて)サ

ア大垣が手に入たぞ、ソレ悴ども分取せい

ト籠の柿をば御手づから庭上に(平舞臺)時散し玉へば鈴々に「ソレ大垣の分取ぞ」と争ふて奪ひ合たり、内府は悦ばせ玉ひて

「ヤッ勇しい、上野その坊主に寺領を遣はせ

上野「畏て御座ります

此時御表の方(向ふ揚幕)より取次番の侍一人出來りて上野介に向ひ

取次「申上ます黒田甲斐守長政陣所より毛谷主水御注進として參上仕つて御座ります

内府「毛谷主水が參つたと、是へ呼べ

トの御説に取次番は承つて退けば、直に毛谷主水は大荒目の鎧に猛者遣の陣刀を挿み兜をば脱で高紐に掛け遙か彼方に(花道)止まつて一禮すれば

内府「主水注進であるか近う」

上野「御前近く進まれい

主水「御免下さりませう

ト會釋して椽先近く來れば

内府「遠慮に及ばぬ夫へ腰を掛い
主水「ハツ有がたう存じ奉る

ト様先にありける石に腰うち掛れば

内府「シテ注進の次第と申すは

主水「餘の儀にあらず上方勢は今夜いよく大垣の城を出で關が原へ押出す模様儘に相分つて御座ります

内府「ム、さうで有う、シテ又上方勢は總人数何程あると見積たな

主水「先づ二萬四千多くても三萬とは御座りますまい

上野「ハテナ、是まで諸手の注進では十二萬以上の大軍なりと申せしに……

主水「何にも頭数は十三萬近うも御座らうが、小早川勢は御忠節と相分り、毛利勢は手出しをせず

に軍見物、その外朽木脇坂は二心、浮田小西石田大谷銘々所存は別々にて離れくの軍立、浮足

立たる軍勢なればスワ合戦の場に臨み踏止まつて戦ふ者は三萬とは御座るまい、主水が見積たる

人数の物見斯の通りで御座る

内府「さうで有う、軍慣たる毛谷主水勇士の眼力家康感心いたしたぞ

主水「御賞詞あり難う存じ奉る三成はじめ大垣さへ出ますれば御勝利は只一戦恐悦に御座ります

内府「余も左様に存するぞト御側に在つる饅頭の折を取出し玉ひて主水注進大儀で有た饅頭を取らせやう

ト右の折を與へ玉へば上野介取次で主水は拜領なし

主水「實は先程より駈廻り空腹の折から別して有がたう頂戴仕ります(ト折の蓋を明て頻に饅頭

を食ひけるがト気が附て)猶物見を致しますれば是にて御暇を賜はりませう

ト一禮なし右の折を持ち食ながら退きたり(向ふに入る)是を見て諸人みな吐と打笑へば、内府

は御氣色を變らせて

内府「何を笑ふぞ數度の軍に武功を顯はしたる覺の侍あの眞似が出来たら致して見い

ト吐り玉へば皆恐入てぞ候ひける。此時また取次番の侍御表より(向ふ揚幕)出來りて

取次「申上ます福島左衛門大夫正則伺候いたして御座ります

内府「是へと申せ

取次番はハツと承はつて退けば上野介は首を傾けて

上野「正則が唯今俄の參上は……

内府「ム、扱は上方勢が愈々残らず大垣を繰出したと相見えるな

ト早くも覺らせ玉ひたり。福島左衛門大夫正則は大錯にて罷出て立禮なし(花道にて)直に御椽端に來れば、上野介は侍ふ者に差圖して床几を出さしむ、正則は是に腰を掛け

正則「追々の注進にて御聞遊ばして御座あらんが浮田秀家を始として石田三成大谷吉隆島津義弘同家久北外大垣に立籠つたる上方勢の諸大將愈々擧つて繰出し關が原へ陣取いたす様子なれば此方よりは明日早天軍を仕掛け唯一戦に切崩さんと存じ申せば早々御出馬遊ばされ然るべう存じ奉る内府「ム、尤なる存寄いかにも其許の勸に従ひ是より出馬いたすであらう。イヤ家康が思ふ圖に陥り關が原へ押出すとは此上も無い味方の勝利

正則「スリヤ大垣を出ましたは内大臣家の御計略とな

内府「籠城されては一戦に征伐いたすに事むづかし其故にこそ押を置き上方さして攻上ると言觸させたが扱は乗たと相見えるワ

正則「恐入たる御明算明日の御利運は聊か以て疑なし、シテ御出馬の御刻限は

ト尋ねれば内府は立て椽に出て空を打眺め玉ひて

家康「最早夜半を過たれば一番難に先手を繰出し昨日通りの次第にて關が原まで進み往かれよ

正則「ハッ、シテ又途中の御軍法は

内府「竹も木も入るものか背の軍法で十分だぞ

上野「然らば其旨を總陣に觸させませうや

内府「ム、合詞は山は山籠は籠と相改め總軍みな左の綿嚙に角取紙を印に附け味方打なき様に致せと觸させい

上野「ハッ、畏つて御座ります

ト椽を下り幕際(下手)に來り「御使番の衆」と呼べば安藤帶刀出來る、上野介は是に向て傳達をなす。福島は後の山嶺に松明簞の次第に多くなるを見て

正則「然らば拙者は是より出陣の用意を仕るで御座らう

ト立掛れば

内府「左衛門大儀で御座るぞ

正則「御前こそ御老體にて御座れば……

ト云はせも果す内府は椽の上にて三ツ四ツ身軽く飛上て見せ玉ひて内府「左衛門、老體でもまだ此通りじゃハ、ハ、ア

ト笑はせ玉へり。正則は此御勇氣の盛なるに敬服して首を下け

正則「恐入て御座ります。イザ御先に(ト禮拜して後の山嶺を睨み)明日の軍に三成めら一挫にして

御覽に入れう

ト退きたり(向ふ揚幕に入る)内府は正則が後を見送りながら椽先より山嶺の簀松明を御覽じて候ふ輩に向はせ玉ひ

内府「一同あの簀を見い、夥しい光では無いか、明日の合戦にはあの軍勢蹄に掛けて一陣残らず蹴散して征討いたすぞ

ト宣はせて猶も光の往來をば心を籠て見させ玉へり。此時鶏の鳴音の聞えければ上野介は幕際より立戻つて

上野「只今一番鶏に御座ります

内府「直に旗本を繰出させい

上野「ハッ畏り奉る(ト幕際に来り大音聲にて)御出馬の御用意

ト呼べば幕外にては大勢の聲として「應」と答へたり。此時休圓は御兜を持出して

休圓「御兜を……

と申上れば内府は御兜を御覽じて

内府「彼子供等を仕置いたすに兜などが入るものか、頭巾もて

ト宣ふにぞ休圓はハッと承はりて御兜を置き茶縮緬の大黒頭巾を差上れば、内府は是を冠らせながら居並たる諸士に向はせ玉ひて

内府「コリヤ明日の軍に不覺を取り親や祖父の面を汚すまいぞ

皆々「畏りました

此時既に先陣にて螺を立る音の聞ゆるに、内府は休圓御手傳にて御草鞋を穿せられて

内府「目出度出陣(木の頭にて)吉例の馬を引い

ト宣はせたり (此觀よろしく幕)

第三幕

扱も關が原の合戦は九月十五日の事なりけるが大坂方の軍勢は諸軍果して合期せず其上に金吾中納言秀秋の裏切の爲に總軍敗北したりければ浮田中納言秀家の手も遂に天満山に利を失ひ秀家には討死と決心ありけれども明石掃部等が達ての諫に其場を落て伊吹山の方へと退かれたるに主従僅か六人にぞ成たりける

(第一) 伊吹山の落足 (應長五年九月十五日の黄昏)

此は伊吹山の麓にて樹木深々と生茂り晝なほ暗き所なるに(二面の平舞臺)秋の末の事なりければいと凄しき勝りけり。此近所の野伏共は關が原の落武者を待伏して物の具剣取らんとて市作、仁藏、三太、四郎介、五郎八、六兵衛、七九郎、八平など云へる惡徒等は小具足に身を固め竹槍又は山刀ども得物に携さへ惡婆お梅お六と共に二股不忠太(鏡)及び實内、胡麻平と云へる兩人の家來を中に取圍みたり(是にて幕明く)

市作「うぬ落武者め

皆々「動きやがるな

ト罵れば實内胡麻平は悔りして後に退るにぞ二股不忠太は怖りながらも弱味を見せじと力身返つて

不忠「ヤア取にも足らぬ野伏共、落武者などとは奇怪千萬、關東方にて鬼神と人に喚れし本多平八郎平の直政とは我事なるが病の爲に戰場より一旦これ迄引上たれど汝等ごとき五人や十人、無禮を申すと許さぬぞ

ト震へながら言ければ女原は是を聞て

お梅「關東方も無もんだ佐和山勢の落武者で今朝から諸方を逃歩き

お六「まだ兵糧にもありつかず腹が減て歩行けぬのを病の爲だとへらす口

お梅「その瘦我慢は止にして

お六「命が惜くば身ぐるみ脱で

お梅「尻穗を巻て

二人「逃るが宜ワ

ト惡婆の本性顯はして罵れば不忠太主従は益々驚き

414

不忠「扱は汝等は言合せ此山中へ連込だのじやなア
 市作「オ、關東方から言附られ大坂勢の落武者を討取ための手配だ
 仁藏「命が惜くば裸體になり犬つくばひで逃れば宜し左も無エ時は免されぬ
 三太「片ツ端から首にして關東方へ持て出やうか、落武者返事は
 皆々「どうする積りだ
 ト詰寄られ不忠太いまは斯よと覺悟して

不忠「イヤ夫にて事から相分つた、宜しいく、病中でさへ無い事なら何の汝等の五人や十人物の
 數とは思はぬが何を申すも病には勇士も殆ど閉口いたせば肌附の金子大枚十兩只今取出して遣は
 さう、夫にて主従三人の命を助け宅へ連行き麥飲なりと茶粥なりと腹一ぱい振舞て落してくれ、
 ハテ今度こそ不覺を取り斯く敗軍は仕たれども始終の勝を感る我軍法の極意に於ては聊か耻る
 所にあらず願て四海を納むる節は今の報は百倍にも致して遣はす程に夫を頼みに待て居やれ
 ト左も横柄らしく言へば悪婆等は前へ出て打笑ひ
 お梅「ハ、ハ、ハ先きから様子を見れば憶病武者めが飯なり粥なり食せてくれいととうく本音を
 吐やがつた

415

お六「こんな腐た生首は取た所が仕様が無から早く剥て助けて遣んなよ
 不忠「去とては情ない、女めら迄身共を侮り其雜言は無禮千萬
 實内「夫と云ふのも御前様が
 胡麻「お弱いからで御座ります
 市作「イヤ如是奴等が佐和山で力身で居やアがるから今日の軍に負た筈だ
 仁藤「見るから間拔な此首を取た所が金にも成め
 三太「命を助けて遣る代り身ぐるみ剥から
 皆々「覺悟しろ
 不忠「イヤ返すくも無法な奴輩腹は減ても二股不忠太汝等が手込に成ものか
 トわなくと震へて居れば
 お梅「アレまだ減す口をほざきやがる
 お六「何でも早くむいてお遣よ
 實内「イヤ是だから女ほど
 胡麻「世に恐ろしい者は無のウ

市作「エ、嗚々とぬかしやがるな

ト野伏等は打寄て三人を打据れば三人共氣絶したり。是を見て

お梅「オヤこりやモウ死て仕まつた様だ

お六「サア早く剥が宜よ

市作「思の外に脆い奴等だ

ト主従三人の物の具衣服肌附の金子ども盡く奪ひ取たり。折しも遠くにて竹螺の音の聞ゆれば

お梅「アレ〜山手の後に當り

お六「合圖の螺が聞ゆるぞへ

市作「モウ此奴等に用は無へ後の仕事肝心だ

仁藏「夫じやア剥だ雑物は女二人に預けたぞ

お梅「アイ〜慥に預つたよ

市作「サアミンな来い〜

ト打連て山手の方へと(上手)赴きたる。斯る所に下道より(向ふ揚幕)より早腰拔太郎蓑笠にて
出来り(花道にて)

拔太「天高しと雖ども腰を屈め厚き大地も荒くは踏れず實に落人の身の上ほど世に味氣ないものは
無し、ハテ是非も無き事じやなア(ト生面に言て直に本性を顯はして)イヤ既に落る此首を拾つて
来たのがまだ儲けじや些とも早くさうだ〜(ト麓に(舞臺)來り不忠太主従三人が仆れて居るを
見て打驚き)ヤア〜こりや兵糧奉行の二股が裸體に成て仆れて居るは、ム、是も同じく剥れた
な。剥残でも有ならば此間に卷上げ浚つて行う
と立寄て腹のあたりを探り廻せば、是にて不忠太息吹返して

不忠「ア、これ命ばかりは助けてくれい〜

拔太「アイヤ二股殿身共で御座る早腰拔太郎で御座る

ト言はれて不忠太顔を見て

不忠「オ、左いはるとは早腰殿ア、遅かつた〜今一足貴殿の來のが早かりせばかく暗々と丸裸に
は成まいに

417. 拔太「イヤ早いとて當には成らぬ身共も今がた此後の森の陰にて斯の通り

ト蓑笠を取て見すれば同じく緋絆一巻なり
不忠「扱は御邊も

拔太「其許も」

不忠「ハテ是非も無き身の」

418.

兩人「はぎ力じやなア」

ト顔見合て投首なし涙にくれて居たりけり。折から家來の兩人は息吹返して起上り

實内「ヤ、こりや丸裸に剥れたか」

胡麻「旦那は兎もあれ我とは」

實内「裸で雑兵が」

兩人「なるものか」

ト當惑してぞ居たりける拔太郎は不忠太に打向ひ

拔太「何に二股殿命あつての物種と下賤の者は申せども首の無にも劣ると云ふ一文無の此姿如何い

たしたもので御座らう」

不忠「イヤ一文無は扱置て何をか包まん某は今朝よりしてまだ兵糧にも有附ねば腹はへこく眼は

グラく思へば今度の出陣に兵糧奉行を言附られ賄方の上米を刎た報ははや的面ア、天罰は怖い

もので御座るなア」

拔太「然らば茶腹も一時ゆる其所ら澄の流を尋ねせめて水でもたらふく飲で一時凌を成されたが宜

い 不忠「何さま夫ぞ急場の名策コリヤく二人の家來共其所らあたりに流は無いか」

實内「斯なつては他人むきモウく主人は入ません」

不忠「ヤア夫では汝濟まいがなア」

實内「イヤひよろく武士の主人などは是から先は足手纏ひ」

胡麻「オ、さう共く斯なつては自分の首が大事ゆる主人は何れ捨物だ」

不忠「チエー家來にまで其様に見離されしか情ない責て此等が美濃路なら兵糧と云ふ(養老)瀧もあ

り腹の足にも成うのに」

拔太「此は近江の伊吹下もゆる艾の俄鬼道に頼だ灸をばすへられて

實内「此方は是から堅田へ落ち」

胡麻「洒落てはだかの落腐だ」

不忠「奴さうぬかせばモウ是まで」

ト實内が腰の邊へ喰ひ付けば

419.

實内「アイタ、(ト突放ちて)エ、何で尻へ喰付のだ

不忠「オ、尻こぶたの肉計は人間のでも食ると聞たゆゑ夫で腹を凌ぐのだ

胡麻「コリヤ飢るいのが込上て人の肉まで食ふ氣に成たか

不忠「オ、そこが軍の修羅道だ

拔太「イヤそりや病犬の畜生道だ

實内「此奴は險難

皆々「逃ろく

不忠「イヤ逃るとして逃さうか

ト追廻して不忠太は大口明て二人の家來を喰はんとす家來は遂に雲を霞と逃去たれば不忠太は

拔太郎に飛懸る、拔太郎は笠を取て不忠太が口へ風を扇ぎ込めば不忠太は蜆貝を足に附たる張

子の虎の如くに飛あるきしが餘りに風を扇ぎ込まれて恰も風の漏たる様になつて不忠太はぼつ

たりと倒るれば

拔太「頼と手遊の虎の様じや
ト後を見捨て逃行たり (是ニテ道具廻ル)

(第二) 山腹の辻堂 (同日の宵)

伊吹山の中腹に一個の辻堂あり古く荒れて軒傾き椽朽て蜘蛛のみぞ掛渡つたる、左なきだに暮
ゆく秋の哀さは何所も同じ事なれど今夜は殊に月さへも村雲に覆はれて曇りつ照つ見えつれば
景色も更に物凄し。辻堂の椽には浮田中納言秀家卿すでに物具脱捨て小袖ばかりに小袴を召し
腰打掛ておはしければ其左右には長船吉兵衛、西山久内、浅井與九郎、内御小四郎の四人これ
も皆鎧脱捨て小手脚當のみして何れも布にて疵所を巻き一息吐てぞ居たりける (是にて道具止
る) 時に竹螺の音の聞えければ長船は耳を欬てよ

長船「ハテ心得ぬ麓に當り先刻より竹螺の音の聞ゆるは

西山「もしや我君此所へ

浅井「御座ある事を知り傳へ

内御「取巻く合圖に

四人「あらざるか

ト心を惱ませば秀家は悠然として

關原奪凱歌

秀家「イヤ敵が寄て参りなば討死いたす分のこと左様に配慮いたすに及ばぬ夫は格別進藤三左衛門が相見えぬが只今の間に何れへ行たるか

長船「峻岨の道に我君には御息切の遊ばされしを心配いたし水を一口差上んと谷川の流の音を便となし水を尋ねに参つて御座る

秀家「斯まで我を思ひくれる新参者の三左衛門我落足の供に連れ不便の討死さするのは残念じやの

長船「此場に臨み左程まで御情あまる御詞御譜第新参の差別なく

西山「誰が我君を見捨て奉り申さんや去ながら追々近づく螺の音は

淺井「敵方の追討に附入られては御一大事

内餌「唯今にも三左衛門御水を持参なさば

長船「直に御立御座ある様存じ奉る

秀家「何れもの心底秀家満足に存するぞ關が原にて今日の一戦固より我は敗軍と兼て期したる事なれば天満山に踏止まり最期を遂んと存せし所明石掃部が達ての諫に一方を打破り簇がる敵の中を駈抜け斯く落延は致せしが本國備前に恙なく下らん事は覺束なし討ち討たるよも兼ての覺悟ハテ

恐るよには及ばぬ事じや

ト更に恐るよ色もなし。竹螺の音の益々近くよと思ふ所に關東勢の物頭西脇源五郎は甲乙丙の

諸侍三人軍兵六人引従がへ野伏十人を案内に立て麓より押寄來り(向ふ揚幕より)秀家主従を見

西脇「疑も無い大坂方の大將ソレ討取れ

ト下知をすれば軍兵野伏われ先にと打て掛る、長船西山淺井内餌は心得たりと秀家を後に圍ひ

此を先途と防戦なし寄手許多討取たれば西脇は叶はじと原來し道に逃歸つたり去ども四人とも

今朝よりの戦に疲れ果たる上に残らず深手負たれば枕を並べて仆れたり秀家も自から太刀を抜

持て戦ひけるが今は唯一人になつて討死の骸を見玉ひて

秀家「不意の追討に出會て頼に思ひし四人の勇士も枕を並べて最期を遂しか

(是より床の淨瑠璃に成て)

淨「暫し涙にくれ玉ひしが。是までなりと覺悟を極め。辻堂の椽に。どつかと座を占め。西に

向て禮拜なし

秀家「秀家と故太閤殿下の御高恩この身に餘り今度御幼君の御爲に三成行長其外と申合せ家康退治

の義兵を擧げ軍略一途に廻らしたれど大垣の籠城に我見込も行はれず平場の軍の關が原かく一戰に敗れしも畢竟これ皆天運時節、此上とも御幼君の御前途を御見届は申度れども無き棄武者の手に懸り此首級を取られんは秀家ばかりが殿下の御名まで汚し奉るの恐あり(ト腰に差たる脇差を抜取りジツと見て押戴き)此一腰は御在世の其砌り拜領いたして此通り肌身を離さぬ鳥飼國次この短刀にて今日唯今秀家自殺を仕つる、戦場の不行届は未來で御託を申上るで御座らう
淨「胸くつろけて秀家は。既に斯よと覺悟の折から。斯とは知らで三左衛門。谷間の清水汲上て。漸々戻り来りしが。夫と見るより駈寄て

三左「コハ何故の御生害に御座りますか

秀家「何故とは似合はぬ尋ね四方八方皆敵勢いづくを差て落行べき唯今秀家心靜に生害いたす三左衛門介錯いたせ

三左「イヤまだ御生害の時節に非ず多寡の知れたる坂東武士御後を慕ふとも山傳へに落行かば通路は至て心安し、イヤ御供仕りませう

淨「いささせ玉へと勸むれど。秀家これを否ませ玉ひ

秀家「其志は過分なれど捕はれては死後の耻辱名こそ惜けれ武士は最期の際が大切じやぞ

三左「御尤には御座れども一旦敗軍いたしても大坂の御城には秀頼様御座あつて西三十三國は唯今以て大坂方、毛利殿を先として島津立花小西増田この殿方と心を合せ大津伏見を差固め御防ある時は徳川退治は案の内、兎も角も此場を落ち大坂さして御引あそばせ

ト頻に勸め参らすれば秀家は實にも然りと思はれてや

秀家「左程までに申す上は一旦は其方が勸に任せ此場を落んが若し途中にて敵に出會ひ道れぬ時に相成らば……

三左「其時こそは三左衛門恐ながら御介錯を申上げ敵には決して渡しませぬ御心強く思召せ

淨「詞を盡して諫むれば。漸々と打詰り

秀家「然らば思ひ止まるぞ

ト短刀を鞘に納め玉へば、三左衛門は悦びて

三左「スリヤ御聞入遊ばして下し置れますとな、チエー有がたう存じます。イヤ拙者が持参の清水召上られませう

淨「刀の鞘に汲入て。持参なしたる清水をば。召させ玉へと差出せば。秀家これを取上て

三左「斯る非常の場合ゆる器とても御座りませねば餘儀なくも鞘に汲入参りました

秀家「ム、其方が忠義の魂を納むる器の水なれば心も清き此神水

淨「押戴て飲たまふ。御心根の計られて。勿體なくも痛はしく。沈む心も修羅道の。大鼓に
あらぬ山彦か。木魂に響く太刀音に。火花を散らして延原土佐。痛手に屈せぬ忠義の魂ひ。
飛ぶが如くに駈來り

ト土佐は麓(向ふ)より敵方の軍兵兩人を相手にて戦ひながら駈來り一人を切倒し一人を取て投
退け秀家を見て

土佐「オ、我君には夫に御渡なされましたか

秀家「ム、土佐か宜く存命で居たな

土左「笹尾峠の戦に斯の通り深手を負ひ既に最期と存せしが御行衛の覺束なさに是まで御慕ひ申し
て御座る、此場は某し殿を仕つればサ、少しも早く

淨「落さへ玉へと云ふ辭も。脆き木の葉の秋霜に。萎るゝ體に三左衛門。抱き起して介抱なし

三左「コレ土佐、痛手なれども急所は除たり君の御大事氣を勵まれよ

淨「力を附れど大事の深手。君の安泰見るよりも。氣の張弓も引弱り。其儘息は絶にけり

秀家「もはや落命いたせしか

三左「残念に御座ります

淨「主従涙に暮けるが。三左衛門は立寄て。土佐が首級を取上て

「せめて首級を取隠し敵に渡さぬ寸志の手向

淨「甲斐々々しくも土中を穿ち、首級を埋め合掌なし。佛名唱ふる秀家卿。又も涙に暮たまふ。
隙を覗ひ以前の軍兵。大將目掛けて切附れば。三左衛門は引捕へ。何なく颯と切倒し

「御身に過これ無きうち少も早く御用意を

秀家「とは云へ勇士の亡骸を此儘置んは不便の至り

三左「不便には御座れども此儘置くも我君の御行先を暗ます手段、また土佐が骸に首の無こそ幸な

れ是屈竟の御身代り、辻堂の内へかき入れ火を懸置かば恐ながら我君には御生害あらせし欺と敵
を欺く一ツの計畧

秀家「オ、宜ぞ心附たるな

三左「誠に土佐は果報の武士死後まで君へ御忠節

秀家「思へば痛はしい最期よなア